

---

# ジールヴェン【携帯投稿版】

宇乃弘晃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジールヴェン【携帯投稿版】

### 【Zコード】

N7105F

### 【作者名】

宇乃弘晃

### 【あらすじ】

ラプラスの悪魔は死んだ。穏やかな平和に包まれる【蒼穹世界】で生きてきた青年、相原健吾。巨大な機動兵器による果てなき争いが繰り広げられる【暁世界】で生きていた少女、コイ。世界という名の壁に阻まれ決して邂逅するはずのなかつた二人が出逢うとき、宇宙は運命から解き放たれる。革新する未来の調律。それは、神の定めた理を破るジールヴェンの鼓動。多元宇宙を飛び越えるSFロボットアクション。

【こちらは携帯投稿バージョン】  
です。近日、カラーイラストと本編修正を加えたパソコン投稿バージョン

ジョンとして作品をリニューアル致します。

何者かの手によつて碎かれた秩序が混沌となるのか。あるいは、自然の摂理によつて氷解した秩序が混沌となるのか。運命と呼ばれた、目には見えない巨大なうねり。その始まりに思いを馳せるのは、果たして本当に意義のあることだろうか。上空を荘厳な金色で焦がし尽くすこの暁は、世界に生きる全てに等しく無慈悲である。空の下には、人の姿を象り意匠化した兵器たちが、気まぐれな死神に導かれて殺陣の舞を踊つていた。

右マークピューレーター携行【九七ミリ碎榴弾ライフル】消失。  
左マークピューレーター携行【プラズマソード】帶電率一八パーセント低下。

左マークピューレーター甲部内蔵型【スナイプダガー投射機構】残弾数三。

右腕部可変型【一五〇ミリ粒子ビームランチャ】強制冷却中。  
左肘部スライド式【高周波振動ブレード】破損。  
胸部内蔵型【C.I.W.S機関砲】残弾数〇。  
左腰部側面可変型【リニアアーチャルガン】残弾数〇。  
両脚部展開型【マイクロミサイルサイロ】破損。  
右背部マウント式【長距離エネルギーキヤノン】分離後破棄。  
両肩部展開型【ファイアードジェネレーター】パワーダウン。  
自分の手を取つてダンスのステップを踏む死神は、そろそろ宴の終焉を望んでいるらしい。単騎で敵拠点を制圧するべく設計された自慢の愛機も、大幅な戦闘能力の低下を伝えている。目まぐるしく情報を開拓する幾多のモニターと、武骨なコンソール群で周囲を構成されたコックピット。中心で操縦桿のグリップを握り締める自分

自身の荒々しい呼吸が、先から続く壮絶な消耗戦を物語る。

「はあ、はあ、」

白のパイロットスーツに身を包んだ細い体付きと、息遣いに混じるその高い声色は、精錬な兵士を気取っている自分が未成熟な少女である事實を、嫌というほどに自覚させた。ヘッドアップディスプレイを睨みつける。数え切れないほどの敵機が「」に肉薄するさまを、光点と言語が混在するデータによつて訴えていた。友軍機を示すマークは一五分ほど前に全て消失している。ふと自嘲氣味に笑つてみた。

「分かつてた。いつかこうなること」

コソソールに指を疾<sup>は</sup>らせる。

C I F 意識情報フィードバックを最高感度、全感覚にフルレスポンス。

F C S 火器管制システムを現状に最適化、兵装プログラム転身。

C M G 姿勢制御のリミッターを解除、機体各部位の稼働領域を最大に。

「ごめんね ジールヴェン、最期まで付き合つてもうひつかい」

ジールヴェンと名付けられた我が愛機。

上半身の胸部と両肩部、下半身の大腿部が巨躯で力強いボリュームをもつ反面、両腕部および腹部はスマートで鋭角的なフォルムという独特の流線形シリエット。数多くの可変内蔵兵器を有する全身の装甲は、胴体の紫と四肢の群青で彩られ、各部の凹凸が生むコントラストと相まって立体的な重量感を誇示している。

その ジールヴェン を四方から囲うのは、敵軍の量産機 ミニア。全機が灰色で統一された没個性な機体だが、簡略な内部構造ゆえに極限まで追求された広い汎用性と高い信頼性は未だに一線級である。

「さあ、行くよ！」

握り締めた左右のグリップを力強く前方に押し込む。機体背部中

央の光圧式スラスターを全開に出力させ、ジールヴェンが敵陣へ突進する。正面で陣形を組むミシア数機がこちらにサブマシンガンを照準、銃口から鉄の塊が立て続けに発射された。

ジールヴェンは機体各部のスラスターを噴かせて変則的な回避運動を取りつつ、掃射をかいくぐり低空飛行で直進、振り構えた左マニピュレータ甲部からスナイプダガーを投射する。最も接近したミシアの下腹部内側にある動力チューブを裂き貫いて、その本体に誘爆を引き起こす。

爆ぜる炎の向こう側で、爆風から逃れようとステップ機動をとる二機を捕捉する。一射目及び三射目のスナイプダガーを投射、徹甲仕様の刃が炎を裂いて続けざまに両機の頭部を潰した。カメラの復旧機能が作動される刹那に追撃、先に頭部を潰した方のミシアコックピットを串刺しにする。スラスターを再び全開にしてプラズマソードを突き刺したままの敵機を、後に頭部を潰した方のミシアにぶつけて押し返す。敵機に後方へ向かう慣性法則が働いたところでプラズマソードを引き抜き急制動をかけ逆噴射。

ここで、ウェポンプラットホームを映したモニターの項目に『S T A N D B Y』という字列が表示された。

「いい子ね、ジールヴェン」

冷却の完了した右腕部がビームランチャーに変形する。照準。薄紅色に輝く粒子を高濃度に圧縮して加速、鋭い銃声と共に撃ち放つ。放たれた一条のビームが、折り重なつて後方に飛ばされるミシアの動力炉を二機もろとも貫通した。爆発に次ぐ、爆発。

間髪入れず次のターゲットへ距離を詰め、最大稼働の左腕部が生み出す運動エネルギーをのせた強力な袈裟斬りでさらに一機を葬り去る。常に敵機との混戦状態を維持した戦闘機動。これにより遠方でジールヴェンを狙う支援機が、誤射を恐れて狙撃を躊躇うのだ。遠距離からの集中砲火を封じる戦術のひとつである。

機体後面に展開する、背部中央の光圧式主推進を含む大小一基のスラスターが、重武装に反した高い機動力をジールヴェン

へ齋もたらしている。

敵陣を縦横無尽に搔き乱しながら、刻々と移り変わる戦いの流れに呼応してプラズマソードとビームランチャーを奔らせ、標的のミシアを蹴散らしていく。粒子の筋とスラスター光が戦場を飛び交い、命を散らす爆発が悲鳴のような輝きを放つて機体表面に反射する。美しく醜い機人と死神の舞踏会がそこについた。

八機目のミシアを消し飛ばしたところでビームランチャーがパワーダウン。本来長時間連射を想定して開発された武装ではない為、長期戦で酷使すればこうなることは当然の帰結だろう。むしろよく砲身が耐えた方だ。プラズマソードも発振装置の一部が既に欠損している状態で、刀身を形成するプラズマの流れが弱体化し切断力の鈍りも著しい。限りが見え始めたジールヴェンの動きを察知して、敵軍が巧みに距離を取った砲撃を浴びせてくる。前後左右に旋回しながら回避運動を行うが、第一装甲版を徐々に削られていく。

ああ、私ここで死ぬんだ。

生まれついてからずっと戦場にこの身を置いている自分には、死の覚悟など遙かに通り越した強い信念のようなものが備わっていると思っていた。実際に死線を切り抜けた経験も数え切れないほどある。しかし信念なんか、これっぽっちも持ち合わせていかなかった。これでフィナーレだ。

死神の声を聞いたような気がした。  
死への潔さではなく、生への諦観。  
そのときだ。

腹部に熱と痛みが走った。

同時にコックピット内の全モニターが暗転、直後に再起動。膨大なデータ群を、狂ったようなスピードで演算しながら解読不能の奇怪な羅列を次々と流し出す。

「これは、何？」

パイロットすら知り得ない未確認機能の発現。声なき声を上げ、

ジールヴェン が咆哮<sup>ぼうこう</sup>していた。フレームに刻まれたスリットと全身を通づライン状の放熱帯から、青白い閃光を外部へ解き放ちながら。

震える左手をグリップから引き剥がして、己の腹部に宛がつ。激しい熱。感覚という感覚がこの一点から新しく生まれ、次いで頭頂や手足の爪先へ向かつて浸透していくかのよつな、激しい熱。それが更に強さを増していく事實を、身体の内と外から感じとる。

「ジール、ヴェン……あなたは、」

愛機の鼓動と叫びが自分の声を絡めとつて、機体の解放する輝きが周囲の空間を脈打つように振るわせる。ほどなくしてそれは蠕動<sup>せんどう</sup>へ。世界が幾何学形に歪み、黄金の無慈悲で地上を圧制し続けていた空の曉を遮つた。

異常な事態に反応した敵の ミシア 群が ジールヴェン に向けて四方からさらに激しい一斉放射を開始。しかし青白い閃光が、それら全てを喰らい尽くし本体への着弾を阻む。圧倒的な力の胎動だった。

ジールヴェン と相対する敵兵のパイロットたちは我が目を疑つた。防御エネルギー・フィールドのジェネレーターなど、遙か以前に停止していることが実証済みである。加えて言つなら、砲弾を無力化している力場の範囲が明らかに常識を越えている。これはもはや通常の兵装ではない。後方で戦局を推し量つていた敵軍の指揮官がそう判断し、一時の後退を発令しようとして、手遅れだった。

青白い閃光はさらに大きく、大きく成長し、周囲を包み込んでいく。

やがて光が収束したころ、最前線で戦闘行動中だった二〇機近くに及ぶ ミシア はおろか、中心で光を放っていた ジールヴェン とそのパイロットさえ、この場から跡形もなく消え去つていた。廃墟と化した軍事施設、誰もが予想し得ぬ結末。ただ一人の勝利者も出さぬまま、直径三〇〇メートルに広がるクレーターと、数機

の ミシア 指揮官機だけを残して、 壮絶な消耗戦を呈したこの戦  
闘は終了を告げた。

## 世界の邂逅は突然に（1）

『私、健吾のことが好き。ずっとずっと好きだつたんだから……』幼なじみの麻紀が顔を真っ赤にして、一〇年間胸に秘めていた思いを打ち明けた。

『私をこんなに弱い女の子にして、責任とりなさいよ』いつもは小生意気な彼女も、この瞬間だけはありつたけの勇気を振り絞つたのだろう。唇と肩が震えて今にも泣き出してしまってしだ。

俺は何と答えれば、

『俺もだよ、麻紀』

『ごめん。他に好きな人が』

「ここで断るバカがあるか！」

『俺もだよ、麻紀』

『ごめん。他に好きな人が』

コントローラーの決定ボタンを押そうとしたその瞬間、

「ケン一、ちょっとといい？」

亞麻色のショートヘヤーをふわり靡かせながら、妹の明美がノックもなく部屋のドアを開けて入ってきた。

「コラつ、俺のことはお兄ちゃんと呼びなさいと何度も言つたら分からんだ！」

「何でそつち。勝手に中に入つて来てる方を突つ込むでしょフツー

明美は据え置きゲーム機の繋がれたテレビのモニターを見やる。

クリツとしたその瞳に嫌悪を表す光が浮かぶ。

「うつわ、またギャルゲーの主人公に自分の名前つけてる。イタい  
しキモい」

「つるさい帰れっ」

「英語の辞書借りたらすぐ出てくからさ。いやー私の携帯について  
る辞書、凄く頭弱くて困ったよお」

「そうか。お前と一緒にだな。

ぐじ」しゃつ。

「いだああ！」

和英辞書で後頭部を強打された。

「あ、あれ、おかしいな、口に出してた？」

「いや、何かバカにされてる気配を感じたから

「一年戦争に参加することを強くお薦めする」

「意味分かんないし」

「考えるな感じるんだ」

「はいはい。はあ、大学生は気楽でいいねえ」

聞き捨てならない捨て台詞を吐いて部屋をあとにする明美。ツン  
デレにもほど遠い。全く萌え要素の欠片もない妹だな、と本人に聴  
こえないように返しておく。

相原 健吾。

一九歳になる大学一年生の若者である。

趣味はパソコンとゲーム、アニメにファイギュア。健吾という存在  
を表現するのに最適な、オから始まりタを挟んでクで終わる三文字  
の素敵なキーワードが存在するが、ここは彼の人権を尊重して「機  
械に強い超インドア派」と紹介しておく。家族構成は両親と妹との  
四人暮らしという比較的ポピュラーなもので、特に金持ちでもなけ  
れば貧乏でもないという大変面白味に欠ける家庭である。

しかし健吾の恋愛遍歴は輝かしい武勇伝で讃えられている。

活発で元気なツインテールの後輩に、穏やかで優しい眼鏡の先輩、  
料理上手で甘えん坊な血の繋がらない妹と、猫目で世間知らずなお

嬢様、果ては現在人気急上昇中の国民的アイドルにと まさに女を取つ替え引つ替えにし、つい今しがたも長年好意を寄せられたツンデレで美少女の幼なじみから自宅の前に呼び出されて愛の告白を受けたばかりである。

『ホントに？ 嬉しい。……あ、べ、別に、あんたの為に一緒にいてあげる訳じゃなんだからねつ』

「フフ、さつきと言つてることが逆だろ？ 今むら照れるなよ、これからはずっと一緒になんだからさ」

鼻の下を伸ばしながら健吾はそう言つた。

翌日の午前一時、眠い目を擦りながら大学の正門をくぐる。今日の講義は卒業単位を取得するのに必須の科目である。

人格はともかく頭の出来はそれほど悪くなかった健吾は、特に苦労を払うことなく進学に成功。一流の大学ではあるが、別に上流企業に就職して人類ヒエラルキーを駆け登るうつという気概があるわけでもないので、それなりのゆとりを利かせたキャンパスライフを謳うか歌している。

講堂へ向かう途中、渡り廊下で自分とは別の学部らしき数人の小洒落た女の子達が通路に屯つて談笑をしている光景に出くわした。健吾が籍を置く理工学部の学生は、男性がその大半を占めており、講義中に香水の香りを嗅ぐ機会はほとんどない。心拍数が上がりて発汗作用を促進する。女の子たちの脇を通り抜けようとしたその瞬間だ。

「ちょっと何あれ

「うわ、酷いファッション。センスゼロ」

「絶対根暗だよね。想像するだけで気持ち悪い」

流し目で何度も周りを確認しても、自分の他に渡り廊下を歩いている人影は存在しない。

「ていうか、あの存在 자체が有り得ないから」

「私あんなのと同じキャンパスの学生だなんて思われたくないーー」

「あははっ。それ言えてるー」

迫害意識を隠そともせず軽蔑心を剥き出しにした嘲笑をその背中に浴びながら、目頭が熱を帯びていることに気づかないふりをして健吾は通路を抜けた。

人類は異星人と敵対している。

地球の侵略を狙うエイリアンは、高度な文明兵器を駆使して世界各地に攻撃を開始した。

「世に広く知られている半導体の特性。まずはその詳細についてだが」

エイリアンの圧倒的な武力に震え上がる人々。しかし希望はあった。人類はあらゆる技術を結集し、敵の侵略兵器に唯一対抗しうる力を持つ巨大人型戦闘ロボットの開発に成功したのだ。

「現在も様々な分野の技術者がその旨を検討しております、」

このロボットを操るには特殊な適性を持つ人間が搭乗しなければならない。そんな折り、普通の一般市民だった健吾はエイリアンの地表攻撃を受けて家族を失った。だがそのショックがきっかけで、ある能力に目覚る。

「最新の家電製品などにも搭載されている」

なんとその能力は、ロボットに搭乗するために必要な適性と全く同質のものだつた。パイロットとしての高い素養を地球防衛軍に見出された健吾は、戦闘ロボットに乗つてエイリアンと戦う運命を選択する。

「この熱伝導を表した式だが、」

家族を殺したエイリアンへの復讐心に捕らわれたまま戦つていた健吾だったが、仲間との絆や友情を通じてやがて純粹に世界を守りたいという熱い決意を持ち始める。

「固体物質がパーツとして機能し

最後の反攻作戦は激烈を極めた。防衛軍の分解、仲間の死。しかし健吾は負けない。強い覚悟と使命感に突き動かされ、満身創痍の

愛機を駆り敵兵器を殲滅していく。想像を絶する死闘の末、ついに健吾は勝利を掴む。

「本日の講義はここまで」

今まで健吾のことをバカにしてきたあの女たちが、今さら彼を見返したってもう遅い。勝利者となつた健吾は英雄として永久に人類の歴史にこの名を刻むことになるのだから。

「さつきの公式は非常に重要なので各自必ずメモを取るなりして確認すること。それから次は実技の予定だ。準備を忘れないように。以上」

現実なんてクソ喰らえだ。こんな世界は死んでしまえばいい。甘い幻想に閉じこもり、誰からの賞賛も得ることが出来ない人生の不甲斐なさ、情けなさ、負の感情を虚空に向かつて吐き捨てた。

すっかり遅くなってしまった。

大学の帰りに「機械に強い超インドア派」たちの聖地と呼ばれるとある電気街へ寄ったからだ。正直いうと結構な遠出なのである。往復の電車賃は相当高くついた。右肩に担いだショルダーバックの中は、買い込んだコンピューター雑誌やらゲームソフトやらでごつた返している。何とも情けない話だが、交通費の元を取るべく思い切り羽を伸ばそうとして店先を歩き回ったところ、余計に出費がかかるだ。

長時間の歩行で失つた水分を補給するべく購入した清涼飲料水をようやつと飲み干し、空になつたペットボトルを自動販売機の傍らに置かれたゴミ箱に放り込む。駅を出て歩道に入る。向こうに見える小さな山の麓ふもとに建つ閑静な住宅街、その一画に健吾の家はある。駅から自宅までは歩くには少し遠く、バスに乗るには少し近いといふとても微妙な距離である。今度こそ出費を抑えたい健吾は徒步で帰ることにした。

小蠅じばえのたかる黄ばんだライトに照らされた夜の公園を突つ切つて正面の角を曲がり、長い直線に入つたところで 健吾は見た。遠

目に見える自宅のすぐ裏手。聳え立つ深緑に彩られた背の低い山の足元で、周囲の空間を震わせるように脈動する青白い閃光を。

## 世界の邂逅は突然に（2）

恐怖は、確かにあつた。

しかし健吾は、この理解不能な現象が自分に齎す<sup>もたらす</sup>であろう非常という未知の領域に、計り知れない魅力を感じずにはいられない。心のどこかで、自分という存在が「特別」に変わる瞬間を渴望している。

青白い閃光が瞬いて消えた裏山。その山林に侵入し、鬱蒼<sup>うつそう</sup>と生い茂る雑草を搔き分けながら先へ。視界は相当に悪い。周囲の住宅から漏れる光では足元を照らすのに不十分な為、携帯のカメラ機能につけられた小型ライトで一步先の視界を確保しながら前進。しばらくして異変に気づく。明らかに不自然な形で、草木がぽつかりと無くなつてしまつている場所がある。

真ん中に何か、何か巨大な物体が横たわっていた。

両膝が笑い出す。未知との遭遇。一瞬逃げ出してしまおうかと考えて、しかしそうに思い直す。緩む前立腺とお尻の穴をグッと引き締め、足を踏み出した。

侵略直前の地球に哨戒に来たエイリアンのUFOか。

はたまた試験運用中に墜落した人類の新兵器か。

暗がりで未だに全容がはつきりとしない巨大な物体の傍らに人が、否、人の形をしたモノが倒れている。

それが僅かに身じろいだ。思わず心臓が跳ねるが、何とかライトを照らして正体を確かめる。先ほど失礼なことを思つたので訂正。少なくとも見た目は完璧な人だった。手足の長さや体のバランスは完全に地球人のそれなのである。だが、エイリアンが潜伏の目的で人間に擬態している可能性も否定できない。

SF映画などに登場する、気密性に優れた戦闘服のようなスーツを身にまとつてうつ伏せに倒れていた。体は健吾よりひと周りほど

小さい。そこら辺に落ちていた比較的芯の硬めな木枝を選んで拾うと、その先端で首に当たる部位をつづいてみる。

「う、……いたい」

「つ！」

頭部に被つているヘルメットと思われるものからくべもつた声が漏れた。

「いたい」とは、あの

「痛い」のことなのか？

「み……ず、お、願い、水を、」

不思議と直感する。

この人、地球人だ。

「あ、これ水

「ありがとう、」

ミネラルウォーターの注がれたコップを、お礼の言葉を発すると同時に健吾の手からぶん取つた彼女は、中の水をもの凄い勢いで飲み干す。

結論から言つと、絶世の美少女だつた。

ヘルメットの下から現れた女神像のような芸術性をもつ整つた顔立ちに、健吾は思わず魅入る。青みがかつた銀色をした大きな瞳は、見つめていると吸い込まれてしまいそう。カラー・コンタクトを入れているのだろうと考えるのが普通だが、少女の瞳からはそういうたる胡散臭さが全く感じられない。雪のような白い肌と、それに相反する漆黒の長髪。額や頬に凝り固まつた汗と、無造作な髪の乱れが、女性としての清潔感を著しく欠いているにも関わらず、それすらも献身や自己犠牲の齎す魅力ではないかと思索してしまつほどに彼女の美貌は際立つていた。

少女の着ている服は、先に述べた通り気密性を重視した素材と構造のようで、生地が身体に密着して彼女のボディーラインを強く表出させるものとなつてゐる。滑らかに伸びた脚、柔らかそうな太股、

小振りの腰周り、驚くほど細い腹部。そして手に余るほどの大ささであることが見てとれる胸の膨らみが、少女の可憐さと大人の女性の妖艶さを併せもつ第一次性徴特有の官能的な色香を放っていた。その瑞々しい肉感に、危うく体じゅうの血液が下半身へ結集しそうになる健吾だが、今はそれどころではないと身体をくの字に曲げて必死に情動を鎮める。美しさはともかく、どう考えても怪しいこの娘を、よく状況を理解しないままに肩を貸して家まで連れ帰ってしまったのである。家族の誰かにバレないうちに早く何とかしなくては。

「ういーす！ 昨日借りた辞書返しに、」

「あ、」

「え、」

「……」

試験勉強の一夜漬けが祟ったのか、おそらく明美の思考回路はこのような方向へ。

【設問】

彼女いない歴イコール年齢のモテない男、相原健吾一九歳。（うきよせつせつ）彼の部屋のベッドに髪の乱れた美少女が座っている。如何な糺余曲折を経てこの驚嘆すべき状況が完成したのか、その理由を以下の二択より選んで答えよ。

A) 初めて付き合つことになつた彼女が家に遊びに来た。

B) 気に入つた少女の弱みを握ることに成功し、それをネタに摇すりをかけて部屋に連れ込んだ。

「Bいいーつ！」

Aの選択肢をコンマ数秒で排除し、明美は甲子園投手顔負けの豪快なフォームで振りかぶると、和英辞書を健吾の顔面に向かつて投擲する。

「Bつて何がつ？ ふきやぶ！」

見事なクリーンヒットだった。

「何だかよく分からぬ状況なのは確かだけど、この娘ビツするのケン」

「そんなこと言われても、て、お前はまず俺に謝れ。痛々しく流血している俺のこの顔面に謝れ！」

まるで何事もなかつたかのように会話を進めようとする妹を悔い改めさせるべく声を張り上げたそのとき、謎の少女が何の前触れもなく立ち上がつた。

「迷惑を掛けているようだから出て行くわ」

待つた、と明美がその腕を掴んで引き止める。

「当てはあるの？」

「わからない。まずここがどこなのか正確に把握しないと。見たところ日本なのは間違いないようだけど……」

彼女はやはり人類が開発した新兵器のテストパイロットなのか。健吾は裏山に放置プレイ中の巨大な物体に思いを馳せる。

「とりあえず今晚は泊まつていきなつて。ワケありの迷子さんみたいだし、別に何も聞かないから。住所も明日詳しく教えるよ」

「……いいの？」

「いいつていいつて。親にバレないようシャワーも一緒に浴びちゃうからさ」

「あの、第一発見者である俺の意見は？」

放置プレイを受けているのは実は健吾の方だった。

「うるさい。ケンはリビングから彼女の食べるもの何か持つてきて」

「恩に着るわ一人とも」

「私は明美、こつちは健吾。一応兄妹」

「一応つてお前……」

何とひどい云われようか。対抗心につられて、妙な独占欲が沸いて出る。少女をうちへ連れてきたのは他の誰でもない、自分なのだ。会話のペースを明美に掌握されてしまつ前に、自分もこの少女からいろいろと情報を引き出してやらねばカツコがつかない。まずは名前と年齢あたりからだろづ。

「あなたの名前は？」

「コイ」

「おじくつ？」

「コラッ、失礼でしょーが。女の子に向かって年齢と体重を訊ねるのは、」法度だよ！」

「何だよ、まだ加齢を気にするような歳でもないだろ」

健吾と明美が特撮ヒーローみたいな構えを取つて言い争つていて、コイと名乗つた少女が躊躇いもなく口を開いた。

「一六」

「何だ私とタメじゃん！ 仲良くしようよー」

浮き足立つ心を隠し切れない喧騒の中で、激動の一夜が更けていく。果たして健吾は、焦がれていた「特別」になれたのだろうか。筆舌に尽くし難い未知を我が日常へ運び込んできた少女、コイ。彼女は一体何者なのか。興奮気味で今夜は一睡も出来ないであろうと踏んでいた健吾の意識を、疲れた身体は思いのほか早く深い眠りの内へといざなうのだった。

腹部に感じた激しい熱は鳴りを潜め、自分を包み込む青白い閃光がもはや収まつていたことに気がついた時には、全く知らない場所へ飛ばされていた。

直前に起こつた戦闘システムやモニターの異常も今は見られない。戦闘行動に備えてとっさに左右のグリップを握り締めるも、交戦していたはずの敵機は一機も見当たらず、ポインターはレーダーから完全に消失している。システムが制御不能に陥り機体から閃光を放つた原因を突き止めようと、あらゆるコンソールとタッチパネルを操作するが、目ぼしい手掛かりは得られなかつた。

モニターに映し出された前方の光景は、微風に揺れる草木と背景の疎らな街明かり。慌てて現在地を確認しようとするが、どういう訳かGPSが反応しない。敵の電波攪乱を疑うも、広範囲レーダーが生きていることからその線は弱いと推測できる。周囲に通信可能な味方はいないかと周波数を弄るが応答はない。

乾ききつた喉<sup>のど</sup>を潤そうにも、バイロットシートの脇に収納された容量五リットルの給水パックはもうとっくの昔に空っぽである。このままでは埒<sup>らち</sup>があかない。機体を寝かせるように背部をゆっくりと慎重に接地させ、意を決してコックピットハッチの開閉装置に手を伸ばす。

地面上に足をついたところで、

「あ」自分の体力が限界を超えていることに気づく。足がもつれてしまう伏せに倒れ込んだ。体が言うことを聞かない。

ほんの僅かな時間、自分は気を失っていたんだと思う。目覚めた意識が次に捉えたのは、見慣れない靴を履いた誰かの足元と、

先端部の尖った何かで首周りをつつかれている感覚。

「う……いたい」

“見慣れない靴を履いた誰か”が仰け反る気配。敵かもしれない。しかしどの道逃げられないのならば、僅かな救援の可能性に賭けてみるのもいいだろ。こんな形で命乞いをするのは些か屈辱的ではあるが、この状況で他に手はない。

声を絞り出す。

「み……ず、お、願い、水を、」

こうしてコイは、民間人の見ず知らない兄妹に命を救われることとなる。

小鳥のさえずりが聴こえてゆつくりと瞼まぶたをあげる。見慣れない天井。ああそつか、と明美の部屋で寝床を拝借して一夜を過ごした記憶が蘇る。

「ふあ」

欠伸あくびと背伸びむかばを同時にいながら上半身を起こす。こんなに深い眠りを貪むさつたのはいつ以来だろか。信じられない。生きて朝を迎えるとは思わなかつた。隣のベッドでは、明美がお腹を僅かに上下させて健やかに眠つている。

昨晩のシャワー上がりに明美は、愛用の水玉模様のパジャマをコイに着せた。さらにそのあと彼女は、自分にベッドを使うよう進言してくれたのだが、さすがにそこまで尽くされるのは心苦しいのでコイは慎んでこれを辞退した。

今さらだが……もし睡眠中に彼女の両親が部屋の扉を開けたら、一体どう誤魔化すつもりだったのか少し気になる。

「ん。ううん」

借りた布団を丁寧に畳んでいたら、明美が眠い目を擦りながら起き上がつた。

「あ、ごめんなさい。起こしてしまったかしら」

「おはよー。ふあー」

「おはよう明美。昨日は色々とありがとうございました」「

「ほわあ。いいよん、何かパジャマパーティーみたいで楽しかった

し

「そう言いながら明美が窓のカーテンを開ける。眩い朝の日差しが部屋いっぱいに入ってきて。

「うそ。どうして？」

それを見たユイは、驚愕して瞳を見開いた。

「今日は高校休みだし。うちの両親共働きでたぶんもういないから、リビングでゆっくり朝食……、ってあれ。ユイ？」

全力を奮って窓際に走り寄り、ガラス戸を開け放つ。窓枠に掴まるで、落ちてしまいそうなくらい身を乗り出して空を見上げる。

「この空は、コンピューターグラフィックスじゃない……！」

「え、え、ちょっとユイってば突然どうしたの、」

ユイはそのまま勢い良く部屋を飛び出した。

「起きてケン、大変。てかパジャマの下だけ脱いで何やつてんの？」

そんなことよりユイがっ、「

何つてお前これから朝勃ちの処理をだな……、てユイが？

「どうした何があつた！」

途中まで下がっていたズボンをもの凄い勢いで引っ張り上げると、健吾は男前に怒鳴り返した。

「よく分かんないんだけど、外を見たら急に驚きだして……」

階段をドタバタと駆け上がる騒がしい音が聞こえてくる。あつという間に健吾の部屋に飛び込んできたユイが、窓を指さしながら血相を変えてこう叫ぶ。

「空が、空が青いのっ！　どこまでも続いているかのよつて澄み渡つてて。空が青いなんて、信じられない！」

「何を、言つてるの？」

常軌を逸した言動に啞然となる明美。しかし健吾は、緊張感ゼロな水玉模様のパジャマを着たままだることを口走るユイも、

それはそれで萌えるな、とかどうでもいいことを考えていた。

「落ち着いた？」

「少し。まだ頭の整理はついていないけれど」

相原邸一階のリビング。小首を傾げて顔をのぞき込んでくる明美

から、ユイはモーニングローブを手渡される。

「もう一度確認するけど、ずっと地下で暮らしてきたとか、そんなじやないんだよね？」

質問に対しても、ゆつくつとしかし大きく頷いて、

「……お願いがあるんだけど」

神妙な面持ちでこう言葉を掛けてくる。

「少し力仕事を手伝つてほしいの。もちろん無理にとは言わないわ

「ちょっと、いつたい何なのこれ」

明美が頬をつねつて、どうやら現実らしい。裏山の林の中ほど。昨晩ははつきりと確認出来なかつたあの物体の全容が今ここに明らかになつた。

巨大な人型ロボットが、無造作に横たわつて、

そんなまさか、と万人が思うだろ。でもこれ以外に説明のしようがない。プラモデルやアクションフィギュアをプロモーションするイベントで、大きなロボットの模型が飾られているのを幾度か見たことがある。だがしかし、今ここにあるこれは、大きさも、質感も、重量感も、そして何より存在感が、玩具のそれとは全くの別次元であり、見紛うことなき実体として健吾の視界を掌握している。

「ねえケンつてば聞いてる？」

健吾は叫び出したい衝動に駆られた。

「まあ言葉を失うのも分かるけどさ、もしかしたら遊園地にあるようなアトラクションの」

妹の両肩をぐわあつしと掴み、

「ちょ、何？」

一気にまくし立てる。

「聞いてくれ妹よ。今この瞬間、お兄ちゃんにセカイ系の主人公フラグが成立した！」

「離して、」

そこはかとなく嫌な予感がしたのか肩の手を振りほどく明美だが、健吾の熱弁はさらに続く。

「きっとコイはエイリアンからの知られる地球侵略に対抗するため、超科学をもつ秘密結社から人体改造を受けた最終兵器的なあれこれで、」

「？」

明美から借りたTシャツとジーンズという普段着姿でロボットの脚部を弄っていたコイが、何事かと怪訝な顔をしてこちらに近寄ってくるが、しかし健吾の熱弁は止まることを知らない。

「戦いに傷つき、疲れきっていたコイは偶然にもある青年、つまり俺と出逢つて恋に落ち、人を愛する幸せと安らぎを知つてしまつ「もしもーし」

半眼になった妹の呼び掛けを聞かずひとり白熱する。

「ずっと俺の傍にいたいからと、戦いを拒否し始めるコイ。しかしエイリアンは悠長に待つちやくれないので。次々に人類の主要都市が破壊され人口が減つていく！ コイは選択を迫られる。愛を取るか人類を救うか」

「……」

「しかしコイは決意する。愛するたつた一人の俺を救うためだけに自分の身を犠牲にエイリアンと戦う運命を選んだ。しかーしー！」

「しかしが多い。どうせ語り切るんならもう少し整理してしゃべつてよ」

すでに憐憫の眼差しを寄越してくる明美の的確な突つ込みにも負けず、健吾は尚も熱弁を振るう。

「愛するコイを守るため俺はエスパー的な特殊能力を覚醒させる。

そこで登場するのがこの戦闘ロボだ！」

横たわるロボットをビシッと指差す。

「俺の思念波を取り込んで不思議なパワーを叩き出すこの戦闘ロボに乗り込み、コイとそのついでに人類を守るべく立ち上がる俺！」

「うわ、途中から別モノになつてるし。人類ついでかよ」

気が触れたように熱狂する健吾を見て、コイが眉間に皺を寄せる。「彼、さつきから何を言つてゐるの？」

「受信しないほうがいいよ。タチの悪い怪電波だから」

健吾の発する怪電波は、そのあと一五分ほど続くのだった。

「そろそろ手を貸してほしいんだけど。いいかしら」

「んー。それは構わないけどさ、コイ。すばりこれつてなんなの？」

差し支えなければ教えてほしいなあーなんて」

「もしかしてあなたたち、NFAを知らないの……？」でもそんな

はずは、」コイの驚愕の表情。

目を丸くする明美。

「えぬえふ、えー？」

「そう。人型兵装端末の総称。本当に見たことないの？ 世界中の、八割以上の戦場に投入されているのに」

「あ、もしかしてゲームとかマンガの話？ 私そういうの分かんないんだ。ゴメンね、ノリが悪くて……」

茶化すことなく本当に申し訳なさそうに明美が答える。「冗談ではない様子を見て取つたらしいコイは、心の底から恐ろしくなつた、というように顔面を蒼白させた。

「私は、いつたいどこに来てしまつたの？」

暫くのあいだ呆然としていたコイだったが、かぶりを振つて立ち直るとロボットのもとへ。

無言の作業が始まる。彼女がロボットの脚部から細かい網状のシートを取り出す。それを機体に被せ、上から大量の纏まつた枝葉や草木を載せていく。三人掛けでも結構な手間だった。

ロボットの頭部にシートを被せようとしたコイの手が、ふと止まる。

「見て」

彼女は確かにそう言つて空を見上げた。健吾たちに向かって小さく言葉を発したのではなく、そつとロボットに語りかけたのだ。

「あの青い空。すごいよね。綺麗で、清々しくて。私達の知つている空とは大違ひ」

視線をロボットに戻し、柔らかく微笑む。

「何故だか分からぬけど、ここにはまだ戦火が広がつてないみたい。すごく平和で穏やかなところ」

そこで一転、寂しそうな笑みへと変わる。

「ほんの少しの間、あなたはここで休んで。メンテナンスもなしにこんなところにいるのは窮屈だろうけど、ごめんなさい」

頭部にゅっくりとシートを被せた。

「お休み。ジールヴェン」

ユイが相原兄妹の家にやつてきて、一週間が過ぎようとしていた。この一四日間、彼女は大量の地図や歴史書を読み漁つたり、街の周辺を詮索したりして、「ここはどこなのか」という健吾たちにつては全く意味が理解できない質問の答えを探し回っていた。何故なら彼女自身は「ここが日本である」という自覚があるにも関わらず、「ここはどこなのか」と問うるのである。最初は安易に国内の地名や地理の問題なのだろうと考えていたが、それとは何かが、本質的な何かが違うのだといつ。

このまま彼女の存在を両親に隠し通せるとは思わなかつたので、インターネットで知り合つた海外の友達が日本に遊びに来ることになつたから、暫くの間うちに泊めてほしいという強引な作り話をでっち上げて無理やり承諾を得た。

内心、この状況に健吾は拍子抜けしている。謎の美少女が謎のロボットと共に自分の家にやつて來たのだ。これでワクワクするような事件のひとつやふたつ、起こらない方が不思議である。エイリアンが攻めてきたり、ユイに惚れられたり、自分に特殊能力が開眼したり、そしてやつぱりユイに惚れられたり。しかし現実は、彼女が同じ部屋でご飯を食べて違う部屋で寝ていること以外、いつもと何も変わらない日常だつた。

いや、敢えて挙げるならばジルハムだ。普段ユイは、裏山に放置プレイ中のジルハムへ二日に一回は必ず会いに行く。こつそり後をつけて様子を窺つてみても、彼女はコックピットらしき場所に籠もるだけで機体を動かす素振りを見せない。

ところで、前述の文章に「ほんとあることにお気づきだらうか。

まずひとつ目。ジルハム。これは決して新種のハムスターのこと

ではない。健吾があのロボットをつけたあだ名のようなものだ。ユイがロボットのことを「ジールヴェン」と呼んでいるのは、この一四日間で何度も耳にした。由来は至極単純で、つまりはジールヴェン・ジル・ジル公・ジルハムである。

それからふたつ目。ユイの行動を「見に行く」ではなく「会いに行く」と表現しているところ。彼女はいつもジルハムに語りかける。時には眩しいほどの中笑顔であつたり、時には憂いに満ちた寂しい顔であつたり……。そのどちらも、健吾達には見せたことのない彼女の飾らない表情だった。まるで心を許した愛しい恋人に声をかけるかのような。だから、「会いに行く」なのである。

嫉妬していないと言えば嘘になる。健吾も健全な男だ。身近にあれほど美しく魅力的な女の子がいる。仮にこれが下心からくる感情であつたとしても、自然と惹かれてしまうのは責められることではない。ジルハムという言葉の響きに若干蔑称の意が含まれている事実と、健吾の嫉妬心が全くの無関係だとは言い切れないだろう。

答えを受け入れるしかないと思った。それはずっと疑つてきて、しかしあまりに非現実的だと自ら切り捨てていたある答え。

自分は、別の世界に来てしまったのであるまい。

もう一週間も全く戦つていらないなんて信じられなかつた。青い空のもとで。街は活気に溢れ。人々は笑顔を絶やさない。まるで絵に描いたような平和世界だ。その全ては、ユイが知る日本では絶対に有り得ないはずのもの。しかしながらどうやって元いた場所に戻るのか。途方もなく漠然とした問いかけに頭が重くなる。そもそも何故自分は戻ろうとしているのか。

この街で一番大きなデパートの屋上にある噴水広場。中央噴水を囲うベンチのひとつに座つて、頭上を仰いだ。

「ここにいれば、もう戦わなくていいのかもしない」

ユイの咳きが青い空へと溶けていく。

先ほどから自らが発している、世界、という言葉に思わず気が遠

退きそうになる。周りに映る平和などは全部嘘つぱちで、ユイを欺いてからかう為の大掛かりなセットやエキストラである可能性は？空に見える青だつて、本当は新型衛星の超広角ホロフィールドが形成する幻である可能性は？

しかし、空の青から連想する確かな感覚がある。あの、青い光に包まれて飛ばされたのだとしたら。自分をここへ連れてきたのは、やはり ジールヴェン の意志なのだろうか。絶望的な戦局からユイを存命させるために。

そして腹部に感じたあの熱はいつたい何だったのか。機体システムとリンクする操縦系の生理的な反応は、全て熟知しているはずだったのに。あんな感覚、いや痛覚を発したのは初めての経験だ。これも能動的ではなく、受動的なものだった。ジールヴェン が関連しているようでならない。

もう幾度も機体のAIユニットと各システムを調べているが、特異なもの、異常なものは何も見つかっていない。これ以上詳細に調べるのなら、モジュールやフレームを解体する必要がある。そんな設備と技術が果たしてこの世界にあるだろうか……。

膝に力を入れて立ち上がる。とにかく、疑念を抱いたままだ考えているだけでは何も始まらない。ジールヴェン にもう一度会いに行こう。太陽の光を反射して中空にきらきらと輝き散る噴水を横切り、ユイは再び歩き始めた。

## 走るメタファー（1）

「おはよっ ジールヴェン。昨日は会いに来なくてごめんなさい」  
裏山で、大量の草木に覆い被されたジルハムを見上げて語りかけ  
るコイ。と、彼女が何の前触れもなくこちらへ振り返った。

「いい加減出でたら？ 私たちに、何か言いたいことがあるんで  
しょう？」

「つ！」

彼女が今日、必ずここに来るだろ？と考えて張り込んでいた。気  
づかれていたのか 声の感じからして、覗き見をされていたこと  
に対しても怒っている訳ではなさそうだ。叢の影からいそと  
這い出して、顔色を窺いながらコイの隣に並ぶ。

「あなたたちには色々と迷惑を掛けているわ。」めんなさい。本当に

に

視線は機体に向けたままだが、今度は健吾に謝っているらしい。

「いいって、別に」

張り込んでいたことがバレた氣恥ずかしさから、ついぶつきらいぼ  
うになってしまふ。こんな可愛い女の子を隣にして、自分はいった  
い何を言えばいいのだろうか。

「この半月足らずで色々分かつたことがあるの  
そうなんだ。

「この世界つて本当にいい所ね」

……ちょっと待て。何だつて？ 今、何て言つた？

「平和で、みんな心が優しくて、穏やかで。誰からも敵意を向けら  
れることはないもの」

まさか。そんなことは有り得ない。

絶対根暗だよね。気持ち悪い。

まずあの存在自体からして有り得ないから。

他人に蔑まれるあの視線が、敵意ではないなんて。

「欲しいものはすぐ手に入るし、自由で、どこへだって行ける」  
違うだろ。人には、生まれたときから予め定められた限界がある。  
いくら欲したって手に入らないものや、いくら努力したって到達で  
きない領域がある。

「本当に羨ましい」

沸々と起きる、負の感情。大嫌いな全てから健吾を解放する為に、  
ここではない「特別」な何処かへ連れて行ってくれるはずのユイの  
口から、こんな世界に対する賞賛の言葉など聞きたくない。この地  
球上で、自分ひとりだけが知らない生物になつたかのような疎外感  
が、健吾の胸に忍び寄る。

「あなたもこの世界が、この場所が好きでしょ?」そこでユイ  
はこちらを向いた。ジルハムへ向けていたほどのものではないにし  
ろ、それでも充分に眩しい微笑みを讃たたえて。ゆえに決定的だつた。  
「そんなわけ、ないだろ?……！」

「え、」

「こんな世の中、好きな訳ないだろ」

口に出したからにはもう止まらない。

「もつとよく周りを見てみろよ。どいつもこいつも自分のことしか  
考えてないバカばつかりだ！」

空氣に苦味が混ざる。

喉の奥が急激に熱くなる。

「人には優しくしようなんて、口先ばつか」

溜まりに溜まつた世の中に対する不平、不信、不安が、醜い怪物  
に姿を変えて健吾の心を驚撃む。

「だいたい環境汚染の地球代表な人類なんてこの星で最も生きてる  
価値のない生き物だろ」

いきなりスケールがぶつ飛んだ。言いたいことをとにかく全部出

してしまおうとする、人前で語ることが不得手な人間特有の未熟な心理が働いて、話があらぬ方向に広がっていく。勢いづいて聞き手を置いてけぼりにしたまま言葉が暴走する。

「むしろ人類は癌細胞だね、つまり惑星癌。今はステージ2Bくらいの。さらに進行して月や火星に遠隔転移する前に人間は全員死んだ方がいいでしょ」

待て待て。こんな唐突に何を言つてんだ俺。キャラ違うだろ。イタすぎるだろ。聞くに耐えない稚拙な弁論だ。気づいた時には更に手遅れで、もう口が止まってくれない。

「人間同士で戦争起こして殺し合うのが一番お<sup>あつ</sup>逃<sup>う</sup>向き」

言葉を遮るように、乾いた音が山林を駆けた。同時に左頬に熱が走る。平手打ち。殴られるまで気がつかなかつた。

「何するんだよっ！」

「信じられない。何で殴られたのかも分からないの？」

「せっかく倒れてるとこ助けて、うちに一週間も泊めてやつてるのに……！」

「最低ね。自分の非を省みる前に相手の弱点を探そだなんて」  
ユイが両の拳を握り締めて震えている。

「私は、確かにジール・ヴェンでたくさん人を殺してきたけど」「目前で悲痛に歪む表情。大きな怒りと重い哀しみを訴える彼女の姿に、ついたじろいでしまう。

「それは、平和になつて、そこで暮らす人達にそんなひどいことを思つてもらう為じゃない」

「な、何カッコつけたこと言つて……」

「あつ、二人ともやつぱりここにいた！ 大変だよ大変つ。かなりの一大事」

尋常ならざる慌てようで健吾とユイの間に飛び込んで来たのは、明美だ。妹はすぐに一人の不穏な空気を感じ取つて、

「あれ。もしかして告白の最中だつたり？」

しかし全く見当違ひなことを言つた。

「違つつ」「違うわつ」

咄嗟に発した言葉がユイのそれと重なつて、「あつ」という顔で互いを見つめ合つ。ユイ本人の気持ちはともかく、自分が抱いていた好意まで否定されたかのようなひと言に瞬間的な怒りを覚えるも、気まずさには勝てずすぐに視線を逸らした。

「声を揃えて怒鳴らなくても」

お前が変なコトを言つからだうつ。明美は一体何をしに来たのか。

「それより何だよ、大変なことつて」

「そうだつた大変なのつ。街のど真ん中にデカいロボットが現れたつて、今そこら中で大騒ぎになつてゐる」

「！」

「数と特徴は？」

二人の驚愕は一瞬、すかさず聞き返したのはユイである。

「実際に見た訳じやないから詳しくは分かんないんだけど、聞いた話をまとめると多分一体だと思つ」

「分かつた。この子のシートを剥がすから手伝つて」

「えつ！ オ、オッケー。ほら、ケンもぼさつて突つ立つてないで」  
避難という選択の真逆を表すユイの発言に、一瞬戸惑いを隠せなかつた様子の明美だつたが、「この子」と言つたユイの視線の先にあるものを了解し、すぐにその意志に従つて健吾を促す。

「俺は――！」

「別にそれでもいいわ。けれど、」

再び重なつた自分とユイの視線。息が詰まりそうになつた。生まれてからの一九年、これほど強い眼差しを向けられたことがあつただろうか。続く彼女の言葉は、健吾の胸を大きく騒がせた。

「いつまでもそんな考え方で生きていたら、いつか必ず後悔する日が来るわ」

真正面からぶつけられたそれを、今はまだ自分の中に受け入れることが出来ず、尻の穴が痒くなつてくるような思いを味わう。何

かこの一〇分足らずの間にもの凄い恥をかいた。そんな思いを誤魔化そうと、反射的に言葉を投げ返す。

「わ、分かつたよ。手伝えばいいんだろ手伝えばっ」

コックピットの全てのモニターが輝きを取り戻す。プログラムを始動してOSを立ち上げる。システム起動。動力炉、反応開始。CIF同調。データ群の流れるヘッドアップディスプレイとサブモニターを視認しながら、右手でタッチパネルを、左手でコンソールを操作する。待機状態をチェック、異常なし。モード移行、パイオリティ正常値へ。前方左右に展開した大型モニターが、機体頭部のメインカメラが捉える外部の光景を映し出す。

「あなたの力が必要なの。さあ立つて ジールヴェン」

四肢に電流が通り、低音で無機質な駆動音を響かせながら ジルヴェンが立ち上がる。

『すごい……！ ホントに動くんだこれ』

明美が興奮気味に呟くのが聞こえる。傍らの健吾が僅かに口を動かすのが見えた。流し視線の捉えたそれに、無意識が読唇術を駆使する。彼の漏らした言葉は「夢じやない、すげー」であった。

彼に対して手を上げてしまった。もしあの信じ難い仮説が事実であるならば、自分と彼は住んでいた世界が違うのだ。価値観を違えていて当然かもしれない。

でもだからといって、自分の考えが間違っているとは絶対に思わない。ユイのいた世界の人々が、いくら欲しても手に入らない命と平和。それをあれほどまでに酷く軽んじ貶める彼の言葉は、ユイにとって決して許せるものではなかつた。さらに彼の感情の奥には、無知や甘えがあつたように思える。また同じ世迷い言を言つてきたら、自分は何度でも反論するだろう。例えそれで彼から嫌われて家を追い出されたとしても。

しかし今は、そのことを思索する前にやらなければならないことがある。広範囲レーダーの走査開始。反応あり。半径三キロメート

ル以内にNFA一機を確認。データ照合中、

「近い。ジールヴォンには一応申し訳程度のECMが機能しているけれど、向こうの電子性能によつてはすでにこちらも探知されている可能性がある」

照合終了。機体の熱紋及び周波パルスから【DGI 024】、あるいはその系統に類する機種であると暫定。

「この機体コードはミシアか」

通信システムをオンに。機体の収納に保管していた無線機を先ほど明美に渡した。周波数は合っている。

「明美、聞こえる?」

『あ、聞こえるよコイ』

「これから街に出現したNFAの元へ向かうわ。戦闘になるかもしないからあなた達は出来るだけ離れた場所へ避難して」

『私たちに他に出来ることない?』

「ありがとう。大丈夫よ。もし何かあつたらその無線で連絡して『りょーかい』

スラスターの制御ステータスをサブフライトシステムへシフト。ジールヴォンは全高一五メートルの巨体を垂直方向に浮遊させた。スラスターの巻き起こす旋風に髪の毛を煽あおられながら、機体を見上げている健吾と明美の姿が見える。

時間差を置いて各部のサブスラスターを噴かせる卓越した姿勢制御で、目的の方角へと軸を向けながら上昇。直後メインスラスターを出力して前方に飛翔、機影を彼方へいざなう。

雄々しい発進。いや、出撃と言つべきか。明美は瞳をきらきらと輝かせてうつとりする。

「やばい、コイ格好良すぎ。わたし惚れちゃいそう。百合やばい」

全身が震える壯觀だった。ジルハムはやはり本物だったのだ、とコイへの対抗心を忘れて感嘆してしまった。だけどまだ認めたくなり、自分を完膚なきまでに否定した彼女のことを。胸の奥で、羨望

と嫉妬がせめき合っている。何とちつぽけなプライドか。

「くそ。ほっぺたがじんじんする」

頬の痛みが、募る敗北感に焦燥を乗せて加速させる。居てもたつてもいられなくなつて、

「ちっくしょう。このまで終われるかよ……！」

「ちよつ、どこ行くのケンそつちはダメだつてばつ」

健吾は ジールヴェン が飛んでいった方角に向かつて全力疾走を開始した。ここ最近ろくに運動をしていない自分の体が、ユイに追いつくまでもつかどうかは全く頭になかった。

## 走るメタファー（2）

『どこの企業のものかは知らないが、あなたの搭乗しているそれは、道路交通法で認可の下りていらない明らかな違反車両です』

国道線。合計七車線の幅広いこの幹線道路は今、厳重な交通規制がかけられていた。原因は他でもない。アスファルト舗装された車道の上に、突如として降り立つた灰色の巨大な人型ロボット。直立するそれを取り囲むように、機動隊と思しき十数台の警備車両と、多くの隊員が睨みを利かせて対峙している。

『直ちにその車体から降りてきて身分証明書の提示を、』  
無機質な駆動音。凝集された粒子の銃弾が放たれる。刹那、爆発。拡声器を片手に声を張り上げる隊員の、傍らに留めていた無人の警備車両が一瞬にして蒸発する。巻き起こる悲鳴と怒号。爆風で吹き飛ばされた隊員が地面に叩きつけられた。彼の名前を叫びながら駆け寄る同僚。幸いまだ息はあるようだ。

激情と恐怖が場を疾り交う。

「周辺住民の避難と誘導を最優先しろっ！」

「本部に連絡。至急応援の要請と発砲の許可を」

「信じられん……！　あの右腕に抱えた大きな銃器、実弾、いや、

本物の武器なのか」

「悪夢だ。あんな冗談みたいな機械が、日本の国内で戦争を始めるなど」

「発砲許可が下りた、総員構え」

数十丁に及ぶハンドガンとライフルの黒光りした銃口がロボットに向けられ、照準を合わせる　　「撃て！」　という号令の直後、一斉に発砲。怒濤なる実弾の嵐は、しかしロボットの装甲に弾き返され、甲高い金属音を響かせるだけであった。ロボットの右脚がゆっくりと持ち上がる。バリケートとなっていた警備車両を踏み潰し

て、巨大な機人が前進を開始した。

「後退、後退だ！」

ロボットが、再び右手に握る巨大な銃身を下方へ構えた次の瞬間、上空より新たな機影が路面に旋風を吹きつけながら飛来する。

前方一〇〇メートルの距離に存在する機体を【DGH-024】ミシアのカスタム機と断定。戦闘システム及び全兵装、アクティブモードを維持。

「試作のエネルギーライフルを携行したチューン機か」

コイは外部スピーカーをONにした。さらにもう一体のロボットが出現したことで、大きなどよめきと動搖が広がっている機動隊に向かつて声を張り上げる。

「周辺に集まっている保安部の皆さんは一刻も早くここから退避して下さい」

突然ジールヴェンから発せられたコイの声に、不審感を露わにする機動隊の面々。指向性マイクが彼らの声を拾つ。

『女性の声？しかもずいぶんと若い』

『保安部つて俺たちのことか？』

「これから目前の機体を制圧します。あなたたちがいるとはつきり言つて足手まといです。邪魔です」

『な』

『我々からみればお前も充分警戒対象だ！』

「そんな貧弱な対人武装でいつたい何が出来るんですか？ここは私に任せてとつとと一般市民の安全確保と警護に向かつてください！」

『ぬう』という唸り声。ジールヴェンを警戒しながら機体の足元を横切つて、じりじりと後方に下がる警備車両と機動隊員。一時撤退の構えだ。ツクピットのレーダーに映る生体反応がまばらに散つていく。と、ここでレーダーを映したディスプレイにノイズが走る。

「敵のジャミング。至近距離限定だろうけど、かなりレベルの高い電子戦装備ね。こちらが取れる戦術は……」

ジールヴェンが搭載する動力部は準永久機関である。供給される出力は無尽蔵だがコンテンサー容量に限界がある為、エネルギーの大幅な連續使用は機体と火器の稼働時間に如何ともし難い制限をかけてしまう。反面、以前の戦闘においてパワーダウンした武装は、動力炉直結のエネルギー兵器に限り補給なしでの自動充填を可能にしている。現在使用可能な兵装は、右腕可変式のビームランチャーと、マニピュレーター携行型のプラズマソード、両肩部展開型の防御フィールドのみ。

「あいつには訊きたいことが山ほどある。パイロットを殺さずに機体を無力化、それも、周囲に気を配つて市街地への被害を最小限に抑えながら」

操縦桿のグリップを握り直す。

「ウォーミングアップにしては少しきつめかな……でも、私とジールヴェンならやれる！」

自分の駆るジールヴェンが着陸してから数分、ことの成り行きを静観していたミシアがついに動きを見せる。右手に握る大型のエネルギーライフルをこちらに向け、その砲身を左手で支える

命中補正を重視した発砲態勢。ジールヴェンに対処行動を入力、フィールドジェネレーターが起動した。大きく盛り上がった両肩部を外側にスライドして放熱機構が出現、琥珀色の微粒子を散布する。

ミシアのライフルからエネルギー弾が一条を描いて発射された。ジールヴェンの放つ微粒子の膜が急激に濃度を上げて機体前面に安定還流し、防御力場を展開する。力場に干渉したライフルのエネルギー弾が霧散、原子レベルに分解されて消滅した。

ライフルを連射しながら前進する敵機。横目でサブモニターを確認。そこには現在の機体周囲の熱量と、防御フィールドが耐えうる熱量の限界値が表示されていた。前者の数値が上昇し、後者の数値

を肉迫する。ミシアが放つエネルギー弾の連續砲火にフィールドが耐え続けている証拠である。回避運動を取つて砲撃を躱すことは可能だが、それでは市街地の建造物に被害が及ぶ。

「まずはあのライフルを黙らせる」

ジールヴェンの腰部両側面の上端には、左右のマニピュレーターが携行する二種の武器にそれぞれ対応したハードポイントが存在する。左のハードポイントにマウントしていたプラズマソードを、左マニピュレーターで保持して引き抜く。刃渡り七メートルに達する電流刀を形成。先の戦闘で発振装置の一部が欠損した為に放電が減衰しているが、この状態で手段は選べない。メインスラスターを出力。フィールドを展開しながらジールヴェンがミシアに向かつて突進する。

交錯は一瞬。

防御フィールドの熱量が限界を超える直前の、機体同士がすれ違う瞬間、プラズマソードによる斬撃を繰り出す。金属が切り裂かる音。中空を舞つたのは、エネルギーライフルを握つたままのミシアの右腕。ライフルの爆発を避ける為に右腕の関節部を切断したのだ。その右腕が地面へ落下するのと同時に両者一機の位置が入れ替わる。振り向きざまミシアの左腕甲部が展開、そこからビームを放出して収束。刀身状に固定された。

「ビームブレード！あのミシア、新兵装の試験運用機なの？」  
敵機が白兵戦術に切り替えて突進、粒子の凝集した刀身を振りかぶる。あれほどの出力を持つ斬撃兵器ならば、厚い装甲に覆われたジールヴェンの胸部すら容易く切り裂くだろう。機体各部のスラスターを噴かせる俊敏かつ小刻みな機動で、ビームブレードによる怒涛の切り払いを躱し続ける。

「まだ……！」

コイの発したその言葉と同時にジールヴェンはプラズマソードを投擲、ミシアの左肩関節に突き刺さった。これによりビームブレードの剣閃が大きく逸れ、その隙をついてジールヴェン

の右手が ミシア の左腕を掴み上げる。

右マニピュレーターの握力リミッターを解除。右腕部へ送る出力を一時的に全開に。一気に ミシア 左腕部を握り締める。細やかな雷電が走った。左腕部の配線及び配管を握り潰され、エネルギーの供給を断たれたビームブレードが粒子の放出と刀身の固定を維持できずに霧散した。肩部に突き刺さったプラズマソードを引き抜こうとした次の瞬間、 ミシア が ジールヴェン に組み付いて動きを封じてくる。

「こじつ、」

恐らく後方のビルにこちらを叩きつけようというのだ。 ジールヴェン のパワーを以てすれば振り解くことは可能である。

しかし。

敵の ミシア が機体を接触させる際にジャミングを切つたのだろう。ユイが全身のスラスターを出力させようとしたその時、復活したレーダーが周囲に生体反応を捉えた。慌てて頭部カメラと指向性マイクを反応のあつた方角へ向ける。

『うわあん、お母さあああん！』

一機が押し合いをしている地点から五〇メートルほど離れた横断歩道の真ん中で、五歳前後の男の子が泣きじゃくりながら立ち尽くしていた。

「あんなところに子供がつ。保安部の人達は何をしているのよ全く

！」

このままスラスターを出力すれば、敵の ミシア もこれに対抗して推力を限界まで上げてくるだろう。そうなれば互いに反発し合う慣性を「えられた」一機の機体が、周囲の道路を踊り回ることになる。

「あの子を巻き込んでしまつ

どうすれば……。

そのとき、コックピットに通信が入った。

「この周波数、明美？」

『コイ聞こえる？ 実はさ、ケンがそつちに走つて行つちやつたみたいなんだけど』

『いいえ見てないわ。それより今はそれじいじや、や

あ。

『気がつけば、レーダーに反応がもつひとつ。

『じいじ子供つ。俺と一緒に来い』

相原健吾一九歳彼女いない歴一九年。彼は、小さな男の子の手を引つ張つて、せえぜえ言いながら今まさに奮闘している。傍田からは間抜けな誘拐犯か変質者に見えなくもないが、そんなことを気にしていられる状況ではない。街道まで走り着いたときの息切れが激しく、一機のロボットが望める建物の影で小休憩を取ろうとしたところ、歩道にこの子の姿を見つけたのだ。

『お母さんじやなきややだ』

『かたく 頑なにその場を踏ん張り、ふくうとほっぺを膨らませてかぶりを振る男の子。いじらしくてなかなか可愛い。』

『何だよ、聞き分けのないやつ』

ふくうとほっぺを膨らませて対抗する健吾。じつちは可愛い。そこへ ジール・ヴェン の外部スピーカーからコイの大声が飛んでくる。

『健吾、早くその子をここから離れた場所に連れて行つてー。』

その言い方に何だか力チンときたので怒鳴り返す。

『今やつてるだろ？ 見て分かんないのかよバカつ』

『一瞬の間があつて。』

『どうして、来たの？』

『俺にもそれが分からぬから困つてんだる。ここまで走つてくるの、しんどかつたんだぞ！』

『そんなこと私に怒鳴らないでつ。……恐い思いするから避難してつて言ったのに』

『もうしてると、足がガクガク震えて今にもチビリそりじやボケ』

『あなたね、さっきから聞いてれば人のことバカとかボケとか、『つべこべ言つてないで、お前は目の前の如何にも量産型なショボメ力を抑えてろ!』

『今やつてるでしょ? あなたこそ見て分からぬのかしら?』  
外部スピーカーから『つわー、痴話喧嘩ー』といつ明美の声が漏れてきた。

「この人もこわいよおかあさあああん!』

余計に泣き出した男の子に面をくらうながら健吾は頭を悩ませる。うーん。俺がこれくらいの年齢のこいつでいつもどんなこと考えたつける?

あ。

ふと、頭に降りてきたアイデア。この歳でロボットが嫌いな男子なんて滅多にいないう。文字通りの子供だましではあるが、胸を痛めて反省するなんてことは、この場から生き延びれさえすればいくらでも出来るのだ。試してみる価値はある。

「君は何とか戦隊何とかレンジャーを知ってるか?」

「えぐ、えぐ、電腦戦隊デジタルレンジャーのことお?」

肝心な部分は全て「何とか」でぼやかす、という酷いレベルの出たとこ勝負だったものの、どうやら脈あり。男の子が嗚咽おえつしながらも興味を示した表情でこちらを見上げてくる。

「そうそれ、あれにロボット出でくるだろ? 今向こうで戦つてる青いのがそのロボだ」

「ちがうよお、超電腦合体ロボ、デジタルグレートEXはあんなんじゃないもん」

「なかなか手強いな。いいだろ? よく聞くんだ。実は……」  
もつたるふるようく含みを持たせ、

「あれはまだテレビには登場していない新ロボット、ジルハムグレートなんだ!」

如何にも胡散臭い大仰なリアクションで健吾はついに言い放った。  
無駄にノリノリである。

「ほんとう？」

「ホントホント、再来週辺り登場予定だ」

同じことを一回繰り返して言つ人は信じてはいけないと何かのCMでやつていたような気がするが、純真無垢な五歳の男の子は瞳を輝かせて泣き止んだ。

「だから坊や。悪のロボットを撃退する為に俺たち、いや、我々、えと、そう、地球防衛軍に協力しておくれ」

「きょうりょくするつ」

大粒の涙を小さな握り拳で拭い、男の子が興奮気味にほっぺを紅潮させてそう言った。やはり可愛い子だ。健吾はますます調子づいていく。

「いい子だ。よし俺について来い！」

重ねて言うが、無駄にノリノリである。

「ツクピット脇の小さなディスプレイに映る健吾が、男の子の手を引いて意気揚々と横断歩道から離れていく。その光景を見て取ったユイは、すぐさまフットペダルを力強く踏み込んで ジールヴェン のスラスターを出力。予測通りこれに反応した ミシア が、推力を増加させ肉迫してくる。

「いつまでもベタベタと」

路面を抉りながら国道線上を組み合つた状態で乱舞する一機のNAFA。

「私の ジールヴェン に触らないでええ！」

ジールヴェン が右脚部後面に展開した光圧スラスターを全開にし、ミシア の胸部に膝蹴りを見舞う。強力な肉弾攻撃を与えられた ミシア が、ジールヴェン から吹っ飛ばされて仰向けの状態で路面に叩きつけられた。ツクピット外郭に活ける衝撃緩和機構の許容を遥かに凌駕する烈蹴とアスファルトへの衝突。パイロットは脳震盪を起こして気を失つたと見て間違いないだろう。

敵性機体 ミシア 、制圧完了。

「助けてくれてありがとう、ジルハムグレーントのお姉ちゃん！」

「ジルハムグ　　？　え、何ですって？　もう一回言つて？」

「ジルハ　　もごつ、んーんー」

「いや、何でもない。こっちの話、気にすんな」

何故かは分からぬが、裏返つた声でそう言いながら健吾が男の子の口を塞いでいた。

傍らに立つ　ジールヴェン　の装甲が、夕陽に照らされてその輪郭を黄金に浮かび上がらせている。あの暁に少し似た、ユイもよく知る景色。こちらの世界にも、太陽が地平線の近くに存在する時間帯つまり夜明けと夕暮れに限り、こりうりした色の空が見られることは、もちろん今は充分に理解している。しかしこの時、世界を焦がす黄昏がユイの心に訴えてきたものだけは違う。

“お前は「こちら側」の人間だ”

握り締めていたグリップの感触が、汗ばんだ両の手のひらから離れない。

周囲の状況が慌ただしく変わっていく。事後処理に追われて辺り一帯を走り回る機動隊の面々が、近くを横切る度に好奇心とも敵対心ともつかぬ露骨な視線を投げかけてくる。

放された粒子の塊に灼かれて藻屑と化した無惨な金属片。圧倒的な重量に踏み潰され、引き千切られた無数の車体。怪鳥の巨大な鉤爪で引き裂かれたかのようなアスファルト。異物が如く横たわる満身創痍の　ミシア　と、悠然と佇む　ジールヴェン。これを平和への蹂躪と呼ばずに何と呼ぶのか。全ては、自分がここにいるからなのだろうか。

「コイ」

「分かつてゐる」

やがて機動隊の部隊長と思しき風格の男が、一駆け寄つて尋ねてきた。

「その少年は？」

「母親とはぐれた一般市民の男の子です。保護をお願いします」

コイの申し出に、隊長はその精悍な顔を大きく頷かせた。

「了解した。保護者と思われる女性からの搜索要請を受けている。照合を急がせよ」

「ほり、」

健吾が男の子の背中を押してやる。寂しそうな顔で見上げてくる男の子。

「またあえる？」

「そのうちな」

「うん」

名残惜しそうに何度かこちらを振り返りながら、男の子が救護隊に先導されてとぼとぼ走り去る。それを目で見送った隊長が、再びこちらに向き直つた。

「目標の鎮圧に際しての多大な尽力を、まずは感謝する。事態を収集してもらつておいて大変申し上げにくいのだが、」

「心配しなくても保安部の皆様に同行するつもりです」

「コイ」

「あなたは黙つてて」

健吾の制止を、とりつく島もなく切り捨てた。決めたのだ、この世界における自分の形振りを。

「話が早くて助かる。それで隣の青年は君とどうじつ……」

「俺は」

「彼も戦いに巻き込まれた一般市民です。自らまで無事に送り届けて下さい」

努めて他人行儀に振る舞う。心を鬼にする、といつにはまだ幾分

甘いが、言葉を発した瞬間に胸がちくりと痛んだ。だかこれ以上、彼に迷惑は掛けられない。危険にも晒したくない。

「ちょっと、急に何言つてんだよ、もしかしてまだあるの」と怒つてゐるのか?「

「ううん。違う」

視線を健吾へと向ける。機動隊の隊長が、何かしらの空気を察したのかこの場を離れていつてくれた。コイに対する敬意を表したのかもしれない。

ユイの視線が自分へと向けられた。自然な二重瞼と、銀色の光彩が特徴的な、大きくて綺麗な瞳だ。この瞳に何度魅せられたことか。「聞いて。あなたと私はここまで。あなたはもう、私とは関わらない方がいい

何だよ、それ。

彼女が動く。機動隊の隊長が向かつた方角へ数歩だけ進んで、また止まつた。今度は振り返りもせず背中ふたえまぶたに語りかけてくる。「私が今こうして生きてるのは、ここにいるのは、あなた達のおかげ。ありがと」

本当にこればかりである。それはもうお互いさまのはずだ。ユイだつてあのロボットからこの街を守つてくれたではないか。

「急にぶつたりしてごめんなさい。あなたには分かつて欲しかつたから。この世界の、尊いところ」

何も言ひ返せない。

「それから」

横顔だけで振り向く彼女。そこには、黄昏に彩られた微笑みがあつた。ジルハムに向けるあの笑顔。どきりと心臓が跳ねる。

「最後は健吾のこと、少し見直したわ

「……！」

初めて名前で呼ばれた。

「明美にもよろしく。じゃあ元気でね」

徐々に離れていく背中。

終わってしまう。

健吾の「特別」が。

たつた一週間の「特別」が。

いやだ。ここで終わらせてたまるか。

「あー、そういうばー！」

如何にもわざとらしく声を張り上げる。驚いたユイが体ごと振り返った。夕日を背景として展開するお別れのシーンは、すこくドラマチックで感動ものの演出だったと思う。

でも、『めん。やっぱり俺には、そこは隊長さんみたいな空気の読み方は出来ないよ。

「ユイのパジャマ姿、ものすっぽり可愛いかつたなあーっ！」

「なな、なに言い出すの、いきなり！」

ユイがリンクみたいに顔を真っ赤にして、見るからにあわあわし出した。こんな彼女の表情を見るのは初めてだ。俄然やる気が出てくる。

「水玉パジャマのカッコで『空が青いの』は反則だよなあ」「ちょっとそれ以上言わないで、みんな聞いてるのよ？」

機動隊の隊員たちが手を止め、今度は何だと二人のやりとりを鑑賞し始めた。構うものか。教えてやる。この場にいる誰よりも、自分はこのユイという女の子のことを知っているのだと。

「でも一週間も俺の部屋に居たのに一度も添い寝してくんなかつたなー」

「は？ あなたと私がいつからそんな関係になつたの？」

健吾の根も葉もない大言壯語に、とつとつユイも感情的な反論を始めた。

「だいたい、健吾。あなた盗み聞きしたり人の後つけたりするのやめなさい。犯罪でしょう？」

「ぐつ。でも最初は、ユイの方だってかなりの不審者、ふりを發揮してたんだから仕方ないだろ、」

「それはつ……！ 身も知らない場所に放り込まれて、いったい他にどうしようと話つの？」

だんだんと、周囲から小さな笑い声が漏れ出す。

「だからってそれを差し引いてもジルハムに話かけるとか」「ジルハム？」

あ、しまったつい。片眉を下げる訝しげな表情のまま思考を巡らせているうちに、ついぞその言葉の響きが意味するとじろく行き着いたらしいユイは、カッと両目を見開いた。

「つ！ ま、まさか、ジルハムって ジールヴェン のこと？」

「いやー そのー」

ユイの両肩がふるふると小刻みに震え出し、その声も次第に荒んでいく。

「健吾ね、あの子に変なこと吹き込んだのはつ。 ジールヴェン という響きには、私の愛情がたくさん込もっているの。そんなふざけた語呂の名前を勝手につけて……！」

「あれはしようがなかつたからだろ」「

「何がしようがないの？ ちゃんと説明して！」

もう堪えるのは限界だ、と言わんばかりに周囲がじつと沸いた。爆笑に次ぐ爆笑である。空気の変化についていけず、健吾とユイはポカンと口を開けた。

「はつはつは！ 面白いな二人とも」

そう笑つて近づいてきたのは、あの精悍な顔立ちの隊長である。「せつかく彼女が君のことを庇つてくれていたのに……。もう言い逃れは出来んぞ。大勢の前でここまで盛大な痴話喧嘩を見せつけられては、こちらとしても君達が無関係な他人だなどと見過ごす訳にはいかないな」

「……うう」

ユイが苦い顔で俯いた。

固い強制力を感じさせながらも、爽やかな響きを含んだ声音で隊長は言う。

「青年。本件の重要な参考人として、君にも我々と『同行願おつか』臨むところだ。健吾はビシッと下手くそな敬礼の構えをとる。

「喜んで！」

「喜ばないでっ」

ゴイの鋭い突っ込みはしかし、再び周囲の爆笑を誘うだけであつた。

何かの映画でみた気がする。

着ている服を全てむしり取られ、鋼鉄の椅子に体を拘束され、冷水を浴びせられ、爪を剥がされ、鞭で殴打され、焼石を押し付けられ。

さあ、知つてることを洗いざらい吐くんだ。貴様に人権などありはしないつ。長く苦しむより早く吐いて楽になつた方がいいぞつ。もつとも、それではこの俺様が楽しめないがな！ ぐわははは。

「どうしたの。随分と顔色悪いけど」

「し、仕方ないだろ。何されるか分かんないんだから」

「だからついてこないでつて言つたのに」

「それとこれとは話が別だ」

「あなたつて本当に呆れた人ね。でも、拷問の順番を待たされているようには見えないけど？」

そう言つてユイが辺りを見回した。よく磨き上げられた汚れひとつないタイルの床、黒光りする高級皮のソファー。壁面には穏やかな海辺を描いた絵画、見事な双角を持つ鹿の剥製。はくせいあらゆる調度品が絶妙な等間隔で配置され、入室者に閉塞感を与えない工夫が見て取れる。非常に手入れの行き届いた応接室である。

「分かつてるけど緊張するんだよ」

健吾が、薄い橙の縞模様が入つた大理石のテーブルの上から、老舗メーカーの和菓子の包みを手に取ろうと腕を伸ばしたそのときだ。二人の座るソファーの上座から斜め前に見える部屋の扉が不意に開かれた。ビクッとなつて思わず手を引つ込める。

部屋に入つて来たのは、右手の携帯電話を耳に押し当てながら、左腕に膨大な資料を束ねたファイルを抱えるスーツ姿の中年女性。「動画静止画を問わず全てCGによる合成で通しなさい。報道規制

はそちらにお任せします。……分かっています

彼女は健吾とコイに軽く会釈すると、扉を閉めて再び携帯電話に

話し掛ける。

「しかしだからこそその情報操作でしょう？　ええ、ええ、目撃者の名前と住所を今日明日じゅうに割り出してこちらへ送つてください。くれぐれも漏れることのないようお願い。……長官には私から話を付けます」

携帯電話を切つて折りたたみ、胸ポケットへと仕舞う。

「申し訳ないわ。あなたたちを長い間待たせてしまったようね」

そう詫びると一人に近寄つて握手を求めてきた。コイが立ち上がり、それに応じる。健吾もコイに倣つて慌てて立ち上がる。

「いいえ。こちらこそお忙しいところ時間を取らせてしまつて」

コイの言葉を聞いた女性が、柔和な笑顔をつくった。

「あら。とても礼儀正しいお嬢さんね」

白髪交じりのオールバックと、整つた細もての顔立ちが、高潔で威圧的な雰囲気を彼女に纏わせていたが、こうして笑うとなかなか愛嬌のある人だ。二〇年ほど前はさぞかし美人だったに違いない。ひと通り握手を交わし終えると、女性はスーツの内ポケットから名刺を一枚取り出してコイと健吾に手渡した。

【防衛省特査管理局 対策部 監督官 北村千秋】

なんじやこりや。

政府の構造構成に対する含蓄ある知識を持つてゐるわけではないので具体的にどこがおかしいのかは指摘できないが、あまりに聞き慣れない響きのする言葉に少なからず異質さを感じる。まさか、ドッキリやインチキではないだろ？

「私はコイといいます」

「あ、相原健吾、です」

健吾は面と向かつて自分の名前を名乗るのが実に苦手である。そのせいかイントネーションが若干おかしくなつてしまつたが、北村は特に気にする様子もなく承知の意として小さな首肯を返してくれ

る。

「掛けちようだい一人とも」

三人は向かい合う形でソファーに腰を下ろした。

「さて。何から話しましょうか。私も実際、あなたの存在に驚嘆を禁じ得ません」

まあ、そりやそうだよ。ロボットに乗ってきたんだもんな。

俺も最初は驚きました。

北村は、ゆっくりとため息を吐くかのように次の一言葉を紡いだ。  
「まさか。このタイミングで、NFAに乗って【蒼穹世界】<sup>そうきゅうようせかい</sup>に渡つてくるなんて」

そうそう、NFAで蒼穹……ん？ 何だ、この違和感。

「向こうの世界は一体どうなつているの」

「NFAを知つてゐるんですかっ！」

荒ぶる剣幕でテーブルを叩いて立ち上がるコイ。その反動でソファーアーが揺れ、健吾はバランスを崩しそうになる。しかしそれで健吾にも違和感の正体が理解できた。

この女性、北村千秋はNFAの存在を知つてゐる……？

「こつちの世界にも、私の世界のことを知つてくれてゐる、理解してくれている人がいるんですか！」

「なかなか難しい質問ね。情報を知つてゐる、という意味では政府の中でも数十人。だけど『それを本当に信じていたか』という篩にかけると、私を含めてもさらに一桁に絞られるでしょう。もつとも今回の件で、その認識は覆ることになる」

あの。話についていけないんですけど?

「とにかく落ち着いて座つて頂戴、ユイ」

北村に促され、困惑の表情を浮かべたまま再び腰を落とすコイ。視線を外すことなく北村は語を継ぐ。

「それに。単独でこすらの世界に渡つてきたところとは、あなたNFAには【あれ】の試作型が積んであるとみて間違いないわ」  
たつた今、理解の範疇<sup>はんちゅう</sup>を超えた存在として強く印象づけられたこ

の北村千秋という人物を、コイは忽然と眺めながら問う。

「【あれ】とは何のこと? あなたはどうしてそんなことを……。

あなたは一体何者なんですか」

名刺に記された役職を問うてはいるのではない。北村千秋が放つ得体の知れない何か、その片鱗へんりんをこの手で手繰り寄せ、実態を見極めたい。そんな思いがコイの表情から読み取れる。

「現段階で、あなたがそれを知る必要はないと判断します。どうやら今の私の使命は、無事にあなたを【暁世界】へ送り届けることのようだから」

「どうやって……」

咳きにも等しいコイの問い掛けに北村は、「実際にやつてみなければ分かりませんが、我々にはたったひとつだけ、その手段を用意することが出来ます」と言い放つ。さりに。

「その為にはコイ、もちろんあなたと ジールヴェン の力を借りなければいけないわ」

愛機の名前を囁かれて、コイの瞳が再び揺れる。本来ならば未知の世界にやつってきた彼女は、その不安定な状況から抜け出そうと、北村のこの言葉に光明を見出して然るべきだろう。しかしどこか腑に落ちない居心地の悪さを感じているのか、コイは放心に近い状態で声をなくしていた。ジールヴェン。その機体が秘めるというオーバースペック。パイロットであるコイを差し置いて、北村はジールヴェン の本当の能力を理解しているというのか。

何だよ、この人。

計らずも健吾のその心境だけは、コイの反応と同じようなものであつた。この状況は明らかに変だ。どうしてコイの方が、この女性の言葉にいちいち動搖しているのか。こうこうのは普通逆だらう。

【蒼穹世界】と【暁世界】

急にそんなこと言われても困る。といふか、何の伏線もなしにこんなキヤラ出してくんぬ。シナリオが破綻する と、相変わらず

「機械に強い超インドア派」的解釈で事象を計る健吾であった。

「この不穏な空気をどうにか払拭したい。今まではどうしていただろうか。ちょっとと思い返してみよう。

あれは確かに、家に連れ帰った直後にユイの処遇に困り果てていたとや、

「ういーす！ 昨日借りた辞書返しに、」

あれは確かに、裏山に横たわる ジールヴェン の傍らでユイと大喧嘩して険悪なムードになつたとき、

「あつ、二人ともやつぱりここにいた！ 大変だよ大変つ。かなりの一大事」

明美つ。 そうだ明美だ！

さあ、妹よ。今こそお前の力が必要だ。ここはまさにお前のタイミングだらう？ いでよ我らがムードブレイカーつ！

……。

無理か。考えてみれば当然である。彼女の携帯に「当分のあいだ帰れないと思うから親に適当に言い訳しといで」とメールを送つてしまつたのだ。残念だが諦めるしかない。

そのとき、北村の胸ポケットに仕舞わっていた携帯電話が、プルルルといつ変哲のない着信音を室内に響かせた。

「失礼」

ふた折りの携帯電話を再び取り出して展開させ、通話ボタンを押す。

「私です。……誰も通さないよつにと伝えてあるはずですが？ え。

そう、そうなの」

そこで北村は一瞬、横目で健吾の顔をちらりと窺つたよつな気がした。

「 分かりました。お連れして頂戴」

「 ぱあん、と両開きの扉がぞんざいに開け放たれる。

「 やつと見つけた！ ケンにユイ」

「 明美つ！」

突然応接室へ姿を現した明美は、息も絶え絶えにゼえゼえ言わせながら、ズンズンとコイの元へ歩み寄る。

「！」これ、返しにきた

突き出した手に握られている、無骨で物々しい軍備端末。

「あ。無線機」

「それからひと言。わたし、小さい頃から、除け者にされたり、仲間外れにされるの、」

盛大に空氣を口の中に吸い込みながら溜めに溜め、一気に解き放つ。

「だいっキライだからあつ！」

天井が抜けるんじやないかと思つた。

「彼女、あなたの妹さんよね？ 例の現場であなた達の名前を呼びながら探し回つていたらしいのよ」

「あースッキリした。取りあえず水を てケン、何で泣いてるの？」

明美。

お前つて奴は、

お前つて奴はなんて、

「なんてよく出来た妹なんだ！」

「きやあつ。くつつかないでよ、走り回つたせいで口でさえ暑いんだから」

「俺は信じていたぞ、お前のことをつ」

ついせつとき一度諦めてしまつたような気もするが、そこはこの熱い妹愛に免じて無かつたことにして頂きたいと思う。

「もうつ、いい加減離れてよー。いくら実の兄とはいえ、その鼻水垂れてる顔をアップで迫られるのは精神的にキツいんだってばつ」

「照れちゃつて。全く可愛い妹だなお前は」

迷惑だと言わんばかりに腕の中で暴れまわる明美に構わず、抱擁<sup>いだきゆう</sup>と頬擦りを続行する。そんな健吾たち兄妹の姿を傍で見守つていたコイが、大きく溜め息をつき、それから小さく笑つた。

どうやらコイは、異世界の住人であるらしい。

ファンタジーよりもどちらかというと「SF寄り」の趣向をもつ健吾は、どうにもの異世界というメルヘンな響きに釈然としないものを感じたが、

パラレルワールド。

可能性の数だけ世界が分岐すると云われている多元宇宙。その別の宇宙から、ある転送システムを介してこちら側の宇宙へ渡ってきた」と言い換えて説明されてなるほど納得するに至る。

言つまでもなく、この世界の文明がひっくり返るほどの超常現象だと解釈して頂いてまず差し支えないだろう。そんなの信じられないの一言で斬り捨てるのに充分過ぎる、果てしなく漠然とした事実。だが健吾は、ジールヴェンの存在、N.F.A.なる人型ロボットによる白兵戦闘を目の当たりにして今さら何を疑うんだと結論づける。それにまだ、諦めた訳ではない。自分自身が「特別」に変わる瞬間を。

N.F.A.を乗り回したい！

コイとちゅっちゅしたい！

お前はアホか。いいだろう。そんな捻りのない突つ込みも今は甘んじて受けよう。しかしつ。身の内から湧き上がるこの猛々しいパッションを抑える込むことがどうして出来よつか。間もなく、防衛省特査管理局による総力を挙げたコイの【暁世界】帰還作戦が開始されようとしている。

家には、情報処理の資格を取る為に知人の所で合宿すると伝えてきた。健吾の事などとして興味がない父と母は「ま、せいぜい頑張

りなさい」と情のこもらない声で言い捨てた。

大学はすでに休学手続きを済ませてある。健吾の事などモホビにも思っていないのか「あ、そ」という記入済み休学届を受け取った事務員のやる気のない声が返ってきた。

買ったばかりのまだ手をつけていないゲームソフト。気合い充分で塗装に励む未完成のプラモデル。もつすぐ発売予定のフィギュア付き限定版アニメDVD。パソコンのハードディスクに眠る書きかけの創作ラノベ。この世界。北村千秋が【蒼穹世界】と呼んでいるこの場所に未練がないと言えば嘘になる。もつ一度とこちらの世界に帰つて来れない可能性は極めて高い。でもそんなものより遙かに価値のある人生を、健吾は生まれて初めて見出しつつあるのかもしない。

覚悟を決めた。

そしてこの決意は、明美には伝えないでおこうと思つ。もし妹に知られたら、いろんなことに首を突っ込みたがるというか、へんなところで世話好きというか、ともかくあの性格上、私も一緒に行くと言に出しかねない。自分などと違つて、妹は両親から多大な愛情を注がれている。やはり明美には、帰還作戦の開始直前までバレないよう細心の注意を払わねば。

「ケンさ、実はコイについて行く気でしょ。顔に出てる。ていうか、大学なんで退学届じゃなくて休学届なのさ? 覚悟がちつさい」

……。

だ、大丈夫大丈夫。

この際だから、コイ本人にさえ悟られなければまだ活路はあるはず。

「健吾。あなた私と一緒に来るつもりでしょ。絶対に許さないから、そんなこと」

おお、神よ。

健吾は跪く。  
ひざまづく。

あなたはそれほどまでにこのわたくしめを憎んでおいででしょう

か？

全長一六五・八メートルにして全幅三三・三メートルのその巨体は、かつて一〇〇〇トンの排水量と一一・六ノットの最大速力でマリアナの大海上を果敢に割いて渡り、四〇基の一〇ミリ機銃と二六基の四〇ミリ連装機関砲、さらには艦載した四五機の戦闘機によって、展開中の旧日本空軍を殲滅せしめた。

インディペンデンス級、航空母艦。

日本の領海内に浮かぶこの米軍製軽空母を取り囲むようにして、自衛隊所属の護衛艦が五隻、警戒態勢のまま周辺の海域を監視している。

「まさか、本当にあんなものを手に入れてくるなんて。あなたの交渉力にはいつも驚かされます」

旗艦と曰される護衛艦の艦橋、その通信フロアで北村千秋が傍らに立つ長身の男に語り掛けた。

「いえいえ。廃棄処分寸前のものをアメリカから格安で買い取った。ただそれだけのことです。浮かせて進ませるだけの最低限の整備しかさせていないので、正直いつ沈むか分かりませんよ」

背広姿のその男 防衛省特査管理局局長、乃木藤祐は、口の端を釣り上げながら悠長にそう答える。言葉の末尾には冗談を仄めかすユアンスが含まれていた。五〇の端緒。あるいは四〇。いや三〇の終盤か。起伏に乏しいのっぺりとした顔面と皺の少ない色白の肌が、彼の外見年齢を曖昧なものにしている。

「そう急かさずに。まだ若いのですから、彼女たちは」  
モニターに映る軽空母を視界に捉えたまま、北村が苦笑しながら彼を窘めた。

ユイと私たちだけで少しのあいだ話をさせて下さい。

それは、兄に対する明美なりの優しさだったのだろう。無論、作戦の速やかな完遂を望む防衛省及び自衛隊は、この身勝手極まりない申し出に一度は表情を滲らせた。しかし明美は、本作戦の中核を

担うユイと友好関係にある、この【蒼穹世界】では極めて貴重な存在と言える。その意志と動向には、ユイの精神状態を少なからず左右させるに足る影響力があると上層部は判断した。もしかすると、屈強な大人たちを前に何ら臆すことなく自らの主張を貫こうとする明美の悠然たる姿に胸を打たれたのかもしれない。

とはいへ、「偉そうな顔して。どうせこの何たら空母、国民の税金で買つたんでしょう?」というひとことが決定打となつたのは言うまでもないこの事実が、何とも哀しい大人の世界である。

大海原に忽然と浮かぶ、所々が赤茶色に錆び付いた機械仕掛けの庭園。インディペンデンス級航空母艦、天空へ面したその広大な離着陸滑走路のほぼ中央に自分たちはいる。

オートリアクションオフ、デ・アクティブモード。膝をついた状態で我が主の搭乗を待つ ジールヴェン 。

その傍ら、北村から渡されたある記憶媒体を手に握りながら真つ直ぐに前を見据えるユイ。

その正面、忙しく視線を泳がせながら全く落ち着きのない両手と両脚を遊ばせる健吾。

その後方、一人を見守る形で腕を胸の位置に組みながらじれったそうに静観する明美。

その上空、会話終了と同時に速やかに彼らを回収するべく監視、旋回する自衛隊ヘリ。

ユイは、とても意志の強い女の子だ。このひと月足らずでそれを存分に思い知らされた。自分の言葉を簡単に曲げるような真似は絶対にしないだろう。だからこそ、彼女の心を動かすには、彼女の心にこの決意と誓いを届けるには、生半可な覚悟では罷り通らない。

健吾にもう後はない。いや、最初からそんな後ろ盾など存在しないのだ。ユイの姿を盗み見る。白い無地のベストに紺のジャケット、ジーンズのズボン。色気のない出で立ち。それでも彼女はぜんぜん魅力的だと思った。ぶらぶらしていた四肢を止め、ユイの視線と自

分のそれを正面から交錯させる。

「俺。コイのことが、好き、好きだ」

コイ、お前を愛してる。

君の笑顔を見ていきたいんだ。

毎朝俺に味噌汁を作ってくれないか。  
ジルハムごと貴女を貰つていきます。

告白の経験など過らつさない健吾は、ドラマやアニメから多様な愛の台詞を持ち出しへは頭の中で何度もその響きを反芻した。どれも違う。そんなことは当然だ。借り物の言葉なんかじや自分の本当の思いを伝えることなど到底叶わない。だから、

「わ、分かつてゐた。自分が、どれだけ、魅力のない男か」  
不器用でいい。  
下手くそでいい。

「でも、こんな勝手かもしれないけど、コイと一緒にいると、自分を高めていくことが出来るじゃないかと、思つんだ。お前と一緒にいたいんだ。だから、」

自分の気持ちを、

自分の言葉で伝えよう。

「だから、俺を、コイと一緒に、コイの世界に……連れて行ってくれ。つ、連れて行って、下さい」

言った。言い切つた。一〇年分の勇気を込めた。まともにコイの顔が見れない。ダメだ、視線を逸らしては。彼女に嫌われたくない。正面から向き合わなければ。永遠のよつな一瞬が過ぎて。

コイの瞳は、哀しみに揺れていた。それだけで次に発せられる彼女の言葉を悟つてしまつ。

「『めんなさい。あなたの気持ちに応えることは出来ない。一緒に

連れて行つてもあげられない』

「やつぱり、俺じゃダメなのか？」

情けなくて泣きそうだ。

「そういうことじゃないの。もし健吾を私の【暁世界】へ連れて行

つて、そこであなたを死なせてしまつたら、私は絶対に後悔するから

「ら

「覚悟は

「それ以上は言わないで。そんなもの、私の世界では何の役にも立たないから。力の伴わない覚悟なんて、何の価値もないの」  
崩れ落ちそうになる理性と身体を、最後に残つたなけなしの意地でつなぎ止めていた。

「健吾、顔を上げて」

くわくわくわくわくに歪んだ顔を見られたくないのに、それはないだらうと思つ。

「あなたには、きつともつといい人がいるから」

男をフる時の常套句ではないか。でも健吾には分かつてい。彼女だつて借り物の言葉を使つたりなんかしない。これはユイの本心だ。だからこそ、逆に苦しい。

俺は、お前がいいんだよ。

両手を擦つて鼻をすすり、ゆくゆくと顔をあげる。

「普段は卑屈さの裏に隠れてしまつていいけど、あなたは本当は優しい人」

彼女の声はとても柔らかく穏やかだつた。そんな声をもつと聞きたかつたのに。

「顔だつて、あなたが思つているほど悪くないわ」

そこでユイはクスリと笑つた。

「まあ、その鬱陶しい髪はどうかと思つけど」

ほつといてほしい。余計なお世話である。褒めてるのか貶してるのが、いつたいどつちなのか。これで最後なんだからはつきりしろよ。

「うっ！」と血ら思惑した「最後」という言葉に健吾は打ちひしがれる。

「これで最後だから言つけど」

あ、今その单語言わないで。

哀しきかな。それでもユイの言葉は続く。

「明美を、家族を、周りの人を大切にして。今はまだ大して相手にされないかもしないけど。でも、いつかあなたの良さを解つてくれる人が、必ず現れるから」

そんな歯の浮くような台詞を並べ立てた綺麗<sup>エキナカ</sup>ことなんて、反吐が出来るくらい嫌いだったはずなのに。彼女の声でそれを言われたら、ほんの少しでも信じてしまいそうになる。

ユイの視線が自分の後方へ流れた。それを追うと、先に立つ明美がユイの視線を受けて「うん。いいよ」と大きく頷いた。ユイも軽く顎を引いてそれに応える。

「今度こそ最後ね。さようなら」

二人にその言葉だけを残して、ユイは踵を返すと ジールヴェンに向かって歩き始める。

終わったのだ。

今度こそ本当に。

あの日の夕焼けのように、もう何を言つても彼女の背中を自分に振り向かせることは出来ないのだろう。

ぽん。

いつの間にか背後へ近寄っていた明美が健吾の肩に手を乗せた。

「よく言つた。カツコ良かつたぞケン。今夜は失恋パーティーだ」それを聞いた途端、大声で叫びながら無性に走り出したい衝動に駆られて無造作に周囲を見渡す。目に滲み<sup>しづ</sup>、鼻にツンとくる潮風。果てしなく広がる海。海。海。

かなづちなのでやつぱりやめておく。この涙は塩気のせいなんだと無理やり自分に言い聞かせる。体じゅうを強張らせていた力が、行き場をなくして一気に諦観の彼方へ抜けていった。

ジールヴォン が迎えてくれる。これでいい。やはりこの【蒼穹世界】に自分という存在は似つかわしくない。

もう戦わなくてもいい。この場所で休んでもいいのだと、そう考えたこともある。しかし錯覚だった。市街地で制圧した ミシアに搭乗していたパイロットの死亡確認を聞いている。死因は神経にインフルアントされた時限式の有毒物質。

「封じ、機密保持でしよう。あなたのせいではないわ。気に病まないで頂戴。そんな北村の言葉に、ユイは納得などしていない。この世界に死を運んでくるのはもうたくさんだ。」

ほんの僅かな間だつたが、存分に感じることが出来た掛けがえのない平和。その名残惜しい幸せを最後にもう一度だけこの網膜に焼き付けておこうと、ユイは平和の象徴たるこの空を見上げた。

海を覆い尽すように一八〇度に渡つて展開する壮大な青。雲がひとつとしてない美しい青。さんせん天空を熱して輝き照らすのは、この星のありとあらゆる光を燐然と掌握する、『双子』の太陽。

「馬鹿げてる、そんなわけないじゃない！」

有り得ない。

瞼の筋力を総動員して目を凝らす。大きさを不安定に変化させながら、もうひとつの大太陽が震えていた。周囲の空間を脈動させる金色の強烈な閃光。形容し難い異質、奇怪、超常。天空に黄金の穴が空いて、ユイは驚愕する。何故ならその閃光が、人の形をした巨大な無機物を、この青い空に招き入れる瞬間を両の瞳に映したからである。

「健吾つ！ 明美つ！ 今すぐ伏せ

先に続く言葉は、頭上を旋回していた自衛隊のヘリが爆散する轟音によつて上書きされた。急激な鼓膜の振動に五感を削られながら

コイは、青ざめた戦慄の表情で上空を見上げる健吾と明美のもとへ疾駆。一人に飛びついてその肩を掴んで引き寄せ、強引に地面に組み敷くと自分の体を覆い被ぶせて低く伏せる。

一瞬前までヘリコプターを成していた鉄塊が、無数の金属片となつて空母の飛行甲板に降り注いだ。

中空を、巨大な推進器の唸りが駆け抜ける。

鋼の驟雨しゅううが止むと同時に、上体を起こして怒鳴り声を上げた。

「無事ね？ 立つて一人とも！」

「何、何なの」

「耳が、痛つた……」

頭上を仰いでコイは言い放つ。

【暁世界】からの進撃。空戦型NFAよ

NFA リンドエア。空戦用に軽量化された全身のフレームと、縦軸に並んだ一基の巨大なジェット推進を背部に有する量産機。バツクパツク側面から左右に広がる逆三角形の両翼が空気抵抗を切り裂いて飛翔する姿は、まさしく“鳥人”を想起させる。

推進剤による姿勢制御で琥珀色の機体を翻し、垂直に上昇していく。距離をとつて誘導弾を撃ち込んでくるつもりか。脚部側面に武装されたウェポンコンテナの形状から対艦ミサイルは搭載されていないようだが、戦闘能力を持たない空母など僅かな時間で沈められてしまうだろう。

北村から渡された記憶媒体が、自分の手中から消えていることにコイは気づいている。無我夢中で体を動かした際にどこかへ落としてしまつたか。もしや爆風で吹き飛んで既に海の中かもしれない。どちらにしろ、今は応戦を行う方が先決だ。

「一人とも早くこつちへ！」

護衛旗艦のブリッジに、張りのある高い怒声が響き渡る。

「局長！ これは最悪の事態です、何故もつと前に出て応戦しないのですか？ 何の為の護衛艦なんです！ 今すぐ航空部隊を出撃さ

せて下さい」

通信フロアで堰を切つたように乃木を攻め立てているのは北村千秋その人だ。

「監督官、どうか落ち着いて。貴方の身の上、取り乱す氣持ちはお察しする。だが我々の戦力でNFAに対抗しようと無謀です」「子供がつ、子供が殺されかけているのですよ！ それを黙つて見ていると？」

「既にこちらにも犠牲者が出ています。どうやら貴女は『自分の責務を軽視して、個人的な感情を優先しよう』としている」

乃木の細い目が、得も言われぬ強烈な眼光を宿して北村を射竦める。防衛省特査管理局、最高権力者。その威厳と霸気が表層へ浮かび上がつた瞬間だった。

「最低限の牽制と援護は行つよう命じています」

「人の命を天秤にかけるのですか？」

「この【蒼穹世界】を護る為ならいくらでも」

乃木は口の端を釣り上げてこう言った。

「しかしそれほど悲観的になるものでもありませんよ北村監督官。我々にはまだ ジール・ヴォン がある」

「ここが ジール・ヴォン のコックピットか

「もつとくつついて。なるべく体を固定するよう」

「お、おう」

寄せ合つた体をよじつてさらに密着させる健吾。恥ずかしいのか耳が真つ赤だ。もうもご訝ねてくる。

「あのさ。敵の攻撃が来るんだよな？」

「そう。もうミサイル撃たれたから

「えつ！」

健吾が驚愕するとなか、息の長い警報がコックピットに鳴り響いた。

「それってこれのこと？」

健吾とは反対側からユイと身を寄せ合つた明美が指を差した先是赤く明滅する警報ランプとサブモニター上に円形で表示された深緑色のレーダー。それに映るのは、上方から中央へと向かう四つの光点。

「ええ。護衛艦からの援護射撃がなかつたら機体に乗り込む前に吹き飛ばされていたでしょうね……来るわ」

上空、 リンドエア 脚部のコンテナから放たれた左右二発、 計四発のマイクロミサイルが、 空の青に白煙の軌道を奔らせて空母へ迫る。パイロットの技能か、あるいはFCISの性能か。護衛艦による機関砲及び対空機銃の斉射、これへの回避運動を行いながら発射したリンドエア のマイクロミサイルは、空母の飛行甲板上を正確に捉えていた。

ジールヴェン の戦術AIは演算する	X 7934	Y 123
6 Z 1285 X 8524 Z 7746 Y 382 X 9957		
Z 2089 Y 546 X 13368 Z 3071 Y 1011		
X 15758 . . . 弹道予測終了。着弾ポイント算出、誤差		
修正、許容範囲 ± 35。		

「動くわつ。掴まつてて。舌を噛まないよう！」

左脚のフットペダルをゆつくり踏み込むと、握り締めた左右のグリップを手前に引き寄せる。ジールヴェン の反応速度は、ユイの超人的な反射神経に追随するべく調整を受けている。刹那、横殴りのGがコックピットを驚撃みにして大きく弄んだ。瞬間的にマグニチュード強の地震をその身に体感したのに等しい。

「きやあつ」

全身の内蔵が右へ寄つたかもしれないと錯覚するほど激しい揺れに明美が思わず悲鳴を上げた。

マイクロミサイルが空気を裂く鋭敏な飛行音を響かせながら空母滑走路に到達。対するジールヴェン は、地面上の数センチを機動するホバリングで斜線移動とターンブーストを繰り返し、氷上を滑るようにこれらを回避する。直後に起こつた幾重の爆発と震動は、

滑走路の表面を灼いたものではない。機体の足元、対艦仕様ですらないこのミサイルが、飛行甲板を易々と刺し貫き、空母の下層部に侵入。そこで爆発を発生させて内部構造に誘爆を引き起こしている。

### 【蒼穹世界】と【暁世界】

両の世界間における兵器レベルの相違、その圧倒的な火力の差をさまざまと見せつけられた瞬間である。

「うえ

「……す、凄い」

吐き気を必死に飲み込んだ健吾と、爆発の大きな震動に驚嘆の呻きを漏らす明美。

「こちらからも攻撃する。反動に気をつけて」

FCS解放 ウエポンプラットホーム展開、出力上昇。ジールヴェンの右腕部、その内部と外部が織り込むように反転して一五〇ミリ粒子ビームランチャーの砲塔に変形。銃口を天空へ掲げ、砲身の尾端となつた右肘部に左マニピュレーターを添え射撃態勢を取る。

ヘッドアップディスプレイのターゲットサイトが、地上の獲物に嘴を向ける猛禽類くわはしが如く急降下を開始した。リンドエアの機体を追う。相対速度補正、インサイト。コイは人差し指を乗せていた右グリップのトリガーを押し込んだ。銃身内部の加速帶より指向性を与えたフォトンの凝集弾が、空気を熱して放射される。目標に命中せず。リンドエアの俊敏な軸回転によって光芒は躲され、背景の青へ消えていく。間髪入れず一射目二射目のビームランチャーをジールヴェンより撃ち放つ。

対してリンドエアは左右へのバレルロール機動で見事これらを凌ぎ切り、空母飛行甲板に接近する。自衛隊ヘリを天の藻屑と変えた八五ミリ高機動アサルトライフルの銃口が、ジールヴェンの機体に向けられた。三點連射で火を噴く。

両肩のフレームを外側へ展開させたジールヴェンのフィールドジェネレーターが、防御力場を形成するエネルギー障壁を出力。

高機動アサルトライフルの銃弾がこれに阻まれ、光沢の干渉縞を空中に輝き散らせる。 ジールヴェン が再びビームランチャーを射撃態勢に入れたとき、 リンドエア の機影は既に空母を大きく迂回して距離を取っていた。 空戦型NFAの特性を最大限に生かした一戦離脱の戦法 、 ユイは敵パイロットの操縦技量を推し量る。飛び抜けたテクニックがある訳じゃないけど、 戰場での経験値は私より遙かに上。

リンドエア の携行する、航空・高速戦闘に対応したアサルトライフルは、 突撃アサルト の名を冠してはいるものの、空対地戦を想定し、地上の敵との高低距離をカバーする為に通常のアサルトライフルに比べ極めて長い射程を有している。 加えてあのミサイル攻撃。 移動範囲を飛行甲板上に限定された状態で撃ち合つのはかなり分が悪い。 ヘッドアップディスプレイから遠ざかる敵機を見送り、両のグリップを強く握り締めながら内心で毒づいた。

ビームランチャーの命中精度はそれほど高くない。 長距離砲の工ネルギー キヤノンが健在なら狙撃できるのに……。

アラート。マイクロミサイルの接近を伝えている。

フライトシステムを使う？ いえ、訓練を受けていない健吾と中美を乗せたまま空中で戦闘機動なんて出来ない！

レーダーに映る四つの光点。先程よりも発射のタイミングが遙かに早い。 何故か 簡単である。 目標が ジールヴェン ではないからだ。

爆発。 爆炎。 震動。

マイクロミサイルが空母の船体側面に直撃し、内部で、その身に与えられた火力と熱量を解放。 破壊の限りを尽くす。 空母を沈めてこちらの足場をなくす腹積もりだらう。 リンドエア の猛攻。

ジールヴェン の射程圏ぎりぎりで高機動アサルトライフルによるヒット＆アウエイを繰り返し、機体に搭載した残り全てのマイクロミサイルを、長距離から空母のあらゆる支点に叩き込んだ。

空母が煉獄の炎に包まれた。 船底に数多の風穴を開けられ、海水

が唸りを上げて押し寄せる。墨色の煙と深紅の火の粉を吐き出しながら船体が瓦解を始める。その不気味な悲鳴が空間に響き渡り、海域を埋め尽くす。

上空からの爆撃と下層からの誘爆により凄惨に半壊した飛行甲板。ジールヴェンの周囲には連鎖的な爆発が散々と巻き起こり、鉄塊を抱いた爆風が荒れ狂う熾烈な情景を呈している。なさがら鬼の闊歩する地獄絵図のようだ。

自衛隊護衛艦からの援護射撃を鋭角的な旋回機動で去なし、リンドエアは脚部の炸裂ボルトを着火してマイクロミサイルを撃ち尽くした一基のウェポンコンテナを切り離す。それが海面へと着水、破棄されると同時に、ジールヴェンへの再強襲を仕掛けるべく機体を燃え盛る空母滑走路に向けて加速させた。

こちらは防御フィールドのエネルギーが間もなくパワーダウンする。身体をガタガタと震わせる明美の計り知れない死への恐怖が、触れ合つた肌を通して伝わってきた。健吾は既に感覚が麻痺しているのか血の氣の引いた表情で唾液を滴らせながら呆然とモニターを見つめている。危機的戦局。このままでは、ジールヴェンは敗北。護衛艦も全滅する。

死。

この場で、それはもうコイひとりのものではない。本当に取り返しのつかない領域に巻き込んでしまった。

健吾も。

明美も。

北村も。

自衛軍も。

私が、死なせてしまつ。

全身の神経がたぎるよう熱を帯びる。腹部の奥深くで眠つていた幾億もの小さな有機体が、一斉に覚醒を始めた。感情の赴くままで、喉を灼いて叫ぶ。

「このまま、何も守れないでつ！」

刹那、くぐもった電子音。

「画面が、消えちゃつたぞ」

健吾のこの言葉が、その瞬間に起きた現象の発端を表していた。

「もしかしてエネルギー切れ？」

違う。

明美の、不安げな声で尋ねてくるその言葉を、ユイは果たして否定した。自分は知っている。

戦闘システム、リストート。

ユイ、健吾、明美を囲うディスプレイとモニター群が、怒涛に溢れかえる解読不能な数言語の荒波を三人の視界に流し始めた。

「ジールヴェン。あなたはまた、私のことを守ってくれるの？」

空母甲板上を荒れ狂う鉄塊と爆炎が、ジールヴェンの機体から放たれた青白い強烈な閃光によつて滅却する。声なき声を上げ、ジールヴェンが咆哮していた。空母に広がる地獄を屠るカタルシスのようにその閃光が周囲の空間を脈動し、湾曲させていく。光に包まれたコックピットで健吾と明美が激しく狼狽する中、

「爆発かつ？」

「どうなつてゐのこれえ！」

乱数演算を繰り返すヘッドアップディスプレイを、ユイは強靭な意志の宿つた双眸で注視する。

「大丈夫。必ず勝つから、守つてみせる」

サブモニターにウェポンプラットホームが突如として復元、データ更新の信号群が津波のように画面を支配した。ユイは本能的に理解する。射撃制御ソフトのプログラムが信じ難い速度で書き換えられていく事實を。機体の兵装スペックが変貌を遂げ、一五〇ミリ粒子ビームランチャーの出力と最大射程が一気に一桁跳ね上がる。

ジールヴェンの異常な形態変化を至近距離からメインカメラに捉えた リンドエアが、推進剤を噴かせ減速、機体を翻す。ヘッドアップディスプレイに映る乱数表示が瞬時に散開、再び集約した光点が、リンドエアの軌道を追う画面中央にターゲットサイトを形成した。

「もう逃がさないつ。今度こそ命中させる！」

相対速度、距離補正。

インサイト。

ユイはトリガーを絞り込む。

青白い閃光が、右腕部の先端へ集約。異常なまでの高出力によってプラズマ熱流を纏わせたフォトンの収束弾が、狂暴な銃声を轟かせて空へ撃ち放たれる。一五〇ミリ粒子ビームランチャーの砲口が

発射と同時に溶解して吹き飛び、極限まで叩き上げられた熱量を冷却し切れず、ジールヴェンのラジエーターが悲鳴を上げた。規格外に肥大化したビームの光軸が、射線上の空間を灼き払いながら上空の リンドエア へ向かつて爪牙を剥き出す凶獣が如く襲い掛かる。

即座に反応して回避運動に入る敵機だが、常軌を逸した驚異の弾速で追従してくるビーム光を凌くことはもはや不可能であった。斜め下方からの強烈な一閃が、リンドエアの両脚部と背部を喰い破り消し飛ばす。錐揉み状態で急降下。機体を立て直そうと、残された腰部のサブスラスターを噴射しながら海面ぎりぎりを低空飛行する。しかしジェットエンジンを削り取られた背部の溶断面が機体全身に電撃とショートを迸らせ、遂にはコントロールを失つた。海面を数回バウンドしたあと、リンドエアが海中にその姿を沈める。爆発。高度一〇〇メートルを優に超える水柱が空を舞い上がり散逸し、海に大きな水紋の華を咲かせた。

やがて刹那の自由が漬え、重力に囚われた花弁は海に還り、一部が陽光を反射する鋭い輝きを纏つた雨へと姿を変えて周囲に降り注いだ。

リンドエア 撃破。

だが ジールヴェン の放つ光は降り注ぐ雨をも滅し、途絶えることはない。

『あの青い光は……！』

『作戦が始まったのか？』

無線装置から自衛隊の怒声が飛び交う護衛艦旗艦の通信フロア。眩い閃光を放つ空母滑走路を最大望遠で映し出すモニター群と向かい合つた北村が、神妙な面持ちで口を開く。

「発動しましたね」

援護射撃の強化についてあれから更に口論した結果、乃木は北村からネクタイを掴み上げられ何度も身を揺さぶられる羽目になった。

すっかり乱れてしまつたその服装を坦々と正しながら小さく咳払いをした後、彼は撫然とした態度で言葉を返す。

『ええ。まだ中枢から漏れ出すほんの残光に過ぎませんが、間違いないでしょ？』

それを耳に入れた北村が、青白い輝きを映すモニターから視線を逸らすことなく、小さく、そして敢然とした声で

「【イクシオン】」

確かにそう呟いていた。『敵機の完全な撃破を確認。救護班は空母に回れ、大至急』

空母の船体が噴き上げる爆発の熱風に煽られ、体勢を倒しながら旋回する自衛隊へり。

『駄目だつ。また爆発が起こり始めて目標に近づけない！』

その眼下。原型を崩しつつある空母は側部壁面を破壊し尽くされ、露呈した骨格の束が獰猛な焰で包まれている。誘爆によって内部構造が煩雜と分解され、鉄の刃を四方に撒き散らす。滑走路上に確認出来る ジールヴェン の機体は、放熱機構より放つ青白い閃光を不安定に瞬かせながら震えていた。光の幕が周囲の空間を歪めている為に全身が超蠕動を起こしているようにさえ見える。

「倒したのか、あいつ」

「ええ。何とか勝てたみたい」

「助かつたの？ 私たち」

「そうね。でも」

通信システムが復元、北村の声が飛び込んで来る。

『ユイ、応答して頂戴！』

「北村監督官？」

『ああ良かつた。回線が戻つたようね』

焦燥の声色を乗せたまま、北村は一気にまくし立てた。

『早くそこから離脱しなさい！ 救護班を向かわせているのだけれど、爆発が壁になつてへりがそちらへ取り付けそうにないの。あと

僅かでその空母は沈むことになるわ。急いで…』

至極真つ当な意見だとコイも思つ。出来れば自分もそうしたい。しかし言わなければならぬことがある。

「それが、」

『何?』

「機体の制御が利きません

『…』

『…』

『…』

『…』

爆音と震動が轟く中、息の詰まるよつなこの沈黙に耐えかねたのか健悟が突つ込みを入れてくる。

「ここにはボケるところじゃないだろ」

「ボケてなんかない。どうして私がこんなところにふさげなくちやいけないの!」

健吾の言葉にむつとして、グリップとそこら辺のコンソールをがちゃがちゃいじり倒す

ジールヴォンの反応はない。

「ほら!」

「いやほらって言われても」

などと言いつつ、ジールヴォンのことになるといつしてすぐムキになるコイの仕草に並々ならぬいじらしさを感じ取つたらしい健吾は「でも今のコイちょっと可愛かったかも」と鼻の下を伸ばした。

「『機嫌斜めのかな ジールヴォン は』

明美のこの指摘にコイはハツと何かを悟つたような顔になり、彼女と一人して疑惑の視線を健吾に投げかける。

「何でそこで俺を見るの?」

「ケンがジルハムとか言つから」

「今関係ないだろそれ」

閑話休題。制御不能のまま、機体の放つ閃光によつて青く浮かび

上がったコックピット。緊急脱出機構の制御系は完全なスタンダードローンである。マニュアルで炸裂ボルトを起爆してコックピットハッチを吹き飛ばすか。

しかし外に出ることが出来たとして、健吾と明美が自衛隊に無事回収される保証はない。むしろ空母の爆発と沈没に巻き込まれて命を落とす可能性の方が遙かに高いだろう。いや、ジール・ヴェンの形成した力場に触れて肉体を消滅させられるかもしれない。

「俺達の人生、このまま終わってしまうのかな」

「私はこの青い光に乗つて、【蒼穹世界】に渡つて来たの」

その言葉を耳にした健吾の瞳が大きく開かれる。コイと出逢った夜に裏山で見たあの光と、今コックピットを照らすこの光が脳裏で重なつたに違いない。

海に沈むのが先か。

【暁世界】への転送が先か。

大きく溜め息を吐いた。

「確認するわ健吾。【暁世界】に渡る覚悟があるのね？」

急な呼び掛けと強い語調に一瞬肩を竦ませた健吾だが、言葉の意味を咀嚼そしゃくしたのかすぐに落ち着きを取り戻す。

「もちろん」

「本当にある？」

「本当にある」

「本当の本当にある！」

「……そう。分かつたわ」

今度は明美に向き直つて優しく声を掛ける。

「巻き込んでごめんなさい、明美。あなたも私の世界に連れて行くことになりそうなの。覚悟を決めて欲しい。一緒に来てくれる？」

明美は 数秒の沈黙を置いて「うん」と頷き、

「この際しようがないなつ。もつこうなつたら一蓮托生でしょ」  
気持ちのいいくらいサバサバと言い切つた。スカツとする爽快な

笑顔である。

「分かつた。ありがとう」そこで健吾がもの凄い勢いで挙手。

「超ハイパー・ミラクル異議あり！」

お前はどんだけ異議の申し立てがしたいんだ、と眉を顰めて面倒くさそうな表情を作ったコイは健吾を叱咤する。

「何つ？ 切羽詰まってるから手短に」

「俺には三回も確認を取ったのに何で妹は一回なんですか。このえらい待遇の違いを説明して下さい先生」

何だそんなこと、とでもこいつよつと小さく溜め息を吐き、キッパリこいつ言い捨てる。

「信頼度の違いです」

「つ！」

健吾は肩を落として「ひどい。これはひどい。告白したばかりなのに」「と盛大にしょげ返り、明美はそれを嘲笑つかのように」「ふふん」と得意気にふんぞり返った。

『あなたたち、全員で【暁世界】へ渡るつもりなの？』

ジールヴォンの通信システムと【蒼穹世界】のそれを同調させる事が出来なかつた為、コイは明美に持たせていたあの無線機を北村に渡している。

通信回線からの北村の声に明美は、あつけらかんとこいつ言つた。

「はい。そういうことなので私達の親や学校には北村さんから説明をお願いします。ちやんと説得力のあるやつをよろしくです」

『そんな無茶な』

「そこをお国の力で何とかつ」

両手を合わせていじらしくウインクする明美。音声のみで映像は向こうに送られてはいない。しかし彼女のこの何とも憎めない仕草と雰囲気だけは届いたのか、こんな言葉が返ってきた。

『……ふつ。こういう事態に陥つたのには私にも責任があります。善処します』

「ありがとうございます」

「ツクピットを交叉する青の粒子が、強引に軌道を切り替え流れを変えた。上方へ向かつて光が遷移し、

「もう時間がないみたい」

ユイのその声を絡め取るかのように振動して場を満たした。

腹部が、熱い。

不安定な閃光を成していた ジールヴェン の放つ力場が、美しいドーム状へ整形してさらに大きく成長 空間の歪みが、外部風景を視認出来ない程にまでその曲率を上昇させ、周囲のエントロピーが増大する。

通信回線の途絶する寸前だった。北村の柔らかい声が、

『行つてらつしゃい。【暁世界】に帰つたら、私の娘と孫によろしく

く

「え、

しかしユイがその真意を問い合わせることはもう出来なかつた。

消失。

この言葉以外にそれを表現し得るものは存在しないだろう。

ジールヴェン がこの世界から消えた。

青白い閃光が絶えたのちに訪れる、瞬間の静寂。機体の転送に空母の飛行甲板と中層部が飲み込まれ、それらを構成していた物質が球形に消滅、巨大な空洞を作つていた。まるで世界からその一部分だけを切り離し、抉り取つたかのよう。空洞が重心の位置エネルギーを根刮ぎ奪い去つて船体を大きく分断、空母の原型を完全に崩壊させた。圧倒的な質量をもつ無秩序へと姿を変えた合成金属の孤島が、耳をつんざく断末魔の叫びを上げる。インディペンデンス級航空母艦、その成れ果てが、日本海の大波に抱かれて沈んでいく。

「あの兄妹のご両親には何と説明するおつもりですか北村監督官。下手をすれば民事訴訟で裁判沙汰でしょう」

乃木の声に怒りはなかつた。疲労と困憊、寝れた表情が彼を年相応に老けさせたように見える。

「今の時代に神隠しなんて流行りません。防衛省が民間人を誘拐したとなれば、内閣は血相を変えて隠蔽にかかる。お上の方々が今度は責任の擦りつけ合いに獅子奮迅の活躍を見せてくれますよ」

全く以て冗談には聞こえないが、そこでまた口の端を釣り上げて乃木はこう付け加える。

「明日の幕僚会議は騒がしくなりそうです。今夜中に耳栓を用意しておいた方がよろしいですかな?」

どうやらこれは彼の癖らしい。

北村は同じく寝れた表情で苦笑し、開き直ったような口調で答える。

「全力で対処します。あの子に『善処しましょ』と約束してしまいましたから」

「それは頼もしい限りです。しかしそれよりも……、犠牲となつた自衛隊員の遺族の方々に、何と言つて頭を下げればよいのか、私は検討もつきません」

乃木の瞳に浮かぶものは、【蒼穹世界】の尊い人命を削つてしまつた現実を鑑み、慈しむ悔恨の揺らぎ。

太陽が、西へ向かつて緩やかに歩みを進める。このまま地平線に沈んでも、明日には再びその顔を見せるだろう。そしてこの世界を照らし、空を大気の蒼に染める。何故ならその事実こそ、ここが【蒼穹世界】であるという証明だからだ。

## 明けない夜明け（1）

【彼】は道に穴を空けた。

穴の底に炭火を仕掛ける。罠に掛かつて落ちた者を丸焼きにする  
為だ。

やがて現れた【彼】の義父がこの罠に掛かり、炭火の炎によつて  
焼き殺された。

【彼】は自らの義父を抹消し、この世界で初めての身内殺しとなる。  
神々は怒り狂つた。

【彼】を蔑み、憎み、迫害し、糾弾する。

その渦中、十二神の王ゼウスは【彼】の罪を浄化し、【彼】を神  
々の晩餐<sup>ばんさん</sup>へ招き入れた。

しかしあるうとか【彼】は、再び陰惨で凶悪な謀略を巡らさせ  
る。

ゼウスの后、ヘラを誘惑し、<sup>たぶら</sup>誑かし、我がものにしようと言葉巧  
みに言い寄つたのだ。

主神ゼウスは怒り狂つた。

ヘルメスの鞭により【彼】を断罪し、タルタロスの火焔車により  
【彼】を永久の苦しみへと縛りつけた。

永遠に廻り続け、その身を焼かれ続ける火焔車の炎の中で、【彼】  
は何を思い馳せるのか。

世界の掟と律を破り、神に対する熾烈な裏切りを行使した愚者。

【彼】は愚者。

その愚者の名は 。

【イクシオン】

見渡す限り一面の荒野が広がっている。何もなかつたはずの場所から、光が生まれた。空気を脈動させる青白い閃光。空間を歪ませながら世界に干渉し巨大化する閃光の力場は、ドーム状を成した状態から急激な波動の起伏を生み不安定に瞬いた。それは、本来あつてはならないはずの赦されざる力。この世界の自然法則、物理法則を飛び越える　まさに神への裏切り。永久を灼き舞う火焔車の灯。

### 【イクシオン】

力場が収束へ転じ矮小化。光の中心に姿を現した巨大な機人は、ジールヴェン である。

瞼の向こうに静けさを感じて、健吾は恐る恐る瞳を開いた。

G P S 作動　座標特定。

「帰ってきた。やつと……」

傍から聴こえるユイの感慨深い声。モニターに映る光景は地平線の向こうまで続いているのではあるまいか、と錯覚してしまう程のだだつ広い荒れ果てた大地である。画面の上端に座標数値らしきものが表示されたが、自分にはちょっと読み取れない。

「明美、健吾、体に異常はない？　痛いところとかある？」

「ううん。私は大丈夫」

「俺はちょっと腰にキてる」

「それくらいなら大丈夫そうね」

自分と肩を合わせてひつしりと寄り添つている健吾を見て、ユイは思わず「ふつ」と吹き出した。

「何で笑うんだよー」

「ふふ、ごめんなさい。あんまり一生懸命にくつついてるものだからつい」

「ユイがくつづいてって言つたんだろ」

「そうだった。でもほら、敵はもういないから離れてもいいわ」

「えつ！　う、まあ、うん」

虚を突かれたように慌ててユイから体を離す。

「うう」

「これはかなり残念だ。柔らかくて暖かいユイの身体の感触を、もう少しのあいだ味わっていたかった。断つておくが、この気持ちは純情であって、決して欲情ではないのである。

「これからどうするの？」

明美の言葉に一端頷いて見せ、コイはコックピットのコンソールに利き手を伸ばすと機械慣れした滑らかな指捌きでそれを操作する。心地いいリズムの電子音が鳴り響き、ヘッドアップディスプレイに『system online sending signal [wait] . . .』の文字が表示された。

「今、友軍に機体コードと信号を送ったわ。通信可能な距離に味方の鑑が入ればすぐにでも応答があるはず」

「敵に見つかったりしないよな？」

不安げにそう訊ねると、それを笑い飛ばすように彼女は明るく答える。

「平気よ。一〇年前はここも戦場だつたらしいけど、幸い今は同盟軍の国領内になっているから滅多なことじや発見されたりしないわ。それに ジールヴェン が搭載する通信システムの識別機能は優秀なの。ECM だってそれなりに信頼度は高いし」

なるほど。それは頼もしい限りだ。命を脅かす危険は一時的にしろ本当に去つたという訳か。へなへなと肩の力が抜ける。けれど、安心と同時にくやしい気持ちを抱いている自分もいる。何故ならばジールヴェン の性能について語るユイは、とても嬉しそうであり、そして何より楽しそうだから。ジルハムと無力な己と比較して、健吾はまた少し嫉妬した。

愛機の自慢を終えて満足げに頷いたユイが、再びコックピットのコンソールに指を重ねてこう言った。

「外に出ましょ。ぐずぐずしていると日が暮れてしまうから」

時刻は既に日の入りに向かっており、外は綺麗な夕陽が輝いてい

た。文字通り世界の壁を越えて、コイの背中に再びこの手が届いたことへの実感が、その光景を通じてようやく健吾の心を満たしていく。

俺はやつたぞ！

勢い余つて、ガツツポーズを取りそうになつたが寸前のところで自分を抑える。もはやこれは運命ではないか、とすら思つ。コイと自分との間に強い人生の交わりを感じずにはいられない。

確かに、一度自分は彼女にフラれだし、先ほどのように今はまだジールヴェンにも勝てそうにない。それらの事実は潔く受け入れよう。しかしユイは「他に好きな人がいる」とは、ひと言も口にしなかつた。もし恋人の存在　もちろんNFAではなく人間のを理由に自分の求愛を断つたのなら、律儀な性格上、彼女は必ずその旨を打ち明けてくれたはずだと健吾は推察する。

コイと一緒に世界を渡つたんだ。彼女のそばにいれば、またアタックする機会はきっと巡つてくる！

顔だつて、あなたが思つてゐるほど悪くないわ。

胸に刻まれたコイのこの言葉が、図らずも健吾の恋心を再び燃え上がらせてゐる要因となつてゐることに疑いの余地はない。

するんだ。もう一度、告白。

「こらー、そー。サボるなあ」

背後から野次が飛んできた。

誰だ新たな決意に満ち溢れたこの崇高なる独白に水を差す輩は、と振り返る。すると大量の缶詰めを両腕いっぱいに抱えた妹が、それを落とさぬようにとおつかなびつくりな歩調でこちらへ向かつて來た。突つ立つたままの健吾を見て、口をへの字にひん曲げながら不平を漏らす。

「早くテント組み立てよー」

ああ、ここには明美もいるんだつたつ。余計なオマケがついてきたもんだ。

「缶詰め、投げるよ？」

可愛らしく小首を傾げ、怖いくらい満面の笑みで明美は言った。  
声に出してもないのに相変わらず鋭い。彼女の戦闘能力なら、例え小さな缶詰めひとつでも脅威の殺傷兵器と化すだろう。ここは血が流れぬ内にとつとと謝ったほうが得策である。

「『』、ごめん」

「よろしい。さ、日が暮れる前に何とか寝床を確保しないとね」

健吾はユイから任された野営の準備 すなわちテント張りの作業を再開する。明美がその辺に缶詰めの山をおつ立て、塞がついた自分の両手を空けた。慣れないテント張りにアタフタする兄の不甲斐なさに見かねのだろう。健吾の隣に腰を下ろして作業を手伝ってくれる。支柱となる何本もの金具を伸ばして固定し、厚い革を重ねて作られたダークブルーの幕を広げて小屋を組み立てていく。

膝立ちの状態で駐留させた ジールヴェン。その脚部の収納スベースから取り出した残りの食料パックと水ボトルを肩に担ぎ、更に大量の資料を脇に抱いたユイが一人のところへ戻った頃には、既に立派なテントが完成していた。素人が組み立てたにしてはなかなか見てくれのいいテントに少し感心して、

「あ、全部してくれなくて良かったのに。ありがとう」

疲れた表情で座り込む健吾と明美に労いの言葉を掛けた。

二人は何もテント張りに全力投球したせいで疲れ果てたのではないだろう。直前の戦闘に巻き込まれた事が精神的、肉体的な疲労を極端に増長させていた。平和に溢れた【蒼穹世界】の日本で育つた二人にとつては文字通り死ぬ思いをしたに相違ない。戦闘に関してはユイにとつても同じであつたが、戦場で半生を送つてきた自分との判然たる適応力の差が出たのだろう。

ユイは三度一人を巻き込んでしまった行為への罪悪感に駆られた。一瞬が生死を分かつ戦場で、自分が下したあの選択はやむを得ないものだつた。だがそんな兵士としての常識も、二人を【暁世界】に連れてきてしまったという大きな罪の意識を打ち消し相殺するほど

の効力はもたない。

足元に視線を落とす。人の原型を嘲笑うかのように細く長く伸びる暗い影が、まるで自分にかけられた重たい呪いのように感じる。安っぽい悲劇のヒロインを気取っているのでは断じてない。何故ならば【暁世界】で起こる激しい戦火により健吾と明美が命を落とすその確率が、覆しようのない強固な正数を以てこの現実に存在しているからだ。この現実を、二人の両親は、親族は、友人は、どう思うだろうか。

「ユイ？」

明美の心配そうな声を聞いて我に返り、無理に笑顔を作る。

「何でもない。もうじき気温が急激に下がつてくるわ。中へ入りましょう」

テントの間取りは四畳ほどで三人が入るには少々窮屈な広さだが、食事をして睡眠を取るだけだと考えればさして不自由はないだろう。天井の据付ライトと床のランタンに柔らかく照らし出されたテント内は、視覚的な刺激を一切持たない平穏な雰囲気に包まれている。数時間前の目まぐるしい戦闘が嘘だつたかのようなゆつくりとした時間が流れる中、プラスチックのフォークを片手に少し遅い夕食を摂る。

乾パン。

鯖肉。

クラッカー。

フルーツ。

ミネラルウォーター。

質素な非常食ばかりで食感は味気なかつたものの、こういう食事はやっぱり楽しい。中学高校時代、学習キャンプや修学旅行の夜に、隠し持つて来た軽食やお菓子を頬張りながら、同班の友人たちとあれこれ語り合つたときの多感な思い出が微かに蘇る。

「あ。トイレঙ্গুする、やっぱ順番に外だよな」

「いらっしゃり、いま食事中なんだからそんな話しないで」

「ふふ。生理現象だもの。仕方ないわ」

「バカなんだからもう。それより重要なのはお風呂だよー」「お風呂……だつて？ なぜだろ？ 今この場で聞くその言葉には、

とても甘美な響きを感じる」

「黙れエロガツパ」

「しばらくはお湯で体を拭くしか出来ないと思つ。我慢してね」

健吾が下らない話を振り、

明美が鋭い突つ込みを入れ、

コイが小さく笑つて答える。

絢爛けんらん反語の晩餐が緩やかな時を刻む。子供たちだけの愉しい団饅だんらんは疲労を空腹へと置き換え、周囲に転がる空きの缶詰めがひとつ、またひとつと増えていく。そんな食べ散らかされた容器をちらりと一瞥し、コイが思索に耽つている姿を健吾は見逃さなかつた。

在庫が心配になつてゐるのだろうか。【蒼穹世界】の日本政府からコイに支給された食料は、成人男性が約一〇日間生活できる蓄えに相当する量だと聞いた。【暁世界】帰還作戦の発令に際し作成されたマニコアルに基づき、当然これは一人分の摂取量を算出したものである。それをコイと明美と自分で更に分けるざつと概算すると三日と少し保てば御の字といつたところだらう。

「食料大丈夫か？」

「ん。そんなこと心配しなくていいから、たくさん食べて」

コイは口許をほんの少し綻ばせてそう言つた。憂いの面持ちで答えたように見えるのは果たして健吾の思い過ごしだらうか。

何だよ、いきなりお荷物になつてるじゃん俺。

無力な自分だけれど、ならばせめてコイの憂いを取り払つてあげたい。せめて彼女を本当の笑顔にしてあげたい。場を和ませようと口について出た言葉は、

「ごめんな。うちの妹がバクバク食べるもんだから……」「あつた。

すまん妹よ。コイの微笑みを取り戻す為に今一度お前の存在を頼らせてくれ。

「ほほほおー。ケン、どうやら君は命が惜しくないと見えるな」

明美は田を細めながら鼻で笑うと健吾の挑発に乗ってきた。

「コイ、辞書みたいなある?」

雷に打たれたかのようにビクッと全身を震わせる健吾。

しまつたそう来たか!

英語事典から繰り出される惨たらしい殺劇の数々が、不動なる過去の経験則として胸中を巡る。軽い気持ちで振ったはいいが、流石にこれはやばいと焦る。額に変な汗が滲み出てきた。

「辞書? 戦術指南書ならあるけど」

「あ、それでいいよ」

## 明けない夜明け（2）

「待てユイ早まるなつ。お前も知つてゐるだろつ？ 明美に辞書を持たせたら危険だ」

健吾が危機迫る形相で説得に掛かるが、既にユイは戦術指南書なる分厚い書籍が数冊ほど重ねられたテント内の一角に人差し指を指示した後だつた。

「遅いつ

「させるかあつ

最終兵器妹の完成を全力で阻止するべく、最凶の武器をその手にしようと立ち上がる明美に向かつて決死のダイブをぶちかます。

「きやあ！ 離してよこのヘンタイ」

半ば押し倒す形になりつつ明美の両脚へしがみつき、健吾は懸命にこの暴君を抑え込む。

「それは出来ない相談だなつ。お前に辞書を持たせたら最後、ここは血染めの地獄と化す！ 僕には兄としてそれを未然に食い止める義務があるつ」

「吹つかけてきたのはそつちのくせにいい」

ほふく体勢で戦術指南書の小山へと強張る腕を伸ばす明美。それを、彼女の体を上から羽交い締めにした健吾がガツシリと妨げる。わーわーきやつきやと奇声を上げながら享樂を貪る兄妹の姿を眺めてユイは、控えめに抱腹すると声を漏らして笑つた。

よしつ。我ながら上出来。

健吾がゆつくりと体の力を抜いていく。すると明美もユイの笑顔を認め、表情を緩ませながらパタリと動きを止めた。

明美、もしかしてお前もわざと……？

もしそうだとするなら全くナイスな妹である。防衛省まで駆けつけてくれた件と併せて、明美に対する認識を改めてやらんでもない。

「楽しそうね二人とも」

楽しさないつ、とまるで照らし合わせたかのようなタイミングで健吾と明美が同時に反論の意を示す。さすがは兄妹、息もピッタリだ。

だが、ユイは美しい柳眉を微々と沈ませながら、やがてその微笑みを再び憂いの色に染めていく。健吾は田を疑つた。

また。何で。

彼女の次のひと言が全てを物語る。

「家族つていいわね」

さらに付け加えられた言葉は、

「私には」

消え入りそな程に小さく、か細く、健吾にその先を聞き取る事は叶わなかつた。

意識に去来した問い掛け。

ユイに家族はいないのか？

言えるものか。

言えるはずがない。

不思議な直感があつた。

それはユイの、胸の奥底に巣くう未だ見ぬ禁忌に触れてしまつような気がした。いや、触れるなどと生易しい比喩では許されず、纖細な彼女の心に十足で踏み入ることになるかもしれない。恐らく明美も同じ懸念を思惑したのだろう、口をつぐんで視線を遁走させていいる。

ユイは確かに強い女の子だ。一六歳という年齢がもつあらゆる常識と限界を、遙かに超越した意志の強さと覚悟の強さ。出逢つたときから肌に伝わってきた。まさに健吾の言葉を使うなら、それは自分たちとは理の質を決定的に違え、【蒼穹世界】のあるべき調律を討ち碎く「特別」という名の破調。この存在の強さこそユイだつた。しかし健吾と明美は彼女と共有したこの一ヶ月余りの時間を通じ、その強さの向こうに隠された脆く儚い少女としての危うさを、僅かながらに感じ取れるようになつていた。

「ごめんなさい。何だか興を削いでしまったみたい」

「別にそんななんじゃ、」

「疲れたでしょ。今日はもう休みましょうか」

健吾も明美も、それ以上は何も言えなかつた。

ミノムシになつてしまつた自分の身体を、もぞもぞと動かした。ダークグレーに彩られた分厚い表皮をもつ大きな大きなミノムシだ。

「んご」

ミノムシを蠢めかせ、頭を出す。ゆつくりとその瞼を押し上げた。ようは寝袋である。空間を支配する冷暗な静寂の中、テント内の床に「口りと不精に転がる二つの寝袋。その片方が消灯時に与えられた健吾の臥所だ。

それにもしても、疲れているはずなのに変な時間に目を覚ましてしまつた。夜明けなどまだ遙か遠い彼方だらつ。

掛けと敷きの隔たりが皆無に等しい二重の毛布が全身を抱擁し、素肌から蒸し上がる熱を外へ逃がさぬよう寝袋の内側に閉じ込める。健吾の軀幹には大量の汗霜が滲んでいた。就寝中の体温低下を防ぐ主旨ゆえの構造なのは承知しているが、大凡アウトドアに免疫のない人間からしてみればこれはかなりの苦行だ。

うう、暑いのか寒いのかよく分からん。気持ち悪い。

兎にも角にもまずは汗を拭き取るべきだと思い立ち、いそいそと寝袋から這い出る。ミノムシが脱皮した。入り口の隙間から微かに射し込む幽玄な月明かりが空氣中に薄青色のヴェールを掛け、目前を遊泳する塵と埃を緻密に煌めかせる。月明かりと塵埃のカーテンを通過し、歯ブラシやタオルの入つたナップサックが放つてある一画に向かおうとして 方向転換。

分かつてゐる。覗き紛いな行為など褒められたものではない。しかし身の内から溢れ出るこの切望にはどうしても抗えなかつた。

ひと目でいい 、ユイの寝顔が見たい。

音を立てぬよう如何にもな差し足忍び足でそつともう一匹のミノ

ムシへ近寄つて腰を落とす。

長い睫毛。

整つた鼻筋

小さな口許。

そして透き通るような精白色の肌が、夜闇を纏わせて幻想的な麗貌を醸し出している。初めて視界に入れたユイの寝顔は、やはり年相応の幼さがあった。警戒心も敵愾心も全く存在しない彼女の無垢で健やかな表情。

健吾は思わずふにやあ、と顔を情けなく綻ばせた。  
やつぱすげえ可愛いい。

どんなに特別なことが出来たつて、その前にユイは一人の女の子である。本来ならば、こんな表情をもつと見せてもいいはずだ。

“私は、確かに ジールヴエン でたくさん人を殺してきたけど”  
あの時の自分は頭に血が昇つた状態で相手に気を回わす余裕などこれっぽっちもなかつた。今思い起こしてみれば、この言葉を発した瞬間の彼女の表情は痛々しいほどに辛辣じんざいだった。強く握り込んだ拳を小刻みに震わせ、苦虫を噛みしめるようにぐつと何かに耐えていた。

それは大きな罪の意識だつたのだろうと漠然と悟る。

街中に出現した ミシア のパイロットが死んだ時も。日本海の端で自衛隊ヘリが爆散し尊い命が消えた時も。未知なる力を発現し リンドエア を撃墜した時も。

健吾たち兄妹を【暁世界】へ連れてきてしまつた時も。

ずっと彼女は悔っていた。それでも自らを省みず、兄妹の安否をいつだつて気にかけてくれる。この事実を思えば思つほど、健吾の中でユイに対する慈しみと愛おしさがさらに大きく膨らんでいった。一六歳の少女が背負うには重すぎる。自分にその荷を少しでも分けてはくれないだろうか。

自分が彼女の支えになつてあげたい。

ただひたすらに受け身を徹し、無償で与えられる愛情だけを求める、

自分からは決して誰も愛そつとはしなかつた滑稽で我が儘な青年の、それは確かに心証の変化であった。

それにしても 。

今から遡ること五時間飛んで――一分と三七秒。

「寝袋がこれと予備のもうひとつしかない。窮屈だけれど、片方は何とかして二人で使うことになるわ」

「何だつて!」

「健吾。私と一緒にや?」

むしろ大歓迎です。ジールヴェンのコックピットで身を寄せたあの感触を再び。

「コイの躰、ふにゅふにゅしてとっても柔らかいよ

「あうふ。そこはダメだつてばあ」

男の理性を搖さぶる甘い喘ぎを漏らした一六歳の少女が、躰を這う青年の指先に官能を覚えて妖艶な曲線をビクンと反らす。ひとつ寝袋の中で寄り添う健吾とコイ。

「声を上げると明美が起きちゃつだろ。でもホラ、風邪は引かないように、しないとな、んしょ」

窮屈な中で健吾は体をくねらせると、辺々しつ不器用な手つきでコイの肢体に触れて彼女の造形を確認する。

「ひやう。もう、健吾のえつち」

大きな瞳を涙で濡らせて、頬をもぎたての桃のように染め上げたユイが、健吾の軀幹に両腕を絡めてくる。思わず彼女の背筋に腕を回して強く抱き寄せた。

「あ……ん

異性と躰を絡め合ひ至上の快感。正氣を狂わす喜悦が鋭敏な電撃

となつて全身を駆け巡り、あらゆる性感帯の感度を跳ね上げる。

「あつ……！ う

「コイー」

お互の姿を潤んだ両の瞳に映す。やがて腕の中でユイは健吾の胸板に顔を埋め、恋人と共に幸福を微笑みに讃えながら上目遣

いでこう囁くのだ。

「健吾の心臓の音が聴こえる。とくんとくん、て

「か、可愛すぎるっ！ もう我慢出来ん。俺はお前が っ

脳が溶けてしまって、そのアホ妄想がいよいよ以てフルスロットルを掛けようかという時、憐れ健吾の意識はここでぶつ切りになつた。いや正しくは“された”。鼻の穴を卑しく全開にした彼の顔面に、凶悪な殺傷兵器と化した戦術指南書の角がめり込んで来たからに他ならない。

「大丈夫だよユイ、あなたの貞操は私が必ず守つてみせるから」

「あ、ありがとう明美。言つてる意味がよく分からないけど……」「どうか軽蔑しないでほしい。脳内でユイのキャラがやたら違う事にも突つ込みを入れてはいけない。下手なエロマンガみたいな、好きな女の子との甘くていやらしい妄想とは男なら誰だつてするものなのである。

妄想、もとい回想終了。

寝袋の中、愛しの姫君であるユイの背中にその身を預けているのは、何を隠そう只今絶賛爆睡中の我が妹だ。ねつとりとした手つきで右頬に残る生々しい流血の痕を撫で回しながら、健悟は明美の寝顔に羨望の眼差しを注ぐ。

何て羨ましいやつなんだ。

お互いの体温が熱を保つ為、彼女達の入った寝袋の毛布は一重に設えてある。僅かに空いた隙間からちらりと覗くユイの蠱惑的な鎖骨と、その先にあるほどよい膨らみに富んだ柔らかそうな胸元へ、健吾の視線は釘付けになつた。そのとき、明美がユイの感触を堪能するかのようにその首筋に頬擦りを 、

「ん……ふ」

明美の行為に反応してユイが艶っぽい吐息を漏らした。

つ！

健吾は勢い勇んでユイの口元へ身を乗り出し、彼女の吐息を残さず自らの体内へ取り込もうとす一は一す一は一深呼吸。ああ彼女に

触れたい。

そんな健吾を尻目に、明美は人間湯たんぽにしたユイを背中からぎゅっと抱き締めると、それはそれは気持ちよさそうに身をよじつて満足げな笑顔のまま快眠を貪っている。

見せつけかつ。生殺しかそうかつ。

これはおかしい。明らかにおかしい。こういづラブコメ路線のイベントでは、そこは本来主人公である自分のポジションではあるまいか。こうなつたら願掛けだ。私めもユイの体に触れたいです、と切実な願いを込め、まるで盲目的な信仰者のように指を絡めて天を仰ぐ。誰か俺に主人公補正を下さい。

お断りです。

そんなお告げを聞いたような気がした。

切なくなつたので汗を拭いてテントを出る。明美の羨ましさとユイのエロさに悶え狂いそうな自分を夜風で冷まそう。とはいって、それで風邪を引いてしまうのは望ましくない。手にした上着を恰幅に羽織る。それが就寝前までユイの着ていたシルクジャケットなのは、自分を冷遇した神への囁かな反抗のつもりだ。

柔らかくていい匂いが健吾の鼻腔を仄かにくすぐる。

くんくん。

「ユイの匂い」

女の子つてどうしてこう柔らかくて甘い香りがするのだろう。鼻の下を伸ばして顔をへにやりと崩す。

気温は低いが風は思ったほど強くなかつた。ビスケットの屑みたいに見える石の群小が無作為に敷かれた荒れ地を、ザクザク音を立てて踏みしめながら歩いて行く。殺風景という言葉すら今は豪奢に感じられてしまうくらい、ここは砂と石以外に何も無い場所だ。

「戦争のせいなのか」

自然と洩れた自分のその言葉を受け、敵NFAの強襲により命を落としかけた昨日の記憶が、シナプスが結合し得る限りの鮮明な解像度とリアルな感覚を伴つて全神経に再生される。頭上の爆発が空

氣を侵して汚染する感触。押し倒され、視界を回転する天空。静と動の絶望的な差をこの身に叩きつける激震と激動。恐怖の迫間に顕現する巨大な力の胎動、青い光。

ほんの一瞬、体だけをここに残して心が時間を跳んだ。  
「よく無事だつたもんだよな、ホント」

## 明けない夜明け（3）

好きな女の子が自分を護ってくれた。男としては情けない話かもしれないが、健吾は気にしていないし、そんな余裕はなかつた。

そして命を賭して戦つたのは、ユイだけではない 立ち止まる。

「よつ、ジルハム。眠れないからちょっと付き合つてくれないか」

世界を彩るものは宵闇の體へ溶け込み、枯渴の大地を青暗く塗りかえている。健吾の色を浸蝕せんと降りる夜の帷とぼり、その片鱗で、ジールヴェンは揺るぎない存在の形を彼に示した。機体装甲の表面を張り巡る結露が、月明かりの袖を受けて淡く美しい燐光を放つ。

「あーあ。俺もお前みたいにユイから愛されたいよ」

苦笑と共に漏れ出た咳きは白い吐息きのりとなつて、微かに奔る夜風に渙けいわれていつた。

ところで今さらな話だが、機体脚部の踝辺りから缶詰めやらテントやらが出て来るのを目の当たりにした時はさすがの健吾も頭に血が昇り、「夢を壊しやがって……謝れっ。地球上にくすぐる一〇〇億の口ボ好きに謝れっ」と怒鳴りつけた。すると半眼の明美に、「いや人類の総人口、六〇憶だから。それに収納があつた方が何かと便利じやん」と女性目線の建設的な意見を諭され、後から冷静に考えてみれば、なるほど機能のひとつとしてはそんな悪いものでもないなと思い直す。

新世界の開拓者として全人類から多大な羨望と賞賛を集める稀代の宇宙飛行士だつて、ずんぐりむつくりオムツを穿いてスペースシヤトルに乗り込むのだ。戦闘メカに缶詰めテント入りの収納くらい充分目を瞑れるサブリミナルではないだろうか。自分が機械に強い超インドア派だという事実を差し引いても、NFAとは実に興味深いマシンだと思う。

「ジルハムよ……」

健吾は何時になく真剣な眼差しで、

「ところでNFAって何の略だ？」

割かしどうでもいいことを訊いた。

白慢じやないが、自分はゲームの主人公名を入力する画面で一時間くらい延々と悩み抜けるほど件のネーミングには拘りがある。加えてロボットアニメが大好きだから、これは気にするなと言つ方が無理だった。

斯くして健吾は、何らかの頭文字を取つた略称と思しきNFAの正式名称に考察を馳せる。ネオファイティングアーマーか。ニュー・フィジカルアクションか。ナチュラルファイナルアグレッシブか。大変お気の毒なネーミングセンスだった。

「で、どれなんだジルハム」

まるでこの中から選べ、と言わんばかりの酷いこじつけである。健吾が見据えるジールヴェンの頭部カメラは、人の双眸をモチーフに設計された光学式のデュアルアイセンサーだ。その瞳に宿つた哀愁漂う藍染の光沢に、答えが返つてくるはずのない泰然な沈黙が重なり、「知るか。そんなのユイに訊けよ」というジルハムの無言の訴えのように思えて健吾は軽く吹き出した。

「ごめんごめん。機嫌悪くしないでくれ」

呼吸を整え、わざとらしく咳払いをすると改めてジールヴェンと俯仰を構える。再びの真摯な眼差し。

「その、何だ、お前に言いたいのは本当はそんなことじゃなくて、えと」

呴いて健吾はジールヴェンの機体を視線でなぞる。苛烈な戦闘機動を耐え抜いた脚部、迫る熱量を受け止め分散させた肩部、中枢たるコックピットを守護した胸部、パイロットの眼を担つた頭部、度重なる白兵戦を支えた左腕部。

そして、未知なる力の集約と放出、強大なエネルギーの濁流を受けて先端が消滅した右腕部、可変機構が欠損し、マニピュレーターは失われた。その姿はまさに戦場で片手を失した兵士である。我が君主への徹底的な忠誠と献身の先で、使命の完遂と引き換えに蒙る

つた代償。

「ごめんな、痛かつたろ？」

まるでユイのような物言いが自身の口から零れ出たことに自分で心底驚いた。気恥ずかしさから頬を搔く。それから健吾は、ジールヴェンに向かつてぺこりと頭を下げる。些か角度が物足りないが、不慣れな為そこはご容赦願いたい。形だけではない、本心からの謝礼をこうして体で表現したのは何年ぶりだろうか。

「ユイと一緒に、俺と明美を護ってくれてありがとう」

これは絶対に言わなくてはいけない、そう思った。

「お前がいなかつたら俺たちは確実に死んでた。本当にありがとう」頭を上げる。

認めよう。

「ああ、お前は最高にカッコいい奴だよ」

ジルハムの動き回るアニメがあるならDVDは予約で全巻揃えるし、ジルハムを再現したフィギュアがあるなら喜んでこねくり回す、ジルハムの設定資料集があるならそれをおかずご飯が三杯いけるだろう。

以前の自分ならば。

「でも」

現在はもう違う。健吾はそんなものより、もっと重大な感情を自分の中に見つけた。

「ユイを諦めた訳じゃないから。いつかあいつを俺に振り向かせてみせる」

グッとジールヴェンに拳を突き出す。

「俺と勝負だ……！」

男の宣戦布告である。

もちろん返つてくる言葉はない。代わりに、周囲を一陣の風が吹き抜けた。肌寒さを感じて身を震わす。

「寒くなってきたな。俺もう戻るわ。付き合つてくれてさんきゅ」

ジールヴェンの頭部カメラへにかつと笑いかけたあと、健吾は

踵を返した。砂と小石の重奏を乾いた空気に響かせながらテントに向かつて歩いていく。

健吾は ジールヴォン のIDパスワードを知らないし、セキュリティシステムに生体データを登録している訳でもない。つまりはコイの存在なくして機体のコックピットに搭乗する術をもたないのである。

故に彼は知る由もなかった。

待機モードによる省電機能を従順に継続するモニター群の暗がりで アビオニクスを掌握した ジールヴォン の人工知能が、集音機構と音声認識プログラムを起動し、ヘッドアップディスプレイに三節のある英文を表示させていた事実を。

No id : Flexibility Arms = NFA  
You are welcome .  
A competition !

「ねえ、そろそろ起きて健吾。七時間以上の睡眠は、将来的に脳細胞の死滅を早める結果になるわよ」

一日の始まりを告げる言葉にしては相当バイオレンスだが、寝起きは悪い方ではないらしい健吾は「ふまあ」とか言いながらミノムシ化した自らの身をよじり、目脂で力チカチの瞳をパチパチさせた。

「おおはあよお

「おはよう。外にペットボトルの水を用意してあるから、顔を洗つてきて」

「あい」

「あまり水を使い過ぎないで。飲む分には構わないけど

「うい」

「あと、私のジャケット触つたでしょ」

「うい えつ！」

さり気なく耳に飛び込んできた不意打ちの一言に目が冴えたのだ

うつ。健吾は裏返った声を上げて狼狽した。

「昨日私が記憶してると位置が少し変わってる」

「んつと、それはその、つう」

ジャケットに触れた理由を必死に搾り出そうとしているのか下唇を噛み締めながら唸る彼を、コイは少し慌てて制する。

「あ、いいの。別に責める訳じゃないの。そういう意味じゃないから。ただ」

「ただ？」

教師から叱られた小学生のよつたな表情で首をもたげて聞き返してくれる健吾に、優しく言葉を返す。

「ううん、やっぱ何でもないわ。気にしないで」

彼を無駄に不安がらせて自分は一体どうしようとか。「そういう周囲の些細な変化に気づけないと、これから先は生き残つていけないかもしない」コイは喉まで出掛けたこの言葉を飲み込んだ。

「ふう。サッパリした」

「ケン水使い過ぎ」

「何言つてんだよ、ちゃんと節約してただろ」

「あれのどこがつ。男つてほんつと雑、信じらんない」

食料庫に見立てた一画で缶詰めの小山を物色していたら、洗顔を終えた健吾と明美があーだこーだいつもの言い争いをしながらテンツの入り口をくぐつて来た。

「おかえり。昼食はもう食べる? 見ての通りうつうのしかないけど」

その台詞のどこかに激しい違和感を覚えたらしい健吾が一瞬怪訝な顔をするも、すぐに表情を戻して何気なく話しかけてくる。

「でもあれだよ。実は俺、昨日一度寝した筈なのにこんな早い時間に起きれるなんて驚いた」

「それ私も思った! 昨日はすつしに疲れたから今日は夕方くらいまで起きれないかと思つてたよ」

健吾に同意を示すように明美も興奮気味にそう言い添えた。

「どうやら土曜深夜アニメから日曜早朝アニメへのスムーズなシフトを日論んで編み出した秘技、『遅寝早起き』『一度寝シーケンス』が更なる高みへ昇華したようだな。ふふ、自分の才能が恐ろしい」

「何その日常生活に全力で必要ない秘技。別に表へ出さなくていいから。ずっと秘めていいから。てかただの不規則でしょそれ……。私の場合は、部活の朝練に励んだ賜物かなあ」

そんな一人のやり取りを、ユイは苦笑という意味とはまた少し違う、困っているような、笑っているような、大変に複雑な表情を揃えて眺めた。

「ん、何？」

俺の顔に何かついてるか的な二コアンスの口調で問い合わせてくる健吾に、

「今の時刻は一四時を回ったところ。お昼はもうとっくに過ぎてるの」

ユイは恭しげに言葉を発した。幼い子供の間違いを正し、真実を諭す優しい母親のように。

健吾と明美は、

「…………」

さつと押し黙る。そして何かを思い出したように一人仲良く回れ右をし、スタッフとテントを出て行った。

待つこと数十秒、

ドタバタと勢いでテントへ駆け戻つて来た健吾と明美は、外を指差しながら開口一番、声を揃えてこう叫ぶ。

「空がつ、空が青くない！」

【蒼穹世界】に渡つて初めての朝に自分も同じようなことをやつていた事實を華麗に棚に上げ、ユイはクスッと微笑んだ。

「そうね。青くないわ」

「本当にお昼過ぎてるの？ 今」

明美の咳きにそつと首肯すると一人の間を通り過ぎ、テントの入

り口前で立ち止まって小さく手招きをする。

「あなたたちに話さなければいけないことがたくさんあるの。この世界について、私が知っている事実をこれから話すわ。外で。できれば空の下で聞いて」

健吾と明美は確かめ合つかのように少しのあいだお互いを見つめ、それから再びコイへ視線を戻すと、ゆっくりと頷いた。

青はない。

淡い黄金が支配する黎明。

青はない。

地平線上を光塵が躍る東雲。

青はない。

大気の明暗が交わる誰彼時。

青はない。

世界を敢然と謳歌する曙光。

空は暁。コイと、健吾と、明美と、ジールヴェンを見下ろす雄大な黄金。

「【暁世界】へようこそ」

比喩や形容ではない。コイの言葉はこの世界を代弁する。

【暁世界】へ、ようこそ。

メファーナの胸を締め付ける黒い鎖は、強勒さを緩める気配など一切ない。苦しみから解放されるには一体どうすればいいのだろう。考えれば考えるほど、小さなケージに囲われた箱庭を右往左往するノイローゼのモルモットのように、この苦痛が出口のない心の檻なのだという事実に絶望した。

苦しい。

ここから抜け出したい。

このひと月で何十回、何百回と擦り重ねてきた後悔と哀しみが、悪夢の如き世界が夢ではない現実をメファーナに糾弾する。だから、望んでしまう。こんな世界を生きていいくらになら、いつそ朝など来なければいい と。

意識の端で音が蘇る。規則的で色気のない一拍子の電子音。徐々に間隔を詰め、やがてそれが耳障りな機械仕掛けの叫喚へ成り変わった時、蘇つたのは音ではなく意識の方なのだと気づく。

力を入れる。脳が起きているのに体が眠っている状態を「金縛り」とする説があるが、どうやら脳からの命令は無事に右腕へ伝わったようだ。伸ばす手の指先が枕許を探り、ひんやりとした機械の虫を捕らえるとその腹を搔いて五月蠅い鳴き声を黙らせた。

視界に光が溢れる。瞳が光量を調整し、ぼやけた視界を練成する。灰色の低い天井が圧迫感を煽るが、そんなものはとっくに慣れっこだ。腰を曲げて体を起こす。体が、重い。神経が完全な覚醒を遂げていないせいも無論ある。しかしメファーナにとつて、この「重さ」には拭いようのない苦しみが込められていた。

「朝が、来ちゃいました」

などと離<sup>はや</sup>し立ててはみるものの、これが例えは不治の病による余命幾許かの朝だとか、あるいは決して揺るぐことなき死刑執行日の朝だとか、はたまた神の予言に約束された世界終焉の朝だとか、そういう訳では特<sup>とく</sup>にない。

ここは一段ベッドの下段。上段の底である天井に頭をぶつけないよう気を払いながら寝台を降りる。寝起きでふらつくのが危なつかり足取りでベッドの向かえに佇む簡素なデスクまで辿り着くと、その上に置かれた薄い銀縁眼鏡を手に取つた。

メファーナの美しく澄んだ碧眼を、眼鏡のレンズが覆う。視界が更に洗練されて景色を本来あるべき姿に映し出す。先程まで視認出来なかつたデスクの上の、香水の小瓶に塗装されたラベルの配色や、アクセサリー ボックスに印字されたメーカー名や、ドックタグに降り積もつた細かい埃が、当たり前のよう<sup>に</sup>浮き彫りになつた。

さらに注意深く観察すると、この状況なら机上にあつて然るべきものがひとつ欠けている。眼鏡ケースだ。

メファーナはよくものを失す。

極度な天然という訳ではないにしろ、これを可愛い個性なのだと許せるほどメファーナも自分に甘くはない。

昨日は下ろしたばかりの靴下を片つぽ失し、一昨日は愛用していたシャープペンを失し、一週間前はお気に入りのリップクリームを失し、二週間前は三九ドルと二五三六円の入つた財布を失し、一ヶ月前は、大切な友人をひとり失した。

振り返る。一段ベッドの上段は、シーツも枕も毛布もなく、申し訳程度の薄皮を被つたスプリングが朝の冷気に晒されている。

苦い過去とは精神に穿たれた窪みだ。いけないと分かつていても、つい覗きこんで底の深さを確かめようとしてしまう。すると心ごと窪みへ引っ張り込まれ、そこから抜け出せなくなる。

体が、重い。

メファーナは生まれてからの一七年間、失したものをその手に取り戻したことが一度としてない。

氣怠い身をベッドに乗り出し、放られていた機械の虫 携帯端末を取り上げると田前に翳す。表示されているのは、6:08。

「やっぱり、朝ですよね」

幾ら確かめてみても、それは疑いようのない、一日の始まりだった。

桐島時雨きりしまじうれいは艦のキャプテンだ。彼の存在をひとことで表すなら、ずばり「変な人」である。いや、もはや縮めて「変人」でいい。

「おお。おはよう、メファー」

「おはよう」じわこますキャプテン

馬鹿と天才は紙一重、とはよく云つたもの。時雨は割り箸を如何に美しく割るかという儀式において、己の全身全靈を賭けているのだと豪語する。

よつて、ここ食堂に朝食を摂るべく集結した艦のクルー達が一斉にスプーンと皿底の演奏を弾き始める中、彼ひとりだけ割り箸を睨みつけたまま「ふぬぬはうあ」と意味の分からぬテンションで唸り声を上げているこの奇妙なシチュエーションに対して、メファーナはこれといって訝しむ様子を見せない。

ただ内心、彼の隣しか席が空いていなかつた事に対して嘆息はしているが。

パツチン。

「ひやつほーい！ 見てくれみんなつ」

興奮氣味に立ち上がった時雨が見事に割れた箸を頭よりも高く掲げ、初めて鉄棒の逆上がりに成功した少年のようなオーラを周囲に振りました。

「この美しい割り筋、まさにアートだと思わないかっ。そして迷いの感じられないこの肌触りつ。全てはライトとレフトのフォーエバーゲッバイが可能にする奇跡の神技！」

食堂に響いていた演奏が止まり、様々な視線が自分の隣に集まつてきた。

流れる沈黙。

メファーナには分かる。

オペレーター、菊岡愛子は視線でこう訴えている。

「いい加減にしてよ、ウザいんだけど」

兵器管理主任、富野隆は視線でこう訴えている。

「うわ、また始まつた。視線逸らさないと」

パイロット、倉木克典は視線でこう訴えている。

「あんた今年で三四だろ。少しは艦長らしくしり」

操舵手、前川志乃是視線でこう訴えている。

「この人、黙つてればいい男なのに……」

機関士、黒井慶太郎は視線でこう訴えている。

「いつぺん炉心に叩き込んだらかこいつ」

料理長、坂城稔は視線でこう訴えている。

「そんなことより食え、早く食え、料理が冷める」

……。

「あ、すまん。食事を続けてくれ」

咄嗟に空氣を読んだ時雨が、残念そうな表情を作つてこの沈黙を破つた。

スプーンと皿底の演奏が再開される中、彼はしょんぼり椅子に腰を下ろす。何ともシユールな情景である。落ち込む彼の姿を盗み見て少し氣の毒だな、と思った。

確かに時雨の割り箸熱はありがた迷惑　いや、はつきり言つて迷惑だ。しかし彼の底抜けた明るさには何故か憎みきれないものがある。

大切なものを失つたのは自分だけではない。戦争で疲弊した精神は肉体を蝕んでいき、やがて自分が自分で無くなってしまう。その先に待つているのは死だ。生と死が限りなく等しい領域に同居する戦場で、自我を維持し続けなければならぬという行為には、想像を絶する程の苦痛が伴う。一瞬でいい。その苦痛を一瞬だけでも忘れることが出来る「何か」がなければ、この世界では生きていけない。

い。

もしかすると時雨は、艦のキャプテンとして自分こそがこの「何か」を担わなければ、と考えているのではないだろうか。何と思想のあるリーダーなんだ、と先程とは別の意味でメファーナは嘆息する。

「メファー」

「は、はい……？」

気がついたら時雨と田が会っていた。浅黒く男勝りな彼の肌は、白い壁に囲まれたこの食堂では妙に浮いて見える。

じーっと視線を逸らさない。これは流石に緊張する。

刈り上げられた短髪が彫りの深い顔になかなか栄える時雨。そんな彼は周りに聞こえないようボリュームを絞った声で、

「この割筋、どう思つ?」近年でも稀に見る傑作だと自負してゐる

だが

握った割り箸を提示して訊ねてきた。顔にさあ褒めてくれと書いてある。どうしよう。お箸の割り筋の良し悪しなど検討もつかない。きっと深く考えたら負けなんだと思い、努めて明るい笑顔を讃えて

こつ言つた。

「良いんじやないでしょ? 綺麗に割れたんなら気持ちいいです

し

そうかそうか、分かってくれるか、やつぱりメファはいい子だなあ。だらしない笑みを浮かべながら割り箸でコーンスープを掬うと、いう猛者ぶりを發揮する時雨を眺め、メファーナはさつきの感心を静かに撤回した。

フランツ・リールズは艦に所属するパイロットのひとりだ。彼の存在をひとことで表すなら、すばり「クールガイ」である。リフレッシュルームへと続く廊下の途中で、涙を溜めて走り去る女性士官とすれ違う瞬間、メファーナはこの先にいる彼の存在を察知した。

「フランツ、おはよーいります。今日も朝ごはん食べないんですね？」

「おはよう。食べないよ、朝は」

朝食を抜くのは衛生上良くないことだと思つ。だが他人のライフサイクルに意見を挿めるほどの人徳は生憎と持ち合わせていない。それに好奇心はやっぱり違うところへ向かう。

フリードリンクのボタンを一一三選択し、落ちてきた紙コップに注がれるメロンソーダを透明のプレート越しに観察しながら隣に声を掛ける。

「さっきの女人……」

「ああ。そうだよ」

言い終える前に答えが返つてきた。何を訊かれるのか重々承知していたらしい。それならば、とメファーナは若干語調を強めてこう続ける。

「また断つたんですか？」

「当然。というか今そんな余裕ないし」

フランツは驚異的にモテる。時々もそれなりに男前の部類に入るのだが、ひとたびフランツが舞台に上がればそれなりなんて端役はすぐに霞んでいつてしまう。

流麗な眉と均整のとれた目、筋の通つた鼻立ち、形の絞まつた口許。それぞれのパーツが絶妙なバランスを成す美しい顔の造形に加え、身長も自分より一〇センチ以上高い。もし戦争が始まらずにハリウッド映画が現在も製作され続けていたとしたら、彼は一躍スター・ダムに登り詰めることが出来た逸材ではないかとメファーナは勝手に思い込んでいる。

メロンソーダを注ぎ終えた紙コップを受け取る。そのままフランツが寄りかかっている壁の、向かいに設えられたソファーに座った。背もたれがないのでちょっと不便だがメロンソーダがあれば気にならない。

上目遣いに正面を窺う。女性の心を惹き付ける、垂れ具合が特徴

的なライトグリーンの甘い瞳 メロンソーダの色に少し似てなく  
もないと思う が宙を仰ぎ、フランツは言い訳のようにこう呟く。  
「明日はもうこの世にいなかかもしれないのに、恋愛なんて何の意  
味があるの？」

それはきっと逆なんだと思います。

メロンソーダをちびちび喉に流し込みながら心の中で反論してみたものの、声には出さなかつた。眞偽のほどは定かでないが「フランツの恋人は戦争で死んだ」という話を人伝に聞いたことがある。眞実を知りたくないと言えば嘘になる。でも彼の胸に刻まれているかもしれない心の傷に塩を刷り込むような真似をしてまで、それを確かめるつもりはない。

フランツがアッシュブルンドの長髪を搔き上げた。そんな仕草を見てメファーナは、肩から下がる自分の髪の端にそつと触れてみる。金色をしたこの髪の毛は、クルーの大半を日系人が占めるこの艦ではやはり異質なのか。主觀だが人目を引いているような気配がある。逆にこうしてフランツと一緒にいる自分に何となく落ち着きを感じるのは、彼が同じ欧米の出身だという事実が理由のひとつだろう。ひとつ……。ならば他の理由は？ と訊かれたら、メファーナは迷うことなくこう答える。「彼は私の命を預けるに足る、極めて優秀な兵士だからです」と。

フランツとの関係について、若い女性のクルーたちが根掘り葉掘り自分に探りを入れてくることがよくある。ときには好奇心に満ちるキラキラした瞳で。ときには嫉妬心に満ちるギラギラした瞳で。彼女たちから見れば、今のように一緒にしているメファーナとフランツの姿は確かに仲のいい男女に映るのかもしれない。

だが誓つて言おう。少なくとも現時点において、フランツに対して恋愛感情とされる類のときめきを、自分の胸中に見つけることは出来ない。

フランツに対してかなり失礼なことを言つてはいるが、それは彼にとつてもきっと同じことだ。この瞬間だつて、自分が日課にしてい

る食後のメロンソーダと、彼が日課にしている朝のナルシズムタイムが、リフレッシュルームという場所でたまたま重なったに過ぎない。

## もうひとつ朝(2)

彼と自分との間に他人以上の絆があるとするならば、それはやはり友情だ。戦友といふ名の友情。

戦友。

ひと月前に失してしまった友人もまた、戦友だった。

ジャラジャラと音を立て、黒い鎖がメファーナの胸を締め付ける。思考が濁り視界の焦点を揺らす。体が、重い。

苦しい。

振り払いたい。

とにかく何かに焦点を合わせたくて手元の紙コップを覗く。沈んでいく心に反して炭酸が泡を吹いて昇つてくる。大好きな食後のメロンソーダが、敵に回ってしまったかのような錯覚に陥つて顔を歪めた。

「忘れるよ。あいつのことはさ」

頭に降ってきたフランツの言葉にハツとなつて顔を上げる。憤りを感じて今度こそ反論を返そうと口を開き、

「忘れるなんてそんな言い方つ

「あいつの意志だつたんだろ」

すぐに遮られた。

「どんなに引きずつたって、どうせ戻つてこないんだ」

彼の言つてることは正しいのだろう。頭では理解できても、心が事実の承諾を拒絶している。

「いい加減、楽になれメファア」

ライトグリーンの瞳が僅かに揺れていた。それが無愛想なフランツの、滅多に見せることのない含みなき「優しさ」や「気遣い」の具現であると、果たしてこの艦にいる何人の人間が気づけるだろうか。彼が厳しい現実を突き付けて自分を苦しめている訳ではないことをくらい分かつていて。反論を出し切れず、捌け口を失つた悲哀の

熱が喉元に渦巻く。

これ以上心配をかけてはいけない。悲哀の熱を、残つたメロンーダと一緒に飲み下した。

リブリーは艦に所属するチーフメカニックだ。彼の存在をひとことで表すなら、すばり「人間ではない」である。

この「人間ではない」とは、決して中傷を含んだ揶揄ではない。正にそれは彼の「人間離れした高い整備技能を暗喩するもの……」なのだが、それも飽くまで一重。

何しろリブリーは本当の意味で、正真正銘、「人間ではない」のである。

ペタペタというスリッパの音が近づいてくる。艦内の整備ハンガーに繋がる巨大なエレベーターの扉の前で、メファーナは音のする方へ振り向く。

「メファ嬢。おはようござんす」

愛用のスリッパを鳴らしながら隣に並んだリブリーが、頭部の複眼を明滅させるとコンピューター声帶らしからぬ流暢な合成音声でそう発した。

「おはようございます。リブリーチーフ」

アンドロイド と、いうにはそのシリエットはミニカル過ぎた。アンテナの延びた丸い頭が乗つかった立方体形の胴体、そこから長い手と短い足が生えている。腰部はないがもちろんそのことに突っ込みを入れてはいけない。

「昨晩はよく眠れましたか？」

「うむ。こう見えて小生、寝つきはいい方なのだ」

「う見えて？」 メファーナは傍らに立つ自分よりも背の低いリブリーを俯瞰する。

如何にも「ぼく口ボです」な体型と風貌から相応の無機質さを感じるのは、彼自慢のファッショングが外見印象に大きな影響を与えているからだろうか。

入力端子や外部端末が剥き出しになつた胴体を覆つてゐるのは、エキゾチックなウェーブ模様のアロハシャツ。胸ポケットには「丁寧にサングラスが引っかけられている。

表面に微細なセンサーが張り巡らされた長い腕、こちら側から見える右の手首にはピンクの糸で「WORLD WIDE LOVE」と刺繡された白いリストバンドが。

ペンギンかよ、な短い両脚の行き着く先にはスリッパ。そうスリッパだ。足の甲に張り付いた、漫画みたいなウサギの讃える笑顔が何とも二クらしい。

全く困った話だが、リブリーはロボットのくせしてロボット扱いされることに心穏やかではない。何も完璧な人間扱いをしろなどと贅沢は言つていらない。せめて一個の人格として、一個の生命として、自分をみてほしい。そう願つてやまないのだと彼は訴える。

艦に着任して間もない頃、そんなこととはつゆ知らないメファーは、これから世話になる彼に囁かな贈り物をとガソリン燃料を渡そうとして「こんなこつてりしたもん飲めるかっ！」とスリッパで頭をはたかれた。乾いた痛撃をさすりながら、あれは彼への侮辱だつたのか、稚拙な先入観に駆られ自分は何と愚かしい真似をしてしまつたんだろうと強い罪の意識に苛まれる。

しかしその日の夜。照明が落とされた人気のない整備デッキの片隅で、何かをするような音を立てる小さな背中を発見。心配になつて声をかけたところ、尋常ならざる拳動で振り返つたアロハシャツが「いやつ、コレはあの、小生は決して、つまりはそのつ、」とココナツソイルの入つた中瓶を抱えて裏声を上げる姿を見たときの衝撃は、今でも忘れられない。

回想に浸つていると、リブリーのアンテナが突然に伸び上がり、その半分から先がぐるんと回つてパラボラと化す。そしてピコピコ点滅する両目。たぶん整備デッキのメカニックたちあまり大きな声では言えないが、向こうは人間である と通信しているのだと思う。

こんな短距離でパラボラアンテナって……と突っ込みを入れたくて心の底がムズムズしてきたメファーナに再びリプリー、

「ところでメファ嬢はマシンの具合を見に来たのかいね？」

「えと、はい。そのつもりでしたが、ひょっとして今はお邪魔でしょうか？」

「うむむのむ。邪魔という訳ではないなコレが。しかしながらいま小生の忠実な部下達と交信を行つたところ、先程ちょうどインター フェース周りの最終チェックに入つたと報告を受けたのですたいコレが。

いや決して、お嬢が邪魔だなんてことは、ないないのないでござ 一すが……」

リブリー節は語調がトリックキー過ぎて時々ついていけなくなるものの、彼の言わんとしていることは何となく汲み取れた。

現在のところ仕上げの整備工程が進行中で、自分が近くに寄ると差し支えがあるということだろう。システムの微調整くらいなら手伝える自信は勿論ある。しかしコックピットの広さには限りがあり、作業効率と正確さを優先するならプロフェッショナルに任せた方がよいとの判断は自明の理。

リブリーは如何にメファーナの気分を害さずしてそれを伝えようかと頑張ってくれているのだ。下手をすると、この艦のどの男達よりも紳士な彼の態度に思わず表情が緩んでしまう。

初対面でスリッパをましておいて今さら紳士も何もない気もしないではないが、チーフはそれを補つて余りある大きな優しさをもつたいい「人」だなあとメファーナは感じた。

「そんなに気を使つてくれなくても大丈夫です。少し様子を見ようかなと思つたくらいで、重要なものではないですよ」

他にも用事がありますから、と言い繕つてその場を後にする。別に嘘ではなかつたが、「遠くから眺めるくらいなら全然オッケーなんだけれどおー？」とか申し訳なさそうな声を掛けてくるアロハシヤツが、到着したエレベーターの扉に隠れて見えなくなるまで何と

なく後ろ髪引かれる思いをしたのも確かだつた。

佐原智世さわら ちよは艦に所属する遺伝子学者兼物理学者兼医療責任者だ。彼女の存在をひとことで表すなら

メファーナは智世をひとことで表す事が出来なかつた。

「変な子ね。そんなところに突つ立つてないで中に入りなさいメフ

ア」

母親なのに。

「 はい」

瞳の色も。髪の色も。血筋も。胸に秘めた思いも。眼鏡を掛けているという共通点以外の何もかもが自分と違う智世を、メファーナは憧憬と畏敬の念を以て心から愛している。

智世の存在を「母」と淀みなく言い表せなかつたのは、彼女にその資質の有無を問つたからではない。自分にこそ彼女の娘と誇れるだけの資格があるだろうか、そう自身を疑つたのだ。

身を預けた椅子を回転させ、智世がこちらに向き直る。彼女は漆黒の瞳を瞑ると、左手で眼鏡を押し上げ、右手の親指と中指で両の目頭を軽く揉む。疲れているのだ。

先程まで体を向けていたデスクには、びっしりと文字が詰め込まれて余白の見えない論文が散乱していた。耳を澄ませば微かに聞こえる静謐せいひつな機械音。脇に設置されたパソコンの薄型ディスプレイは、メファーナの知識域を遥かに超えた極めて難解な数語式を綴つてゐる。

智世の役職は前述の通り、遺伝子学者兼、物理学者兼、医療責任者である。一見、二つの「学者」という肩書きは、「医療責任者」という本位に対する付属品のように思える。しかし眞実は全くの逆だ。「医療責任者」という肩書きこそ、本位である「学者」が艦内に居座ることの整合性を保つ建て前に過ぎない。

その証拠に、智世は医療チームの長であるにも関わらずちつとも白衣は着ないし、あらうとかこれっぽっちも医務室に顔を出さな

い。最近はこの自室に籠もつて、何かの研究や調査に躍起になつてゐる。

食堂にも来なかつたので朝食も「デスクの上をもう一度よく確認すると、論文の下敷きとなつた軽食用トレイの円い角つこが紙束の影からちらりと覗いている。

これほどまで私生活を犠牲にして研究に没頭する彼女の姿は、本当に格好いいと思つ。まさに「学者」の鑑だ。

だが当然のことながら、既に実戦配備のなされた戦闘艇に「学者」が乗艦しているという事実はとても奇妙なもの。けれど自分は知つていた。彼女がここにいる本当の理由を。

智世は、メファーナがひと月前に失してしまつた大切な友人「あの子」の為にこの艦に乗つている。

よく知つている。「あの子」はとても特別な女の子で、メファーナが出来ないことを何だつてやつてみせた。自分より一歳年下なのにすこく強くて頼り甲斐があつて、今でも智世と同じくらい憧れている。

そんな「あの子」に対し、智世は「医療責任者」ではなく「学者」という本位を駆使して熱心に接していた。娘としての自信が持てないが故に、自分よりも多くの時間を智世と共有していたはずの「あの子」に嫉妬の感情を抱いたことはない。

ただ気になることはあつた。「学者」という立場とはいえ、あれほど気にかけていた「あの子」がいなくなつてしまつたというのに、目立つた動搖もないまま平然と過ぐしていふひと月前からの智世。メファーナは大きな戸惑いを覚える。

智世は「あの子」のことを本当はどう思つていたのだろう。そして私の事はどう思つているのだろう。娘として、見てくれているだろうか。衝動的な感情が突き上げてくる。

母さん。どうしてお気に入りの優秀な「あの子」じゃなくて、戦災孤児で駄目な私なんかを養女にしたんですか？

唇が微かに震えていた。答えを訊くのが恐い。メファーナの苦渋

を違う意味に捉えたのか、智世は小さくかぶりを振り、「やれやれ」と呆れ顔を作つてこう問いかけてくる。

「また何か失したのかしら？」

その言葉が胸を打つ。これで恐い思いをしなくて済んだという安心と、真実を知る機会をまた逃してしまったという焦燥が、心中を蠢いて迷走する。でもこのまま黙つているのだけは駄目だ、何か言葉を返さなくては。

「……め、眼鏡ケースを、失してしまったんです」

辛うじて発した言葉が、何とか会話に矛盾を発生させることのないものだつた幸運に胸を撫で下ろす。もはやこの瞬間に真実を知る機会がないのなら、余計な不安を気取られるのは嫌だつた。それにこづして彼女の部屋を訪れた理由は、まさしく眼鏡ケースに他ならない。ようやくそのことを思い出して気持ちを落ち着かせる と同時に、失しものをしてやつぱり迷惑をかけているじゃないですかどうしよう、とビビり直す。

そんな感じでひとしきりあわあわしていたら、智世がデスクの引き出しからスペアの眼鏡ケースを掴み取つて立ち上がつた。手を伸ばしてそれをメファーへ差し出す。

「はいこれ。今度は失さないよ」

慌てて歩み寄って、両手で包み込むように眼鏡ケースを受け取る。それから上目遣いに智世の表情を窺つてみた。すると自由になつた彼女の手の平が顔面に迫つてきて。

えつ、と頬を朱に染めるも、それは肌に触れることなくメファーナの掛けている眼鏡に辿り着く。指先がスッとフレームを伝う。「いい？ 今回はケースだけで済んだけど、本体はくれぐれも失さないように気をつけて。あなたの眼鏡は、特別なんだから。すぐにスペアは効かない大切なものよ

「じめんなさい。気をつけます」

安心して母さん。眼鏡はもう、大丈夫です。貴女が大切だとそうはつきり声に出したものを、私は決して失さないから。

「少しシャワーを浴びてくるわ。この部屋の片付けをお願い出来るかしら」

「任せて下さい」

思わず笑みがこぼれた。智世からお願いをされると胸が躍る。嬉しさに溺れそうになる心を引き締め、言葉を付け加える。

「じゅつくりじゅそです」

「じゅつくり、ね。そう出来るといいけど」

智世が皮肉の籠つた口調で言った。彼女は紛れもない非戦闘員だが、いつスクランブルが掛かるか予測出来ないこの艦の現状をよく理解していた。さすがにこればかりはメファーーナにもフォロー出来ない。

「そんな悄げた顔しないの。あなたを責めている訳ではないのよメ  
ファ」

智世はそう言い添えながら隣を横切つて部屋の扉へ向かう。外側にカールして跳ねる彼女の栗毛の髪が、メファーーナの耳朶を掠めた。左からスライドしてきた扉が、部屋の出入り口を静かに閉ざす。パ

ソコンの微かな機械音だけが後に残された。

寂しい。

だが仕事を仰せつかつたばかりである。ぼさつと突つ立つていてる訳にはいかない。ズボンのポケットをほじくり回して、中から小さな赤いリボンを取り出す。

自分の金髪を大雑把にかきあげて指で適当に解いた後、髪の右側へ纏めて赤いリボンで結わく。これが本来のヘアースタイルである。一度だけ智世を真似てドライヤーでカールをつけようとして、髪質が合わないのかどうらいことになつた。

「ふう」

見渡す部屋は、そのときの髪型みたいにどえらいことになつている。足の踏み場を犠牲にして敷き詰められた資料やメディア。積み重ねられたファイルの束がベッドにまで及んでいた。今からこれらを綺麗に整理しなくてはいけない。智世がシャワーを浴び終えて戻つてくるまで。

でもその前にやつておかなければならぬ儀式がある。

今度はズボンのお尻のポケットに手を入れ、中から小さなメモ帳を取り出す。月に一度、物資の補給と共に艦にやつてくる行商人から、日本円の一〇〇円で購入したもので、安っぽい再生紙を纏めただけの簡素な品だ。

ページをひとつひとつ、丁寧にめくつていいく。

そこには、デスク上に散乱している智世の論文に負けないくらいびつしりと、辛うじて読める下手くそな日本語で書き込まれた、数万字にも及ぶ单語の海があつた。

「ちょっと借りますね」

小声で咳き、デスクに転がっていたボールペンを遠慮がちに拝借。そして单語の海が浮かぶメモ帳の、僅かに残されたページに、メフアナは辛うじて読める下手くそな日本語で新たにこう書き加える。

私の眼鏡。

智世は何故、よくものを失してしまうメフアナに、大切な研究

資材やデータが保管されているはずのこの部屋を任せていられるのか  
それは、メファーナが智世の大切なものを今までに一度として失したことがないからだ。逆に智世が見失っていたものの在処を一瞬で言い当てたこともある。

誇れるとまではいかないが、これが自分の唯一の自慢だった。智世が「大切」だと口にしたり、あるいはそう考えているとメファーナが判断したものの名前を、全て紙に書きとめておくという、律儀で気の遠くなるようなメモ帳。

そして自分以外にこのメモ帳の存在を知る者は、“もう”どこにもいない。ただ一人だけメモのことを知っていた「あの子」は、笑つてよくこう言った。

「それは魔法のメモ帳ね。メファの持ち物だつて、そこに書いておけば失さなくなるかもしれないよ」

技得たりと喜んで試してみたけれど駄目だった。自分のものはどうしたつて失してしまう。不思議だがこのメモは、智世のものでなければ魔法の効果を發揮することは出来ないのだ。ならば智世が大切にしていた「あの子」の名前を、この魔法のメモ帳に書けば失してしまうことはなかつたのだろうか。

ジャラジャラと音を立て、黒い鎖がメファーナの胸を締め付ける。体が、重い。振り払いたいのに叶わない。

苦しくなる胸が、思い至りたくなどなかつた負の予感を絞り出す。ずっと「あの子」の為に艦に乗つていた智世は、「あの子」がいなくなつた今、そのうちメファーナを置いてこの場所から去つて行つてしまふかもしれない……。

黒い鎖の輪がさらに太く、強勒になつて締め上げてくる。  
また大切な人を失してしまつ。

腹の底が凍り付くような冷たい恐怖に自意識を侵され、ほとんど朦朧とした状態のまま、小刻みに震える利き手で魔法のメモ帳に智世の名前を書き込もうとした刹那 携帯端末のアラームとは比較にならないほど遙かに耳障りな艦内の緊急戦備警報が、両の鼓膜を

激しく振るわせた。

ハツと我に返つてボールペンをデスクに放り戻し、魔法のメモ帳をお尻のポケットにねじ込む。

慌ててシャワーのスイッチを切りながら舌打ちを鳴らす智世の姿が脳裏を過ぎる。どうか母が風邪を引きませんようにと祈りつつ、メファーナは部屋を飛び出した。

戦争による技術革新。

ミサイル兵器の技術が、宇宙ロケットに搭載する推進機構へ転用された。核兵器の技術が、都市発電プログラムの中枢に組み込まれた。バイオ兵器の技術が、医療システムの次代を担つた。革新は止まらない。

#### 【ブレン変移炉】

ナノテクノロジーの究極的な進化が到達した素粒子操作は、全く新しい動力資源をこの世に産み落とす。これによつて人類の文明レベルは想像を遙かに超えた速度で成長し、世界は栄華の絶頂を垣間見る。

しかし【ブレン変移炉】は地球という星の本来あるべき姿に暗い影を落とす諸刃の剣であった。無尽蔵の莫大なエネルギーと引き換えに、空間の物理構造に深刻な特異現象を齎<sup>もたら</sup>した。

惑星の保全と秩序の保管を旗に掲げた諸国連合は、これに強い警告を打ち鳴らす。動力炉と研究データの無条件放棄を余儀なくされた各国幾多に渡る技術開発局。その渦中、最大規模の【ブレン変移炉】を有する無国籍コングロマリットが武装蜂起を以てこれに相対した。

技術革新による戦争の始まりである。

【ブレン変移炉】の生み出す膨大な資源と豊潤な財力を糧に増殖を繰り返す無国籍コングロマリットは、やがて情勢の優位に君臨し、戦略組織 イーグリッド を私設 諸国連合が誇つていた軍事力を凌駕する。彼らの戦闘動機が「【ブレン変移炉】の永続」から「全世界に対する弾圧的支配」へと成り替わるのは、もはや時間の問

題であった。

イーグリッドは支配領域を滔々（とうとう）と押し広げ、その戦力と規模を拡大させていく。諸国連合はこれに対抗するべく国家間の軍備強化と軍事統合を主眼とした世界解放軍を編成。地球上の平和は無惨にも形骸化し、イーグリッドと世界解放軍の激しい戦闘は人類全体を巻き込んで泥沼状態へ突入する。

いつ果てるとも知れない戦争が続く。イーグリッドの弾圧に喘ぎ苦しむ人々が、囁かな安らぎを求めて天を仰いだ時空の色が変わっていた。

高感度レーダーの走査範囲にNFA九機を補足。FCS解放。バイザーディスプレイの形成する光学映像が、数百メートル彼方で戦場と化した超高層ビル群。時間の流れに取り残されて咽び哭く廃都の姿を幽玄と浮かび上がらせた。

有視界戦闘領域まで三〇。

暁の空の下。灰燼（かれん）を纏つた幾棟もの建造物が、その長躯を傾け荒涼と生えている。建造物同士の狭間で、白い閃光と橙色の火炎が踊り狂つた。友軍と敵軍の激しい交戦状態。渴いた何かが鋭く頬を撫で、呼吸のリズムを離し立てる。

有視界戦闘領域まで一〇。

疾（は）る震動。轟く砲声。心臓の音が速まる。恐怖ではあるが、そこに自意識を侵すほどの力はない。胸の奥で戦意が狼煙を上げた。手をかけたサイドの操作グリップを力強く握り締める。火の灯つた全神経を機械仕掛けの手足へ拡大させるイメージ。前方へ加速する機体は自身の一部だ。

有視界戦闘領域まで一〇。

次に求められるのは感情のコントロール。強くて美しかった「あの子」がいつもこう言っていた。戦いで生き残る為には、生きようとする強い願望と、己の手足となる愛機を最後まで信じ抜く強い意志が必要なのだと。

有視界戦闘領域に到達。

ステルス解除、出力上昇。兵装システムフルドライブ。バイザーディスプレイ 母が大切だと言つてくれた眼鏡、機体のメインカメラとリンクするそのレンズが、第一撃破目標に設定した敵軍NFAの姿を鮮明に映し出していた。

「これより戦闘行動に移ります」

“長大な剣を携えた赤い騎士”

それが、NFA ソルダーニヤ の意匠を直感的に表現した言葉だ。しかし本機の光学映像を視界に捉えた敵パイロットが、脳裏にその言葉を再生することは恐らく叶わなかつただろう。何故ならば、搭乗機の胸部がこの刹那に下半身へと永遠の別れを告げていたからである。コックピットを横薙ぎに両断。メファーナの駆る ソルダーニヤ が放つた初撃は、敵軍NFA ミシア を一刀の下に屠り去つた。

直前まで五機小隊を組んでいた残存四機の ミシア が、僚機の損失により乱れかけた陣形を再編、射撃体制を取りライフルを撃ち込んでくる。回避運動を入力。ソルダーニヤ の驚くほど静肅で、引き締まるように精錬な駆動制御。それは、ライフル弾の回避と同時に、第二撃破目標と設定した敵機の死線へ重なる軌道。長刀を振り上げ、太刀筋を成す。ミシア の左肩部から入つた斜め一文字の鋭い剣閃が、右腰部へ終着して敵機体を抜けていく。バックブースト、目前で発生する爆発から逃れる。

マニピュレーターを覆い、ソルダーニヤ の右腕部とほぼ一体化した兵装ユニット デュランダル。単分子レベルの特殊構造で形成されたその刀身は、鋼の機人というべきNFAの装甲を桁外れの摩擦係数によつて切断し、ミクロ単位へいざなう。だが デュランダル は強力な斬撃兵器として完成をみた代償に、機体バランサーに過度な負担を課している。

NFAの兵装として類を見ない長刀、バランサーの負担を解消し滑らかな戦闘機動を可能にしたのは、究極の次世代型アクチュエー

ター。中世ヨーロッパの鎧甲を想起させるフォルムが屈強なシルエットを描く ソルダーニヤ の外部装甲、その直下に存在するフレームは、強靭な纖維を束ねた 人工筋 マッスルバッケージ を纏ついていた。

「ごめんなさい、あなたも斬ります」

伝わるはずのない死の宣告を呴き、グリップを押し込む。己の手足となつた愛機が、流れるような動作で デュランダル を自在に手繰り、刃の反射光を鋭く踊らせる。戦場にあつて芸術的とさえいえる剣劇。第三撃破目標の頭部を斬り飛ばし、返す刀でその胴体を両断する。

残存一機を攻略するべくターンブースト。バイザーディスプレイに映る敵機が波状に散開していく。彼らとて莫迦ぱかではない。デュランダル の斬刀速度を看破、且つ間合いを見極めたのだろう。ライフル弾が矢の如く襲い来る。

「くつ……」

フットペダルを踏み替えながら ソルダーニヤ に旋回機動を。だが一方向から飛来する敵機の弾道は極めて正確だった。デュランダル のユーツト後部は、籠手を模した補助装甲で構成されている。これを機体前面へ駆かざすことで弾丸の直撃を防ぎきる。

巻き返す！

ウェポンプラットホーム展開、腰部のハードポイントにジョインしていった射撃兵器を左マニピュレーターへ携行させる。短銃身に反した太く武骨なバレル構造は、上段にビームガン、下段にソリッドバルカンの二重火器ダブルファイア を内蔵するハンドカノン。照準、グリップのトリガーを引く。一条を描く薄紅色のビーム光が、正面のミシア腹部に穴を穿つ。反撃の機会を与えず追撃、二発三発と動力部に熱量を撃ち込む。圧縮率を高められた粒子の塊は、小口径弾にあるまじき貫通力と誘爆性を備えていた。為す術なく爆炎と化す第四撃破目標。

最後の一機に銃口を向ける。ビームガンの出力供給はマニピュレーターを介したジェネレータードライブだ。消費電力を軽減する為、

ハンドカノンの射撃モードをビームガンからソリッドバルカンへ。照準を合わせて再びトリガー。周囲に空薬莢をばらまきながら吐き出される目視不能の破線は、ミシアの右腕部をライフルごと蜂の巣にした。射撃手段を奪われた敵機が、左マニピュレーターで背部に携えた高振動ブレードを引き抜く動作に入る。

「駄目です、それは抜かせない！」

スラスター全開。敵が抜刀を終える直前に距離を詰め、デュランダルの尖剣でコックピットを刺突する。頭部カメラの光を失い、沈黙して沈む第五撃破目標。搭乗パイロットの生命反応を絶たれた敵機のCPJが、相打ちを狙つて自爆装置を作動させる場合がある。刀身を引き抜き即座に後退……一〇秒経過、爆発の兆候はみられない。

一呼吸おいたあと、周囲を警戒してレーダーを確認。残されたNFAの反応は四つ。いずれも友軍信号を発していた。回線が開いて通信が入る。

『全滅するところだつた。助かつたよ』

通信機から漏れる嘆がれた壮年兵士の声に、メファーナは心から安堵を吐いて言葉を返した。

「ご無事で何よりです」

『はは。この状況を無事と言えるかは實に疑わしいが』

ソルダーニヤを囲う廃墟のビル群。これらの構造物を盾に利用しながら敵軍と交戦していたのだろう、建造物の影から中破した四機のNFAが姿を現す。

NFAベオル。白と深緑を基調にしたカラーリングと、天を衝く一本の頭部アンテナが特徴的な機体である。鋭角の多い猛禽類に似た外観をもつが、フレームへ弾痕を刻まれ、片腕を吹き飛ばされ、あらゆる箇所の装甲版を抉られたその姿に、本来の勇ましさは見る影もない。

『見ての通り、酷い有様さ』

量産機としては破格の基本性能と機動力を有するベオルも、

生産性と拡張性で大きくこちらを勝る敵軍のミシアに苦しい戦況を強いられていた。既に兵士たちの体力は限界に達しているのだ。憔悴で掠れた彼の声からそれが容易に窺える。

『五時と九時の方角から後続の敵部隊が迫っている。俺たちの母艦は戦闘エリアを射程圏に収めるべく現在こちらへ向かつて移動中だが、正直充分な戦力とは言い難い……』

『了解しました。引き続きあなた方を援護します』

『君の所属を聞いても?』

これだけは誇れる。頼もしい仲間や、愛して止まない母が共にある“家族”。それはメファーナにとって命にも等しい大切な場所。名乗ることに後悔などあらうものか。胸を張つて口を開く。

『解放軍独立部隊。戦闘艦 クインハルト、NFA小隊所属、佐原少尉です』

自分でも驚くほどよく通る声が、コックピットの空気を震わせる。口下手な自分にしては素晴らしい発音だった。躊躇ずに言い切れた事に鳥肌が立つ。思わず顔を綻ばせながら感動に身を震わせていると

『あ、割り箸王子んとコの艦か!』

「つ!」

さつそく名乗ったことを後悔した。

『隊長! それなら自分も聞いたことがあります。何でも芸術的な美しさでお箸を割るんだとか』

『いやいや。俺が聞いたのはナイフもフォークも使わずに割り箸だけで数キログラムのステーキを何の苦もなく平らげてしまうって話だ』

『違うんだなあ。割り箸で出来立てのピザを口元に運ぶんだ。これに決まってる』

『まさか。きっと割り箸でカレーのルーを自在にすすぐるんだよ』

『僕の意見を述べさせて頂けるなら、ここはやっぱり割り箸でケーキを八等分でしじう』

メフアナに置いてけぼりを喰らわせ、先程の疲労感など嘘のように活き活きと盛り上がる ベオル のパイロットたち。しかも割り箸のこと全部当たつてるから余計に腹が立つてきた。クイン ハルト の素晴らしさならもつと他に語るべきところがたくさんあるのに。この人たち、どうしてもの凄い勢いでそこにだけ食いつくの？ 話を広げたがるの？

『時間がない。討論は止めた。目の前に生き証人がいるから尋ねてみようじゃないか、割り箸王子の真実とやらを。どうなんだねお嬢さん？』

そんな真実、正直どうでもいいです。

「状況は？」

発声は短く、しかしそれでいて充分に鷹揚の効いた割り箸王子の声が場を奔った。即座に返されるオペレーターの言葉。

「友軍のカルナス級三隻を確認。既に砲撃態勢に移行しています」  
割り箸王子こと桐島時雨は、純然な戦意を宿した双眸で前方の大型ディスプレイを見据えてこう切り返す。

「戦果を上げる。総員覚悟はいいか」

力強い首肯が時雨のもとに集つ。C I C 通信パネルに両の指を走らせる女性オペレーター菊岡愛子は、友軍艦から受信した電文を滑舌のいい声で素早く読み上げる。

「カルナス級より入電。『我々は防衛作戦を続行。貴艦の援護に感謝する』です」

光芒が縦横に駆け巡り、黒煙が天空を昇る。メインスクリーンが流す粗い望遠映像は、本作戦で最も激しい戦闘が予測される前線を捉えたものだ。

「戦列に入つたら、こちらも攻撃を開始する。援護射撃だからつて遠慮しなくていいぞ。敵の土手つ腹に風穴空けるつもりでぶつ放せ！」

緩急ある発声で紡がれた司令。搖るぎなき自信に溢れる彼独特的の痛快な語脈が、戦闘ブリッジを高揚感で満たす。狙撃手は好戦的な笑みさえ浮かべ、「了解……！」と霸氣のこもつた威勢で応えた。

ブリッジクルーが身を預ける樹脂製のリニアシートは、三次元空間を最大限に謳歌する球陣形によつて配置され、機能美と様式美を兼ね備えたハイセンスな設計思想を具現する。前方へ倒れた卵型を描く戦闘ブリッジの内郭壁は、その全面を光学モニターへ転換し、戦場となる亡国旧市街の荒れ果てた情景を周囲三六〇度に渡つて映

写していた。

廃ビルのひび割れた窓ガラスたちが、巨大な推進器の巻き起こす駆動風に煽られて低い悲鳴を上げる。骸の街を眼下に捉えて身を進めていく白亜の巨艦 有機的な流線型を成した船体が上空を微速前進するその姿は、さながら海棲哺乳類が曉の射す海を遊泳しているかのようだ。決定的な違いを挙げるならば、これが万物を焼き払う灼熱の炎を身の内に宿していることだろう。船殻表面に浮かび上がった無数の継ぎ目が、各部で展開反転。前面側面に計一五門の荷電粒子ビーム砲口、上面に計一〇基の多弾頭ミサイル発射管を露頭する。戦闘艦艇 クインハルト、その砲撃形態であった。

前方で間断なき艦砲射撃を続ける一隻の友軍艦は、揚陸戦艦としては珍しいシャトルタイプのシャープな艦影をもつカルナス級だ。高度を下げながら一隻の間を縫うように戦列へ入った クインハルトは、目標エリアへ向けて展開した粒子ビーム砲口から幾筋もの火線を一斉放砲、さらに上空へ向けて展開した発射管から戦術ミサイルを立て続けに垂直発射する。体内から吐き出された灼熱の炎は、遙か数キロの彼方で混沌を謳う最前線へと吸い込まれて爆ぜ、狂乱する死の宴を鮮やかな閃光で彩った。

戦闘ブリッジが砲撃の振動で僅かに揺れる。前方右寄りの中型サブディスプレイには作戦エリアの概算的な地形マップが表示されており、クインハルト の火砲を受けて変形した地形をCG補正を交えながら最適化していく。狙撃手の目前に展開する火器管制モニターが、橢円形の赤いマーカーで着弾ポイントを知らせた。それら戦闘データが艦長席の統制ディスプレイへ送られ、確認した時雨は力強く頷いて口を開く。

「味方は巻き込んではないな。俺たちは攻勢に徹する。フィールド出力は可能な限り抑え、エネルギーを火砲へ注ぎ込め」

そこで地形マップをもう一度流し見て、唸るように呟く。

「しつかしこう入り組んでぢや、これ以上侵攻するのは厳しいな。やっぱり後衛を出すまで時間が

」

時雨の咳きは、オペレーター席から通信モニターの情報を読み上げる愛子の声にかき消される。

「ソルダーニヤが敵NFA部隊第一波と接触、再び交戦状態に入りました。」のまま前線へ侵攻します。

オペレーターとしての役割はその報告を済ませるだけのこと足りるはずだった。しかしシードごと体を回転させ、艦長席へ振り返った愛子は、表情を不安で陰らせて何か訴えるような瞳を時雨に向けていた。

「キヤブテン、本当に良かつたんですか？ 前衛をメファたちだけに任せて」

心配性が見て取れる彼女の指摘に、時雨は右手を振る大袈裟なジエスチャーを交えつつ明るい声で応える。

「それについては大丈夫だつて。あの子は何かと卑下に走る癖があるけど、パイロットとしての技術は申し分ない。てかそうでないと、あんなピーキーな機体をあそこまで操れるかよ」

「それは、そうですけど……」

理解はできるが納得がいかない、という感じに苦笑して口元を愛子。

「それにさあ。そろそろあの二機の新しい実戦データを送らないと、開発局でふんぞり返ってるヘンタイ夫婦がまたぶーぶー文句言つてくるし」

少し戯けたその台詞に何事かを得心したのか、愛子は「ああ」と軽く肩を竦ませる。時雨は少年のよつよつ純朴な瞳をキラキラと輝かせてこいつ言った。

「それともあれか。もしかして愛子君が俺の代わりにヘンタイ夫婦のぶーぶー、引き受けてくれるのかい？」

すると愛子は時雨から露骨に視線を外し、わざとらしく口笛を吹いた後、ゆっくりと前方の通信モニターへ向き直つてインカムの位置を正し、「あ、仕事仕事」と何事もなかつたよつて電子キーボーデを叩き始めるのだった。

「艦長、この艦にはイジメがあります」

そう湿つた声を漏らした時雨が唇を尖らせ、タツチパネルの外枠を人差し指でツツーと女々しくなぞつていく。艦長はお前だ！ クルーの誰もが心中でそう叫んだのは言つまでもない。

生と死の境界線が酷く曖昧になつた異空間。機人の慟哭が灰の街を蹂躪し、銃火が哮る死の宴は第一幕の開演を告げた。

ソルダーニヤの左肩部から放された対空ミサイルが、リンドワアの腰部を嘗める。飛行力を削がれて乱回転したリンドワアは、携行ライフルの流れ弾を撒きながら廃ビルへ激突、緋の華を咲かせて散つた。

叫び続けるアラート。

眼前に迫る機影。両肩部エクステンションに補助バー二ニア、バッケパックに追加ブースターを装備したミシア 高機動タイプ。直撃コースで放つたビームガンが横跳びに回避されてしまう。

「躲かれた。でもつ」

右コンソールを叩いて左グリップを引き戻す。ソルダーニヤ脚部のスラスターべーンが光力を焚き、至近距離で撃ち込まれたミシアのショットガンを斜線機動で緊急回避する。三発が第一装甲版を掠めたが戦闘行動に支障なし。

「退かない、攻める」

右フットペダルを踏み込んで右グリップを押し込む。ブースター全開、驚異的な即応性でミシア 高機動型の死角へ飛び込み、敵機体をデュランダルの逆袈裟で斬り裂いた。

「Jの距離なら、ソルダーニヤはどんなNFAにだつて負けない……！」

最前線へ到達。

単機で二十数機のミシアとリンドワアを相手取りながら尚衰えないメファーナの戦意と決断力は、愛機に対する絶対的な信頼が勝ち得たものであった。

叫び続けるアラート。

右コントロールを叩いて左フットペダルを踏み込む。バックブースト、一瞬先まで ソルダー二ヤ の立っていた場所を対地ミサイルが灼き払う。両グリップを最大に引き戻して左フットペダルを最奥まで踏み込む。大腿部に内蔵する人工筋をしなやかに伸縮させ、背部と脚部の全推力を地面へ向かって噴射、 ソルダー二ヤ は天高く跳躍する。

中空からの的確な対地ミサイルを撃ち込んできた リンドエア は、しかし回避運動に鈍りが見える。飛行能力のない ソルダー二ヤ の機動領域を過小評価していたのだろう。そして耐久性を犠牲にした リンドエア の装甲に、上昇加速の運動エネルギーを得た デュランダル の一刀を防ぐ術はない。猛烈な斬り上げが リンドエア の機体を裂き貫いていく。蝙蝠の嬌声にも似た永く甲高い音が戦場を木霊し、 リンドエア は摩擦熱の火の粉を上方へ散らせて真つ二つに切断される。 NFA という兵器を成していた二つの金属塊は、中空を落下していき地面に達することなく爆発。閃光が建造物の狭間を奔った。

叫び続けるアラート。

敵機のロックオン警告が重なり、バイザーデイスプレイに弾き出された予測弾道は ソルダー二ヤ のポインターと重なっている。殆どの出力をメインバー二ニアへ供給している為、サブスラスターによる回避運動はまず間に合わない。このまま上昇を続けても敵の命中補正から脱することは不可能だ。

瞬時に戦況分析を終えたメファーナは FCS の機能を切り替え、オプション兵装をアクティブになると迷わず左グリップのトリガーを引いた。廃ビルの壁面に向かって、 ソルダー二ヤ が左マニピュレーター甲部よりワイヤーアンカーを射出する。アンカーがコンクリートに深く突き刺さり固定されると同時にワイヤーを収斂。これには人工筋と全く同じ材質の纖維が織り込まれており、機体重量を牽引するに足る強靭な伸縮性と耐久度をもつ。バー二ニアの推力を

抑えつつ、ワイヤー・アンカーで強引に生み出した慣性を利用して敵機の射線軸から離脱する。

傍らの空間を、黄金色の粒子束から成る熱線が一瞬にして翔抜けしていく。防眩フィルター稼働、ビームが横切ったことで急上昇したコックピット内の光量を即座に抑制。視界が復元したとき、ソルダーニヤの戦術AIは熱線の発射位置を正確に算出していた。バイザーディスプレイへ投影される敵機のポインターと拡大映像背部に補助コンデンサーを装備し、両腕で大型のビームキャノンを抱え込んだミシア砲撃戦タイプ。砲身の冷却が完了次第、こちらの動体数値を補正に加えた第一射を撃ち込んでくるであろう事実に疑いの余地はない。

叫び続けるアラート。

新たに リンドエアが一機、上空から迫る。一方がアサルトライフルを、更にもう一方がマイクロミサイルを照準している。ソルダーニヤは、牽引し逐<sup>お</sup>えたワイヤーの先を甲部から切り離し、アンカーの終着点となつた壁面を蹴つて一度目の跳躍。反動を活かしたまま、回復したエネルギーを推力へ転換して再びバニアを点火させた。

「空が飛べないからって」

発射された敵機のマイクロミサイルは計四発。メファーナはFCSを切り替えて ソルダーニヤの左肩部から迎撃ミサイルを放ちながら、アサルトライフルを構えた リンドエアへ機体を突進させる。

「馬鹿にしないで！」

ソリッドバルカンでアサルトライフルを撃ち抜き、誘爆を恐れた敵機がそれを投棄する瞬間に デュランダルをその肩口に突き立てた。

リンドエアの浮力に自らの推力を押し込め、ソルダーニヤは空中を邁進する。迎撃ミサイルを抜けてきた一発のマイクロミサイルが真上を通過し、虚空を彷徨つたあとに爆発した。その閃光を

背に、揉み合つた状態で乱雑な軌道をとる両機体。この状態ならば下からビームキャノンを構える ミシア と、上空からマイクロミサイルをロックオンしたもう一機の リンドエア は、味方機への誤射を危惧して下手にトリガーを引くことは出来まい。

メファーナが「あの子」から教わった戦術のひとつだつた。

バイザーデイスプレイの端に表示された簡易マップ。愛機と目前の リンドエア がポインターを重ね、ミシア 砲撃戦タイプのそれへと肉迫する。射撃に特化した装備といえど、入り組んだ地形の中で機動力に優れた ソルダーニヤ を正確に狙撃するには、射線がクリアになる最適距離まで機体を接近させなければならない。ゆえに、NFA一機分の機体重量に耐え切れず急降下を開始した リンドエア と ソルダーニヤ は、僅か十数秒で ミシア 砲撃戦タイプを有視界戦闘可能領域へ収めた。

メファーナは左グリップを押し込んでトリガーを引き、ビームガンを眼下の敵機へ撃ち放つ。数発の熱粒子が大地を焦がす。退路を断つ牽制射撃。重装備に機動性を殺されている ミシア 砲撃戦タイプは、大きな回避行動を取れずその場に金縛りとなつた。相対距離とタイミングを見計り、コンソールを叩いてフットペダルを踏み込む。応えた ソルダーニヤ が機体を前方に傾けて推力を増す。

## 最前線（3）

続けざま右グリップを押し込んだ。 リンドエア の肩口に突き立てた デュランダル を力業で斬り下ろしながら ミシア 砲撃戦タイプの頭上へ落下、敵機同士を衝突させる。急激な落下加速の太刀と衝突のダメージを受けた リンドエア の機体は、フレームを完膚なきに破壊されてバラバラに砕け散つた。 デュランダル の太刀筋は勢いを保つたままどどまることなく ミシア 砲撃戦タイプの胸部に達し、無慈悲な長刀がコツクピットを裂いていく。敵機を斬り伏せると同時に ソルダーニヤ は着地を終える。シヨツクアブソーバー稼働。落下と着地の衝撃を緩和するコツクピット外郭壁のセミフローディング構造が、静かにメファーナの全身を揺らす。

ミシア のパイロットは、最期の瞬間まで リンドエア ごと ソルダーニヤ を撃ち抜こうとしなかった。砲身の冷却が間に合わなかつたのか。照準が定まらなかつたのか。或いは仲間を撃つという行為に迷いが生じたのか。その迷いは、人間として決して間違つたものではない。しかし兵士としては致命的なミスだつた。出撃前に彼らは酒を酌み交わし、この戦場から共に生きて帰ろうと語り合つたのだろうか。

妄想だ、メファーナは思考を振り払つて両のグリップを握り直す。余計なことは考へるな。ここは戦場なんだ。敵に情など感じていたら次に命を落とすのは自分の方。

叫び続けるアラート。

上空より リンドエア がマイクロミサイルを撃ち込んでくる。建造物の影に隠れるよう愛機を移動させながらレーダーを確認。敵部隊の更なる増援に、簡易マップが敵ポインターのマーカーで染まつしていく。

ミサイルが建造物の横腹へ次々と直撃し爆炎と衝撃波を生む。口

ンクリートの壁面をビームガンで撃ち破り、駐車場と思しき廃ビルの内部に侵入。置き棄てられた無数の廃車を粉々に吹き飛ばしながら直進で通り抜け、今度は左肩部のミサイルで壁面を破壊して反対側の街道へ出る。

刹那、巨大な砲声と震動がメファーナの五感に叩きつけられた。障害物として利用するつもりだった構造物の一棟が、砲弾に根元を破碎されて倒壊を始める。迫る大質量をサイドブーストで凌ぎ、衝撃に備えた。コンクリートの軋み崩れる轟音が戦場を駆け抜け、穢れた灰燼と土煙が宙を踊り狂う。

この口径と破壊力。NFAの携行兵器ではない。広範囲レーダーが巨大な熱源を探知する。敵艦による艦砲射撃。

叫び続けるアラート。

大地が抉られ、廃ビルが薙ぎ倒される。巨大な主砲の洗礼によつて、旧市街は消えない火焔に飲み込まれていった。機人たちの宴は終わらない。応射、跳躍、接地。燃え盛る戦場の炎をスラスター光圧で震わせながら ソルダーニヤ は戦闘機動をとり続ける。

前方より ミシア 重武装タイプがロケットランチャーを、上空より リンドニア が対地ミサイルを、後方より ミシア 高機動タイプがサブマシンガンを、遠方より敵戦艦が滑空砲を、さらに接近する敵NFAのロックオン警告。ソルダーニヤの戦術AIが予測弾道を表示する。周囲の空間が、敵機の弾道で赤く埋め尽くされた。

「回避軌道が、ない……！」

だがメファーナの次なる判断は淀みない。ハンドカノンとサブスマスターの出力をカット、プライオリティをディフェンスシステムへ。ソルダーニヤは両膝とバックパックを覆う装甲をせり上げ放熱帯を露呈、エネルギー・フィールド発生機構の稼動を以て主の命に応えた。空気中に散布される琥珀色の微粒子が、互いに干渉しながら濃度を増して機体周囲に安定還流。NFAが搭載する従来型のエネルギー・フィールドは、機体前面一八〇度に半球状の防御力場を

発生させるタイプが主流だ。対して ソルダーニャ のそれは、より高い出力と粒子圧縮率を発揮し、機体の全天周囲に完全球状の防御力場を形成することが可能である。

ロケットランチャーとマイクロミサイルが、琥珀色の光壁に弾頭を圧し潰され指向性を奪われたまま消し飛ぶ。サブマシンガンの銃弾は、粒子との干渉波を描きながら分解されていく。大口径の滑空砲弾が、僅か後方の地面に着弾。巻き起こる激しい衝撃波とコンクリートを抱いた爆風は、しかしフィールドに阻まれ ソルダーニャ の装甲に届くことはない。

フィールドジェネレーター。切り開いた回避軌道に乗つてこの場を離脱、火線が周囲を追い抜いていく。熱波の奔流を機体に浴びながらメインバー二アを出力。戦術AIが算出する次なる予測弾道は、敵艦の砲撃が著しく精度を低下させている事実をメファーナに訴えた。

遙か後方から、 クインハルト が援護射撃によつて敵艦を牽制してくれている。

「みなさんありがとう」

戦闘開始から一五〇分が経過していた。満身創痍の友軍に後退を呼び掛けながら進み続けた為、戦域に ベオル の反応はない。ここで決着をつける。FCSのリミッター解除、エネルギーを右腕部へ集中供給し デュランダル を最大解放。

前方へ掲げた長刀が、ユニット全体を“展開”させる。パーティ群が外側へスライドすることで姿を現した デュランダル の内部機構は、粒子加速帯と思しき複雑な運動出力装置だ。

出力全開。粒子を迸らせながらユニット内部から雄々しく放射されたビームスレイヤーの束は、力場を固定すると瞬時に デュランダル の刀身を光の槍剣へと変貌させた。巨大な剣が、ようやく堅い鞘から抜き放たれた瞬間である。

敵艦位置を再確認し、彼我の距離を計算。最適な侵攻ルートを割り出してフットペダルを踏み込む。メインバー二アの咆哮。 デ

ユランダルを猛らせ、接近する敵ΖＦＡ部隊を迎討つ。

死の宴は最終幕の開演を告げた。

ソルダーニャの手繰る剣閃が、戦場に軌跡を描いて躍る。横薙ぎの袈裟を受けたミシアは頭部と脚部のみを残して滅却し、振り下ろす一太刀を受けたリンンドエアは機体そのものがこの世から消滅する。廃ビルの一部に身を隠しながら戦術ミサイルを垂直発射していた敵機を、建造物もろとも両断。全てを無へ帰す豪なる剣舞　ターンブーストの遠心力を乗せた太刀で、続く一機の敵を同時に消し飛ばす。巨大な光刃はもはや破壊力が、戦術レベルが、斬撃兵器の限界を超えていた。

握り絞めるグリップが恐ろしいほど熱い。自らが斬り伏せた機人の断末魔が、メファーナの精神を浸食していく。この世界で生き残る為には、戦うしかない。

死なないで。メファ。

ふと「あの子」の声が胸に響いた。思い出すまいとしていたのに。酷く懐かしい声。彼女がいなくなつてしまふ直前に発した最後の言葉。幻聴だと分かっていても、心が引っ張られるようにそこへ沈む。私こそ、私こそが、「あの子」にその言葉を掛けてあげるべきだった。

戦場で生き残つても、失したものが戻つてくることはない。体が、重い。この苦しみから解放されたい。ここで死ぬのは簡単なことなのだろう。何もしなければいいのだから。しかし骨の髓まで染み込んだ戦闘技能が、メファーナに戦意の喪失と安易な死を許さない。

ジヤラジヤラと音を立て、黒い鎖がメファーナの胸を締め付ける。「聞こえますか　クインハルト」。これよりポイント2065の敵戦艦を撃滅します」

低空から射撃体制へ入ったリンンドエアを薙ぎ払う。翼を生やした機械仕掛けの鳥人が、その姿を滅されていく。

下ろしたばかりの靴下が、

鷺色の粒子を前面へ還流させ防御力場を展開したミシアシー

ルドタイプを、フィールド」と突き破る。敵パイロットの命とその機体は瞬時に蒸発、凄まじい余波で地面が黒く焦げ付いた。

愛用していたシャープペンが、

鋭い低音を響かせて飛来した敵艦の大口径滑空弾を受け止める。爆発のエネルギーは「デュランダル」の光の巨槍へと還元され、僅かな痺れと震動のみが伝わった。そして「ソルダーニヤ」の進攻を遮ることはない。

お気に入りのリップクリームが、

灰燼を吐き出しながら倒壊してくる建造物を斬り裂く。中央を消滅させられ波状に吹き飛んだ建造物の巨大な断片が、数機の敵機を巻き込みながら爆発炎上して転がっていくさまは、生きてはいないはずの死都が、まるで我が身を削られる激しい痛みに阿鼻叫喚しているかのようだ。

三九ドルと一五三六円の入った財布が、

超高速で接近する「ソルダーニヤ」に対して、勇敢にも正面から砲身を向け射撃体勢に入ったミシア 砲撃戦タイプを「デュランダル」の斬光で喰らい尽くす。

大切な戦友だつた「あの子」が、

機銃曳航、滑空弾道、光学射線、空間上に広がるあらゆる弾幕を斬り拓いて進撃。死の焰と闇に侵された景観と、敵機の断末魔が次々と後方へ飛び去つていき、やがて目前に巨大な影が姿を現した。

帰つてくるはずはない。

最終撃破目標、敵戦艦「ダートフォース」。ホバー機動を主推進とし、起伏に富んだシンメトリーの構造が特徴的な艦影。その直上に跳躍した「ソルダーニヤ」は、槍剣の矛先を艦橋部へ向ける。「デュランダル」を射撃形態へ移行。展開していたパーツの一部が閉じられ、光刃を一時的にカット、ユニット前部が伸張する。再展開。光の槍剣は、長銃身の中距離対艦砲と化す。

だから「あの子」のいない今、自分が艦の皆を、母を守る。

右グリップを押し込み、トリガーを引き絞る。運動型の粒子加速

帶が唸りを上げた。収束率変換。ビームスレイヤーを成す力場が剣の形状から解放される。加速帶より指向性を与えられたエネルギーの塊は、物質を焼き尽くす熱線となつて空間を駆け降りた。デュランダルの放つた巨大な光条が、敵艦の艦橋を貫通。莫大な熱流はその艦内を攪拌、蹂躪し、刹那に機関部へと達して本体を爆炎の渦で飲み込んだ。

轟音と爆光が奔り交う中空に、放物線を描いて ソルダー二ヤは着地する。僅かな残光を漏らす デュランダル のユニットが、完全に閉じられた。それと入れ代わるように機体の右肩部が展開し、右腕部に蓄積した余剰エネルギーを一気に吐き出す。 ソルダー二ヤ 右肩部は デュランダル の冷却機構である。

激しい勢いで放出される大量の赤い鱗粉。その飛べない隻翼は、剣が吸い取つた血と魂で成したものなのかもしねり。

「これで周辺の敵部隊は」

アラート。熱源探知、急接近する残存敵NFAを一機補足。地上八時方向から ミシア 、中空二時方向より リンドエア 。

「しまつた！ まだ残つて、」

何て愚鈍なミスを。メファーナは警戒と索敵を怠つた自らの留意不足を叱咤、嫌悪する。恐らく敵機は、母艦の爆発に紛れて機体の熱反応を消しながら反撃の機会を得たのだ。迫る ミシア は両腕にエネルギーブレードを起動させた近接戦闘タイプ。

ハンドカノンはパワーダウンと弾切れで、既にビームガンとソリッドバルカンの双方を撃つことが出来ない。肩部ミサイルも同様。右腕の デュランダル は先程冷却に入つたばかりだ。左側面左後方から急所へ飛び込まれるこの間合いでは、長大な刀身を振りかざすことも不可能だ。

決死を囁くモーメント。

「これで、」

咄嗟の反応で左マニピュレーターのハンドカノンを ミシア へ向けて投げつけ、右腰部に収納されている補助武装のレーザーダガ

ーを抜き放つ。ハンドカノンを左ブレードで切り裂いて、こちらに右ブレードによる切り払いを浴びせようとするミシアの攻撃を、体勢を低める俊敏な動作で回避 限りなく人間に近い動きが可能な人工筋のなせる技だ し、発振させたレーザーダガーの粒子刃で敵のコックピットを貫いた。

ミシア 近接戦闘タイプを撃破。だが リンドエア が頭上からマイクロミサイルをロックオンする もはや次の手は間に合わない。スラスター出力もフィールド出力も既になく、ここからあの距離へ届く攻撃手段は皆無。メファーナは死を覚悟した。  
これで「あの子」の許へ逝けるだろうか。  
母は、自分の死を悲しんでくれるだろうか。

## 最前線（4）

不思議と瞳を閉じなかつた。故にはつきりと見えた。 リンドエア が、マイクロミサイルを発射することが出来ずに天の藻屑となつて炎と散つていく瞬間を 。

上空に友軍機反応。

『メファ、無事か』

バイザーデイスプレイに映つた男、戦場で自分の命を預けるに足る優秀な兵士。往年のハリウッドスターにも匹敵するその端麗な目鼻立ちを認めて、メファーナは静かに驚嘆する。

「フランツ……！」

NFA ウイングラッサ

日暮れと共に藍色の帯が滲み始めた暁の空を、敢然と裂いて飛翔する漆黒の機体。 ソルダーニヤ と比較すれば遙かに細身だが、軸に対して水平に展開した両翼は、一四基もの小型スタビライザーを内蔵する。通常はバックパックと肩部を、ミサイルポットをはじめとする無数のウェポンコンテナで武装している為、翼部が外見に与える印象はそれほど大きくない。だが本作戦の遂行中に弾を撃ち尽くしたそれらをページしたのだろう。現在は翼部のシルエットが浮き彫りになり、そのシンプルなラインが如何に無駄のないデザインであるかを瞠と伝えていた。

腕部は右マニピュレーターにプラズマライフルを、左マニピュレーターにレールガンをそれぞれ携える。そして本来一本の脚部があつて然るべき下半身は、その全てを大型ブースターによつて構成していた 高機動戦闘を想定して設計された、完全なる空戦NFA。

『最後まで気を抜くな。体は、どこも負傷してないか？』

無愛想なので分かり難いが、エメラルドグリーンの瞳が微かに揺れていた。本当に、心配してくれている。嬉しい。感謝の気持ちで胸が一杯になる。

「はい。大丈夫です。助けてくれてありがとうございます」

『なら、いい』

メファーナの笑顔に面と向かうのが恥ずかしいのか照れ臭いのか、フランツはすぐに視線を逸らしてばつが悪そうにむつつりと黙つた。こういうところが彼のチャームポイントなのだとメファーナは思う。あとほんの少しだけ心を開けば、きっといい友人も出来るだろうし、素敵な恋愛だつて出来るはずなのに。

ウイングラッサの機体が飛行速度を上げながら、紫色の微粒子を焚いて垂直に翻る。慣性法則に逆らつたかのような軌道修正。ウイングラッサは背部バーニアの一部に試作型の反重力推進機構、通称ディーンドライブを搭載している。これによつて他のNFAが追随出来ない変則的な機動性能を獲得した。

そんな機体の動きを眺めながら、メファーナはハッと我に返る。九死に一生を得た反動で思考が浮いて気づくのが遅れた。作戦の性質上は現在の時刻にフランツのウイングラッサが、このポイントで自分のソルダーニヤと合流しているのは不自然だ。

「フランツ、どうしてここに？」

彼は疑問の答えを至極簡潔に、無愛想にこう告げる。

『敵軍が撤退を始めた。この戦いは一先ず、俺たちの勝ちだ』

バイザーデイスプレイの端に、クインハルトからの通信を示すランプが点灯していた。

「イーグリッド 軍の艦隊が、戦闘エリアから離脱していきます」「被害状況確認。後衛のNFA部隊を収容しつつ友軍の救援活動にあたれ」

時雨は艦長シートに深く背中を預けながら両腕を組み、「撤退、ね」と唸つてみせる。このクインハルトが前線へ出ることなく戦闘に勝利したのはまさしく僥倖よんこうと言えるが、どうもこの結果は腑に落ちない。

「てつきり“FFA”的一機や一機は平然と投入してくるもんかと

思つていたが

「もうキャプテン、縁起でもない」と言わないで下さい。メファは今回かなり危なかつたんですから！」

「ああすまない。ソルダーニヤの動力は、飽くまで“準”永久機関。出力と限界値をもう少し考慮すべきだった。攻防進退の最終的な判断はパイロットに一任しているとはいえ、ちょっと無茶をさせたかな」

本当ですよ全く、とぶんすか怒り始めた愛子に対して平謝りといい訳をしつつ、時雨は今次の戦いを反芻する。

本作戦 メファーナの ソルダーニヤ が突破力を生かして最前線の敵部隊を真っ向から斬り崩し、フランスの ウィングラッサ が航行力を生かして可能な限り艦隊に接近、高度からミサイルをぶち込む。結果、敵の旗艦を叩く前に勝敗が決してしまった。

クインハルト が参戦して以降、解放軍 が戦局を持ち直したのは事実。だが敵の全艦隊を撤退に追い込むほど壊滅的な打撃を与えた訳ではない。長距離戦闘に秀でた ウィングラッサ も、流石にそれほど大量のミサイルを一度に装備することは不可能だ。弾切れと同時に戦線を速やかに離脱し、ソルダーニヤ とは別ルートで帰還。早急に補給を受け、第三派として再び出撃してもらう手筈だった。

「妙だな

「妙ですね」

イーグリッド が取つた「撤退」という選択は妙だ。

現在の勢力図から見て確かに奴らは、追い詰められている自分たち 解放軍 と比べ遙かに余裕のある戦い方が出来るだろう。そこまで必死になる必要はない。しかし支配領域を拡大する上で、今回の制圧戦がこのように軽視される理由もないと時雨は考える。

煮え切らない。ねつとりと思考に絡み付いて尾を引く妙な感覚。胸騒ぎがする。「嫌な予感」の一言で片づけるにはあまりにも危うい。イーグリッド はまだ重要な手札を隠し持つていて。

「何だらうな」

「何でしうね」

「……愛子君、俺の懸念に興味がないからって、さつきからテキトーに相槌打つてるだろ」

「ええまあ。よく分かりましたね」

なかなか切なくなつてくるじゃないか。こんなときは、そう。さつさと部屋に戻り、貴重な高級竹で作られた秘蔵コレクションの割り箸を一本だけ割つて心を慰めよう。うん。それがいい。

「部屋帰つて割り箸割るのは構いませんけど、部隊のみんなが帰艦するのをちゃんと見届けてからにして下さいね。それがキャプテンの勤めとこつものです」

やつぱり一本にしそうと思ひ。

## おかえりなわーこ（1）

「おかえりんぐメファ 嬢。無事で何よーりよ」

「ただいまです。リブリーーチーフ」

「あんれ？ といひで ソルダーーヤ のハンドカノンは？」

「失しました」

「がびーん」

そんなこんなで クインハルト へ無事に帰艦したメファーナは、リブリーにたくさん謝罪をしたあと、パイロットたちの生還を見届けに降りてきた時雨から「よく戦つてくれた」と労いの言葉を掛け てもらい、艦底部に位置するNFAハンガーを出た。

エレベーターの上昇感覚に身を預けながら、帰艦早々姿が見えなくなつたフランシを探し出して、もう一度だけ彼にお礼を言つた方がいいだらうか、それともあんまりしつこいと逆に嫌われるだらうか、などと思考を馳せつつ深呼吸。

エレベーターの扉が開く。

「つ！」

「智世」が立つていていた。

「おかえりなさい、メファ。よく頑張ったわね」

本心からなのか愛想笑いなのか判断のつかない微笑を浮かべて母はそう告げる。こんなことは初めてだ。自分を迎えてくれるなんて。嬉しい。でもどう対応すればいいのだろう。頭の中をあれこれ堂々巡りして、ようやく捻り出した言葉は

「お部屋の掃除、まだでしたよねー！ す、すぐに終わらせますから

！」

智世が今度は苦笑する。

「ふ。何それ。ここは『ただいま』でしょう?」

やってしまった。顔中が熱を帯びていくのが分かる。きっと耳の先まで真っ赤になっているに違いない。

「た、ただいまお母さん」

「お帰りなさいメファ」

そのひと言で胸に温かな安らぎが生まれてくる。

ああ。自分の帰りを待つていてくれる人がいるといつことは、こんなにも幸せなものだったのか。死ななくてよかつた。生きていよかつた。やっぱりフランツにもう一度だけお礼を伝えよう。

いや、重要なことを思い出した。

そういうえば戦闘後にはなるべく母と会いたくない理由があった。ツンと鼻を突く体臭。白いパイロットスーツが、躯にベットリと貼り付いていて凄く気持ち悪い。さつきから髪の毛がベタベタするし、全身が痒くてしおうがない。母の前では常に心掛けている「清潔」の一文字が、今や遠い異世界の呪文か何かのようだ。

「『めんなさい』

つい後ずさつて身構える。せつかく出迎えてくれた母に不快な思いをさせてしまったかもしれない。

「謝る必要はないわ。戦闘行動中 緊張状態における発汗作用は、人間として当然の身体機能よ」

智世がこちらに背中を向けて既に歩き始めていた。淀みのない、自信と誇りに満ちた強い歩調。メファーナは母のこの姿が好きだ。何故だか自分まで勇気が沸いてくる。

「何時までもそのままじゃ気持ち悪いでしょう」

小刻みに揺れる智世の肩、メファーナには分かる。

「いつまでそこに突っ立っているの? 早く私について来なさい」

その後ろ姿が自分にそう語りかけていた。

「うなることはある程度予想出来た。

母は体を洗い流そうとした直前に戦闘が始まってしまってそれを

中断せざる得なかつたのだし、自分なんかは先述の通り戦闘に參加した直後で体中が大量の汗でびつしょりなのだ。そうだ。こうなることは予想出来たはず。しかしいざこうなつてみると、やっぱりもう少しだけ心の準備が欲しかつたなと切に思つ。

降り注ぐ温水の雨。立ち込める湯煙。伝わる熱の微風。

メファーナは、智世と並んでシャワーを浴びている。

母と裸体を晒し合つなど、想像もつかなかつた。計七基のユニットシャワーが立ち並ぶフロア。簡素な開閉式の仕切りを挟んだすぐ隣で、きっと母の白くて綺麗な素肌が光を反射して煌めいているのだ。

智世の方が早くシャワーを終えるだろう。ふと自分の体に、母に見られておかしな所はないだろうか気になつて腕の動きが緩慢になる。だがボディソープの泡が自分の体を隠してくれる事実に今さら気づき、慌てて両手をこすりあわせて泡立てを始めた。

裸を見られるのが恥ずかしくて、脱衣所では母がシャワー室に入つていくまでメファーナは下着を取ることが出来なかつた。とはいへ一緒にシャワーをと誘われておきながら、このフロアでスペースを空ける訳にもいかず、こうして隣で湯の栓を開けたのである。よく泡立つた石鹼を、どうしよう、そうだ、とりあえず一番見られたくないこの胸を、

「やっぱり大きいのね」

「ひやつ

「上向きで形もいいし、羨ましいわ」

いつの間にか隣の仕切りを開いて顔を出していた全裸の智世が、これっぽつとも遠慮する素振りを見せずにメファーナの上半身を凝視している。母の身体を見返す余裕もなく、思わず自らを抱くよつにしゃがみこむが、

「私もある方だと思つてたけど、流石にあなたには負けるみたい」手遅れだつた。

「頂上はピンク色か。色素が薄いのね」

も、もうやめて。恥ずかしい。

智世は生物学者でもある。あらゆる生物の身体構造に精通しているのだ。今までに幾度となく聞かされてきた生命体についての論述も、必ず科学的見地に基づいた厳粛なものではなかつたか。それなのに今の智世の口から出て来る言葉は、何から今まで破廉恥なものに思えてくる。

「今、成長期よね。まだ乳房の芯は残つてゐる？ 弹性の具合や脂肪の付き方にも興味があるわ」

「お、お願ひだからもうやめて。

「乳腺の状態はどう？ 少し触診してもいいかしら？」

母さんの威厳が揺らいでいる気がするのは、まさか私のせい？ もしそうなら、こんな大きいだけで何の役にも立たない胸なんていらないよ！」

恥ずかしさで全身が酷く火照つてゐる。てっきり自分になんか関心がないと思っていた母が、こいつして興味を示してくれたのは喜ばしい事実なはずなのに。この状況下では、とてもそれを素直に喜べないメファーナであった。

智世のおつぱいタツチをびつにかこつにか凌ぎ切り、食堂に辿り着いたメファーナは、壁掛けされた電子メニユーボードの前で、考え込むように顔を滲る菊岡愛子の姿を見かけた。「うーん。どうしようかな」などと呟いていた。何やら夕食のメニューを決めかねているようだ。

「こんばんは、愛子さん」

「ああメファ」

「悩んでらつしゃるようですね」

「うんそななのよ。麺系でいいつと思つただけど。ソーメンにするか、チャーシューメンするか、なかなか決まらなくてね。メファはどうちがいいと思つ？」

急にそんなこと話されても、何を基準に決めればいいものか分か

らない。どうじよつつか悩んでくると、愛子が突然「そつだー」と手を叩いた。

わ、ビックリしたあ。

「いいこと思いついた。私がソーメンにするから、メファはチャーシューメンにしなよ。それでもって半分食べた時点でお椀を交換。ほらほら万事解決。一度で一度おいしいこの感じ、私つて頭いい」巻き込まれてしまつた。

カウンターで注文を済ませ、料理の載つたトレイを受け取る。空いているテーブルを適当に見繕つて愛子と並んで席に座つた。

箸を用意して「いただきます」をし、チャーシューメンに手を付け始める。じつてりとした濃厚スープと肉汁たっぷりの厚切りチャーシューが何とも食欲をそそる。そういえば午前中に緊急戦備警報が発令されてから五時間、まともに昼食を摂つていなかつた。

食は須く進み、ずず、ずず、と麺の音を立てながらお椀の中身はあつという間に半分に。そろそろ愛子のソーメンと交換しなければいけないのだろうか。メファーナが拳動不審になり始める中、ふと向かい側のテーブルに別のトレイが置かれた。

ぱつちん！

箸が割れる無駄に小気味いい音。

「これはこれは。食堂の隅で箸をつかつてる」婦人がいるなーと思つたら、君たちだつたか

メファーナは微笑を浮かべて「キャプテン、どうもお疲れさまです」と言つてみる。愛子がその隣で、ちひ、と小さく悪態をつきながら露骨に視線を逸らした。

「あつ、愛子くん今確かにちつちやな声で舌打ちしたひ。傷つくな」眉をひそめたまま芝居がかつたような動作でかぶりを振る桐島時雨は、「違います」という愛子のあからさまな嘘にもめげずメファーナ達の正面を陣取つた。彼の持つてきたトレイの上には、赤やら黄色やら黒やら白やら緑やらがやたらめつたら挟み込まれたビックサイズのハンバーガーが二つ。

それを食べるのに何故お箸？

メファーナのそんな疑問をよそに、何と時雨は目前でハンバーガーの解体ショーを始めてしまったではないか。蓋と真ん中と底で具を挟んでいた三枚の円形パン、赤トマト、黄色チーズ、黒ハンバーグ、白卵、緑レタス、無惨にもその身を引き離されてしまったハンバーガー。バラバラ殺バーガーの犯人は、それらを箸で挟み込むと器用に口の中へ運び始めた。

「うわ、ちょっとあれ。何考えるのかしら、理解できないわ。これだから嫌だつたのに……勘弁してよもう」

小声でそう耳打ちしてくる愛子に苦笑を返す。確かにどうかと思う。本人にとつては割り箸を駆使した高度なテクニックのつもりなのだろうが、これではハンバーガーの存在意義が無くなつてしまつ。可哀想なハンバーガーさん。

「んぐんぐ。そういえば、この艦にも出るらしいな」

何の脈絡もなく唐突に切り出された時雨の言葉に意味をはかりかねたメファーナは、急に何を言い出すんだろうと思いつつ小首を傾げて聞き返す。

「出るつて何がですか？」

「出るつて言つたら、ほら、やつぱりあれしかないじゃないか。本当は見えちゃいけないはずのあれだ」

急に声のトーンを低めて絞り出すようにそう呟く時雨。いまだ彼の言葉の真意を理解できなくてキヨトンとするメファーナの隣で、愛子が「ひ」と肩を震わせて箸をお椀の中に落とした。

心なしか、この場の温度が少しだけ下がつた気がする。

「うん、まあ何ていうか、このクインハルトは戦争をしてるんだ。いわば生と死の彼岸へ頻繁に出入りしていると言つても過言じやないだろ。」

あると思うんだよね。魂が行き交う道筋みたいなものが、このクインハルトの艦内にもさ。だから時折こんな話を耳にするんだ。丑三つ時。夏夜の寝苦しさに目を覚ましたある兵士が、汗でベタ

ベタになつた自分の身体をわざりさせようと、シャワー室へ続く長い廊下を歩いていた。誘導灯しか光源のないそこは昏闇とは完全に別世界さ。

カツーンカツーンていつ自分の足音だけが反響する、不気味な暗がり。兵士はふと自分以外の気配を微かに感じ取るんだ。だが振り返つても誰もいない。考えてみればおかしな話だよ。自分の足音しか聞こえないのに背後から気配を感じるなんてさ。

首を傾げて再び歩みを始める兵士。馬鹿だよなあ。ここで自分の部屋に引き返せば良かつたのに……。

やがて気づいてしまうんだ。自分の足音に紛れて、ぞつぞつぞつていう、重たい何かが床の上を引き摺られていくような摩擦音が、いつの間にか聞こえ始めたことに。こんなのは幻聴だ、自分にそう言い聞かせながら歩みを進める兵士。

だが進めば進む程大きくなるその音に身の内の恐れは否応なく増長されていく。恐怖のあまり振り返ることも出来ず、耐えられなくなつた兵士は咄嗟にすぐ脇のトイレに駆け込んで、個室に鍵を掛けた。

ぞつぞつぞつ。

その音はトイレの中まで追いかけてきた。便座の上で両耳を塞いでうすくまる兵士。全身の震えは止まらず、冷や汗は一層溢れてくる。

ぞつぞつぞつ。

早く、早く違うところへ行ってくれ。どうかこの扉を開けないでくれ。俺の存在に気付かないでくれ。兵士は必死に祈る。すると突然その音が止んだ。願いが通じたのか、それ以来いくら息を潜めても音は聞こえてこない。

腕で額の汗を拭いながら大きく溜め息を吐いた兵士が、便座から立ち上がつたその時だ。ツーと首筋を何かが伝つた。自分の汗だと想い、手でそつとそれを拭う。何気なしに手のひらを確かめた兵士は目をむきだして驚愕する。赤。手のひらにベッタリと、血の赤。

恐怖で殆ど動かなくなつた首の関節を軋ませながら、ゆっくり頭を持ち上げる。

戦慄で五臓六腑が凍りついた。そこには、爪の剥がれた血まみれの指で壁の縁を掴み、眼球の抉られた暗く虚ろな双眸でこちらを見下ろす戦死者の怨靈が

「いやああああああ——！」

突如もの凄い音を響かせて立ち上がつた顔面蒼白の愛子が、両耳を塞いで絶叫しながら食堂を走り去つて行つた。速い。むちゃくちや速い。彼女は本当にオペレーターか。怪談話を途中で切り上げた時雨が後頭部を搔いて肩をすくめた。

「おつと。囁かな復讐のつもりだつたんだけど、ちとやり過ぎたかな」

## おかげつなわこ（2）

「愛子さんはああいう話が大の苦手なんですから、あんまりしつこくやると本当に恨まれますよ。あと、出来れば食事中にトイレの話はやめて下さい」

「すんません」

時雨を奢めつつ隣を見やる、ソーメンの鉢とお椀が放置してあった。覗いてみると中身は空っぽだ。いつの間に……。交換の話は一体どこに行つたのだろう。もしかして、時雨の前で交換するとかわられそうだからやめたのかもしれない。

メファーナは残り半分のチャーシューメンを完食して席を立つ。愛子の食器を片付けるのはもはや自分しかいない。流石に一度に全部を運ぶ自信はないので、一回に分けることにした。まず愛子のを持つて行つたあと、再びテーブルに戻つてきて自分の使つたトレイと食器を手に取る。

「それじゃあキャプテンお先に

「ちょっと待つた」

振り返るメファーナに向かつて時雨が掲げたのは、もちろん見事に割れたチャップステイクスであった。

「メファはこの芸術的な割筋をどう思つ?」近年稀にみる傑作だと自負しているんだが

「今日は助けてくれて本当にありがとう

「何だ藪から棒に。そのことはもういいつていつたる」

生きて帰つてこられたからこそ、母に優しく出迎えてもらえた。でもこれはちょっと照れてしまつので、言わないことにする。

「いいえ。こうしていま生きて食後のメロンソーダを楽しめているのも、やっぱりフランスのおかげだから。ありがとう」

フランスは無愛想な表情で腕を組んだ。

じついうときは例によつて瞳の動きを観察すればいい。案の定、微かに揺れている。戦闘終了直後に見たのと同じ、照れとバツの悪さが入り混じつた、声なき戸惑い。困らせてしまつただろうか。でも言わなければきっと後悔したと思うから。通信機越しではなく、顔を見合わせて、言葉を交わしたかつたのだ。

手元のメロンソーダとフランツの瞳を見比べながらほつと息をつく。ちゃんとお礼が言えて良かった。

それから一人は特に会話をするでもなく、ただただ流れ行くだけの数分間をまつたりと過ごす。フランツはコーヒーを、メファーナはメロンソーダを啜りながら。

会話がなければ息が詰まりそうになる、とは「ミニコニケーション」の道理において何かとよく聞く台詞だが、それは相手と本当は仲の良くない証拠なのだ。真に心を許しあえる仲間となら、ちょうど今の自分のようにただ一緒にいるだけで、安らぎや居心地の良さを感じるものだと思う。

ふと、ここまで仲がいいのになぜ自分たちの関係は恋愛に発展しないのかをちょっとぴり考えて、何だか頭痛がしてきそうになる。フランツと自分がそういう雰囲気になつてている光景が、全くと言つていいほど想像出来ない。

彼はやっぱり自分にとつて戦友 ああ駄目だ。

これは出撃前に既にやつた、恋愛、否、友情という思考の流れとまるつきり同じではないか。これ以上続ければ、心が再び「あの子」に辿り着く。まるで行き場のない檻だ。気持ちが一気に沈んできつとまたフランツに迷惑を掛けてしまう。痛み始める胸を抑えつけて思考を強引に振り払い、メファーナは顔を上げる。

と、フランツの視線が自分を通り越して後方へ向けられていることに気づく。それ自体は別に不自然ではなかつたが、気になることがある。その瞳が揺れていない。これは、彼が確固たる意志の下に行動を起こす時の眼差しだ。

フランツの視線を追つてみる。フロアの隅から、執拗にこちらを

窺う仕草が見て取れる女性のクルーがひとり。朝すれ違つた人とはまた別人だ。

「私、席を外した方がいいですよね？」

「すまない」

「いえ」

フランスと短い会話を交わし、飲み干したメロンソーダの紙コップをゴミ箱に捨ててメファーナはフロアの出入り口へ向かう。

例の女性が、フランスの周囲にもう誰もいない状況を確認して彼の元へ走り寄つた。彼女はフランスと対面するや矢継ぎ早に何かを訴え始める。その頬がどんどん紅潮していく。嫉妬と羞恥。

さつき一緒にいた子とは一体どういう関係なんですか、付き合つているんですか？ 私も、私だって、今日までずっとあなたのことを見つきました。好きです。どうか私と、私と。

ここからではもう声は聞こえないが、多分そういうことを言つているのだろうというのがメファーナには分かる。そして、フランスが彼女に求愛に応えないのであるつことも。

もし恋愛の神様がこの世に存在するのなら、どうかあの女性と、フランスの前に、いつの日か素敵な人が現れますように……。そう祈りを捧げながら、メファーナはリフレッシュルームをあとにする。

整理整頓の基本は、まず今すぐ必要なものとそうでないものに分けることだろう。その点はメファーナの得意分野だ。何たつて魔法のメモ帳があるのだから。

足の踏み場を埋めていた書類とディスクを少しづつ丁寧に纏めていく。棚やクローゼットなど、収納を最大限に活用して部屋本来の広さを取り戻す。掃除を始めてから三時間弱。机の上、ベッドの上、床の上、智世の私室が秩序を伴つて美しく生まれ変わつた。

「お疲れさま。これなら私の手伝いなんて逆に要らなかつたわね」

「そんなことないです！」

母さんと一緒に掃除が出来て嬉しかつたから、とは流石に言えな

い。

「綺麗になると気持ちがいいわ。でも良かつたの？ シャワーを浴びたばかりだったのに。私はほとんど動いてないけど、あなたはまた汗をかいたんじゃないかしら」

頼まれた仕事はその日にやつておかないと気が済まない性格なのだ。「大丈夫です。気にしないで下さい」と返しながらパソコンのディスプレイを軽く拭こうとして、思わず手が止まる。

そこには、驚嘆するほど膨大な量の数語式が溢れていた。

記号と数字が織り成す静謐な混沌は、部屋の秩序と相対して異常なまでの存在感を放つ。今朝見たときよりも遙かに難解さを増している。不思議な魔力を宿した数語式に飲み込まれてしまいそうな錯覚を抱いて立ち眩みを起こしかけたそのとき、

「ファインマン。発展系の経路積分法よ」

「え、」

突然近くなつたその声に思わず振り返る。いつの間にかすぐ背後に智世がいた。緊張が全身を走る。見つめ合つ、母娘。先程までの柔和な空気を一切感じさせない母の真剣な表情に意識を集中する。

「それはね、魔法なの」

「魔法？」

一瞬、魔法のメモ帳の存在が脳裏を過ぎたが直ぐにかき消えた。

あれとは決定的に質が違う。

「そう。この世界の真実を映し出す強力な呪文」  
母は、何を言つてゐるのだろう。

「平行宇宙という言葉を知つてゐるかしら？」

少し考えてから、首を縦に振る。SFに登場するパラレルワールドの事ならメファーナにも少しだけ知識がある。確か「時間軸が分岐し、それぞれ別の因果律をもつた世界が無限に存在している」という理論だったと思う。

現実主義の物理学者である智世の口から魔法などという単語や、SFとはいえ作り話の中でしか語られないような台詞がこうして飛

び出してくるとは夢にも思わなかつた。

「この経路積分はね、平行宇宙の存在を数学的に証明できるかもしないツールなの」

意味が理解出来ない。物理学の素養がない自分に向かつて突然何を伝えようといるのか。だが次に発せられた言葉は、メファーナの心を深く抉るものだつた。

「メファ。あなたは、私がいざれこの艦を去つてしまつのではないがと危惧しているわね」

口から心臓が飛び出しそうになる。「あの子」を失してから毎日毎日、苦悩し続けた恐怖を言い当てられてしまつた。見透かされた。胸の奥に仕舞い込んで隠し続けてるつもりだつた心の影を。

「そ、それは」

「部屋の掃除をしてくれたお礼よ。あなたの一番知りたいことを教えてあげる」

私の一番知りたい」と。

「あの子」がいなくなつてしまつたから、お母さんは私を置いて、遠い何処かへ行つてしまつのではないか。精神を蝕み続けている大きな恐れ……。

「私は、この艦からは離れないし、何処にも行かないわ」  
聴覚が捉えたその響きを、脳髄がゆっくりと解析する。

嬉しい。本当に嬉しい。それなのに、メファーナは大きな幸福を感じることがまだ出来ないでいる。こんなにも望んでいた答えを母は与えてくれているのに、自分はこれ以上何を望むと「いうのか。分かりきつていた。

「こう言つてほしいのだ、『あなたを置いて遠くへ行つたりしないわ』と。こう付け加えてほしいのだ、『あなたがいるから私はここに残るのよ』と。自分は何と強欲で醜く、傲慢で身の程知らずなのだろう。こんなものはきっと智世の求める娘の姿ではない。

智世の瞳はもはやメファーナに向けられていなかつた。自分の背中を通り越し、再びパソコンのディスプレイへと注がれた彼女の強

い視線を認めて、じつじょもなく悟つてしまつ。肩に置かれていた母の手に力が入る。この画面に巢食う魔法の呪文こそ、「あの子」を失つてなお智世がこの クインハルト に留まる本当の理由なのだ。

あの母がここまで情熱を注いでいる。凄く価値のある研究に違いない。それはメファーナにとつても誇れることだ。

でも。ほんの片隅でいいから、どんなに小さくてもいいから、智世を智世足らしめている氣高い決意と心のどこかに、自分の存在を見つけたかった。

どんどん我儘になつていく己に気がついて、必死にその邪さを抑え込む。戦場から戻つたときに母が優しく迎えてくれたことを誇大解釈し、氣を大きくしていったのかもしれない。智世の些細な気まぐれを娘への愛情だと勘違いして。

メファーナは心の中で何度もかぶりを振つた。いつから自分はそんな高望みが出来るほど偉くなつたんだ。些細な気まぐれだつて全然構わない。母が優しく迎えてくれた それだけで、それだけで充分だつたんだ。他にはもう何も望まない。

「母さん、話してくれてありがとうございます。その言葉を聞いてとても安心しました」

内心の葛藤を悟られない程度には巧く笑えたと思う。ただ含みのある表情であることは勘づかれたようで、智世に再び苦笑されるはめになつた。

「まあとにかくそういうことだから、これからもよろしく頼むわね」「はい。いらっしゃいです」

メファーナの肩から手を離してゆつくり後退すると、智世はそのまま部屋のベッドに腰を掛けた。

母を追つてベッドの脇にあるテーブルへと歩み寄り、その上に置かれた簡易給湯セットに手を伸ばす。急須の中にお茶の葉が入つてることを確認して、小型ポットからお湯を注ぐ。柔らかい葉の香りが仄かに立ち込める中、溢さないように慎重な手つきで母の湯飲み

にお茶を淹れた。

「どうぞ」

「ありがとう」

差し出した湯飲みを受け取った智世が、「あら」と小さな驚きの声を上げる。しまった。埃でも浮いていたのか。「これよ」中身がよく見えるようこちらに傾けられる湯飲み。慌ててその中を覗き込む。

細いお茶の茎が、垂直に立つて浮かんでいた。

「……すぐに、淹れ直しますから」

「ああ待って」

湯飲みを取りのつとするメファーナを制して、智世は田を細めながらお茶の茎を眺めている。嬉しそうな表情に見えるのは気のせいだらうか。

「これは茶柱と言つて、日本では吉兆の現れだと云われているの。私も科学者のひとりとしてその手の縁起はあまり信じない方だけ。なるほど、実際にこの田で見てみるとなかなか悪い気はしないわね」

「縁起のいいことなんですね」

「ええそうよ」

メファーナはそつと胸を撫で下ろす。失敗じゃなくて良かつた。それにほんの少しだけれど母を喜ばせることも出来た。茶柱にそつと感謝の気持ちを送る。

「メファアにも、いいことがあるといいわね」

顔を上げた母が、爽やかに微笑んでそう言つてくれた。

お母さん。私はもう満足です。あなたが喜んでくれるだけで、こんなに嬉しい気持ちになるのだから。

メファーナがもう一度シャワーを浴び終えてから自分の部屋へ戻る途中で、クインハルトは消灯時間を迎えた。天井のライトがその明度を緩やかに落としていき、代わりに足元に設置された小さ

な誘導灯が点灯を始める。静寂と暗闇が辺りを支配した。

智世ともつと一緒にいたくて、もつと話がしたくて、あのあと結局一時間近く彼女の部屋に居座ってしまった。迷惑ではなかつただろうか、邪魔になつていなかつただろうか。そう考えたら不安になつてくる。自問自答を繰り返しながら廊下を進む。

## おかげつなわこ（3）

カツン、カツン。

自分の立てる足音が、広い廊下に反響して次々と暗黒の中へ飲み込まれていく。

カツン、カツン。

あれ、そう言えばこの状況って。

メファーナはふと、食堂で時雨から語り聞かされた胡散臭い怪談話を思い出す。少し肌寒くなつて思わずテンションが下がつた。話の中に登場する兵士と違つて、自分は既に汗を洗い流したあとだが、ここまで場の雰囲気が似てると流石に気味が悪い。もたもたしていると、重たいものを引き摺るような例のあの音が本当に聞こえてきそうだ。

若干歩調を速めて自室へ急ぐ。最後の角を曲がつたところで、ドンッ。

突然進行方向に現れた何かと正面からぶつかった。

「きやああああーー！」

確かにかなり驚いたのは事実だが、これはメファーナの上げた悲鳴ではない。

「あんにゃあはあらあみいたあじー、なんまいだぶなんまいだぶ！」低い位置から震えた声が聞こえてくる。床にへたり込んだまま何やらおかしなお経を唱え始めたのは、どうやら爪が剥がれた血まみれの指と眼球の抉られた暗く虚ろな双眸をもつた戦死者の怨霊などではなくて。

「お願いだから呪い殺さないでえええ

「愛子、さん？」

尋常ならざる恐怖に打ち震え、手を合図させてただただ押し続ける

菊岡愛子がいた。

「ふえ？ メファ……？」

恐る恐るといつたでこちらを見上げてくる愛子の顔はそれは悲愴で、溢れんばかりの涙を溜めた瞳は思わず同情を誘わずにはいられないほど痛々しいものだった。

……

「全部あこがれのせこよ、あんの割り箸バカが食堂でへんなこと書つからつ！」

「まあまあ。今は怒ることより、一刻も早くブリッジに辿り着く方が先決ですよ」

「そ、そうよね。ありがとメファ」

愛子は、ブリッジのオペレーター席にうつかり自分のブレスレットを忘れてきたのだそうだ。その事に気がついたのはちょうど就寝前。血相を変えて部屋を飛び出したものの、廊下は見ての通り得体の知れない別世界。

一步一歩進むにつれ、メファーナと同じく雰囲気から時雨の怪談話を連想した愛子は、思わず全身を竦み上がらせる。刹那、すぐそこにいる曲がり角の向こうから何者かの足音が近付いてくるではないか。恐怖のあまり逃げ出すどころか両脚が震えて動かなくなつたところ。

ここだけの話と執拗に念を押しながら、メファーナと正面から衝突したときに失禁してしまったことを愛子は顔を赤らめながら白状した。

恥をかいてまでわざわざ打ち明けてくれなくてもいいのに。そう思つたが、しかしそれは

「凄く恐ろしい瞬間を体験したけど遭遇したのは知り合いだつた」という不幸中の幸いから彼女が見い出したある光明を実行に移す為の、足掛かりとなる話術であつたことをすぐに思い知らされる。

「これ以上ひとりでいたら、わたし心臓マヒで死んじゃうよ。メファーナお願いつ。ブリッジまで一緒に来て！」

オペレーターという職業柄か、愛子は会話の組み立て方がとても上手い。この流れから懇願するように泣きつかれては、やつぱりメファーナには断れなかつた。

果たして、メファーナの背中にぴったりとくっついて絶対にそれより前には出ないよう歩きながら時雨の陰口を叩きまくる愛子を何度も宥めつゝ、ブリッジを手指して再び暗い廊下を歩いているこの奇妙な状況が出来上がつたのである。

「何かまたムカついてきた。割り箸燃やしてやろうかしら」

「まあまあ。ここは穩便に行きましょう」

それにして、も。愛子はあんなに怖い思いをしたにも関わらず、もう夜も遅いので今日のところは諦めることにする、という選択肢はなかつたのだろうか。

「そのブレスレットはよほど大切なものなんですね。もしかして、誰かからプレゼントされたものですか？」

ちょっとしたロマンスを期待してそう問い合わせたメファーナに、「うんそその。元カレにもらつたやつ。まだお金に替える前だつてこうのに……夜のうちに盗み出されでもしたら大変だわ！」

実際に逞しい台詞が返つてきた。

「この時間にブリッジへれる人は限られていますし、中には監視カメラがありますよ」

「もの凄いハッキング能力の持ち主かもしないわ。それに犯人が覆面してたらどうするの？」

「考えすぎですよ」

「ダメよそんな甘い考えじや。今の時代を生き抜くには、金田の物に少々がめついぐらいが丁度いいんだつて」

「はあ」

「それにね。次の係留地にある商業都市のマップをデータベースで検索して、もう田舎の質屋をピックアップしてあるの。出来るだけ高値で売りたいから何軒か回る予定だけど、メファも付き合つ？」

何か美味しいもの奢つてあげるよ、う、うん

実のところ、怖い思いを誤魔化す為に今まで声を出してはいたのか、愛子のお喋りが段々上擦つてくる。こちらは段々ワンパターンになつていく相槌を返しながら、彼女から預かったIDカードで幾つかの隔壁を開いて進み、ようやくブリッジの大きな扉の前に辿り着く。「それじゃあ開けますね」

「お、お願い」

愛子がメファーナの背中から前に出ようとしない為、例の「」とく自分が右手のカードをリーダーに通してIDをセキュリティに認証させた。ブリッジの扉が中央から割れて左右へスライドしていく光景が、矮小な人間二人を飲み込まんとする魔王の口にでも見えたのか、愛子は肩を強張らせながらメファーナの背中に隠れる。

「何も居ませんよ」

「ホントに?」

時雨の陰口を叩いたり金田の話をしていたときは打つて変わり、しおらしい口調で問い合わせてくる彼女の仕草に内心微笑する。

「はい。中に入りましょう」

あらゆるシステムが省電・待機モードに移行したブリッジの内部は想像通り冷暗としていたが、電子機器の僅かなLEDがあちらこちらで三々五々に輝きを放つていて、フロアの形状やシートの配置が把握できる程度には明るい。

「ライトをつけましょうか?」

「だ、大丈夫。メファが傍にいてくれるから。それに照明つけると記録が残っちゃうでしょ。あとで割り箸バカにからかわれるのは癪だし」

強情だなあ。怖いなら無理しなくていいのに、と思いながらも、自分が誰かの役に立つてることが凄く嬉しかった。表情を緩ませたまま愛子に腕を掴まれて、彼女のオペレーター席へと引っ張られていくメファーナである。

電子キーボードを展開させる出力ユニット。その下部に存在する収納を、メファーナの返したIDカードを使って愛子が開封する。

中に、暗がりで微かに煌めくシルバーの輪つかがぽつんと置かれていた。装飾の少ない細くシンプルな構造のブレスレット。

「あつたあつた」

あまりにも出来すぎたタイミングだった。

それは、愛子がブレスレットを手に取り「としたまことにその瞬間に起ころる。

アラートにも似た、けたたましい電子音。

「ひいやああつ！」

突如として鳴り始めたそれを真っ正面から浴びせ掛けられて死ぬほど驚いた愛子は、甲高い悲鳴を上げながら盛大に腰を抜かして尻餅をついた。

愛子からしてみれば全く「冗談ではない」。人間、自分の願いが成就する直前には必ず心のどこかに小さな隙が生まれる。増してや彼女の最も苦手としているこの雰囲気と、ホラー映画のようなそのタイミング。もはや誰が彼女の狼狽と醜態を責められようか。

「た、助けて神さまっ。アーメンソーメンチャーシューメン！」

「愛子さんどうか落ち着いて、それは私たちが食べた晩」はんのメニューです！」

鳴り響く電子音は、間違いなく愛子が使用するオペレーター席の端末から発せられている。

「それにこの音、靈的なものだと捉える必要はないと思います」

何度か深呼吸をして自分を落ち着かせたあと、のろのろと立ち上がった愛子は、恐る恐る端末を覗き込む。はりつめた緊張がこぢらにも伝わってきて、メファーナは口を閉じてそれを見守った。数秒の沈黙……。

「これは 救難、信号？」

電子音に愛子の大きな溜め息が重なる。彼女は先程の醜態を取り繕つように「ホンと一つ咳払いをし、シートに座つてディスプレイと電子キーボードを起動。その上に指を走らせ始めた。

「メファ、ライトつけて」

「あ、はい」

ブリッジを照らすライトの操作系は、出入口付近のタッチパネルか艦長シートのコンソールに設置されている。メファーナは取り敢えずここから近い艦長シートを選び、コンソールの傍らまで行つてスイッチを押した。ブリッジ全体にゆっくりと光が注ぎ込まれ、視界が急激に色を蘇らせていく。

「やっぱりそうみたい。でも一〇年位前から何もないこんな荒野のど真ん中で？」

長いあいだ暗闇にいたので少しばかり目が眩んだが、愛子の下へ戻るころにはもう慣れていた。

「まあ何処かの戦場から逃げ延びて来たと考えるのが妥当でしょうけど」

そう呟いた愛子と視線がぶつかり、さらに数秒の沈黙を経て思わず互いに吹き出す。最初からライトをつけていれば、愛子をここまで驚かせたりはしなかつただろう。彼女に頼られて気を良くし、そこのところを失念していた自分の責任だ。メファーナは申し訳ない気持ちになつた。

「こんなにビッククリさせてつ、全くどこの落武者よ！」

愛子は複雑な怒り笑いを浮かべながら、信号からさらなる情報を引き出すべく今一度電子キーボードを叩き始める。メファーナもまた、彼女の隣でそれを見守る姿勢をとつた。

電子音の正体が判明したと言えど、まだ油断は出来ない。救難信号を送つた兵士が致命傷を負つていたり、一刻を争うほど重大な敵軍の情報を抱えている可能性がある。

「NFAの所属は、え、え？」

人間が、心の底から信じられない光景と遭遇した場合、実は絶叫したり泣き喚いたりすることはまずあり得ない。何故なら真に想像を超える恐怖や驚愕に全てを支配された時、人間は体が止まつてしまふからだ。ふと愛子の表情を見た瞬間、メファーナは然とそれを実感した。

魔法で時間を止められたかのようにディスプレイを見つめたまま動かなくなつた愛子の、しかしその横顔が、みるみる冷たい蒼白に凍り付いていく。顔中の筋肉がほとんど使いものにならなくなつたせいからくに開かない唇の隙間から、辛うじて聞き取れる震えた声が、

「うそ。本物の、幽霊……」

「愛子さん」

「だつて、この機体コードは

メファーナの視線がディスプレイの一辺へ収束する。

愛子はまだ動けない。

その中で、

一ヶ月前に止まつてしまつていたメファーナの世界だけが、時間を掌握する魔法をうち払つて静かに動き始めた。

「どうか私につ、私に行かせて下さいキャプテン！」

『落ち着けメファ、冷静になれ。ひと月前をよく思い出すんだ。あの戦況で、彼女が生還出来たとは到底考えられない。本当は君にも分かつてんんだろ？』

分かつてゐる。

メファーナにも分かつてゐるのだ。一ヶ月前の戦闘をシミュレーションで幾度となく試行した。配置を変え、パターンを変え、薦にもするがる思いで、何度も、何度も。だがコンピューターが弾き出す生還確率は限り無く零に近いものだつた。認めたくなくて、心のどこかで否定し続けて、今まで生きてきた。

もうたくさんだ。

「一パーセントでも可能性があるなら、諦めたくないんです！」

『敵の罠かもしれないんだぞ』

「それでも確かめる価値はあります。もう見殺しにするのは嫌なんです。お願いです、私に行かせて下さい！』

口を開けば考えることなく声が勝手に言葉を紡ぎ出す。今まで閉

じ込めていた感情が、胸の奥から一気に溢れ出してきそうだ。

『兎に角早まるな。現在も慎重に議論が進められているから、正式な回答が出るまでは耐えるんだ』

心を囲う檻が軋んで音を上げた。外界から射し込んできた強烈な光が、メファーナの感情を熱くたぎらせている。

『時間は待つてくれないんです。一晩議論して何も答えが出なかつたのに、これ以上待つなんて出来ません！』

『もし罠だつたら、通信回線を開いた瞬間に強力なコンピュータウイルスを送り込んでくることが予想される』

「スタンドアローンの状態で接近します」

『次はNFA本体に大量の爆薬が仕掛けられているケースだ。類似する過去の記録や戦術・戦略データから推察すれば、想定し得る最大の破壊力は都市をまるごとひとつ消し飛ばせる規模だ』

『私が罠を仕掛ける側の人間なら、貴重な爆薬を、クインハルト一隻しか標的に出来ないような場所と状況で起爆するなんて効率の悪い真似はしません』

## おかえりなさい（4）

『確かにそれも一理あるが、しかしながら、その予測を逆手にとった純粹なサボタージュだという可能性も、』

「だから私がひとりで行くんです！」

搖るぎない意志を乗せて発した言葉。一瞬だけ、通信相手の口をつぐむ気配があった。

『……先の戦闘から、どうも胸騒ぎがして仕方ないんだ。やっぱり許可できない』

「ソルダーニヤの使用を許可して頂けないなら、せめてジープを一台貸して下さい。それだけで充分ですから」

ジヤラジヤラと音を立て、黒い鎖がメファーナの胸を締め付ける。だが同時に、この痛みがあるからこそ、目前に曇りのない世界が広がっていた。自分のやりたいこと、やらなければいけないこと、今はその全てがはっきり見える。

可能性がほとんど無くなつて構わない。それがゼロでないのなら、幾らだつて、何だつて賭けられる。沈んでしまつた未来のひとつを、失してしまつた大切なものを、取り戻せるかもしれない。

自分の命なんか、これっぽっちも惜しくはなかつた。

クインハルト NFAハンガー。

搬入ゲート前の壁面に設置された通信端末。ブリッジと繋がつたそれがホログラフィによる光学モニターを形成し、低い声を上げて熟考する時雨の姿を映し出している。彼と真つ直ぐに向き合つたメファーナは、端末のコンソールに置いた手のひらを強く握り込んで拳に変えた。

「どうかお願ひです。私に発艦の許可を。今度は、今度こそは、何もしない今まで諦めたくなんかないんです」

消えかかつた声に混じつて滲む嗚咽。もう自分でも抑制が利かない。活動を再開したマグマのようにどうしようもなく突き上げてくる

る強い思いに、己の身を小さく震わせた。

「メファ 嬢……」

メファーナの心身を案ずるリブリーの声が右隣から掛けられる。周囲には、この場に集まつた十数人の整備スタッフたちが、固唾を呑んでことの成り行きを静観していた。

『勘違いしないでくれ。 ソルダーニヤ の使用許可が出せないのは、NFA一機の損失を惜しんでいるからじゃない。メファーナ、俺達は君という一人の仲間を失いたくないんだよ』

クインハルト 最高責任者として、艦内の非常事態とクルーの逸りを鎮める為の方便。彼の発言をそう捉えることも出来るだろう。しかしメファーナは知つてゐる。この変わり者のキャプテンが、そんな上手い気の使い方が出来るほど器用な人間でないことを。

リブリーも時雨も本当に優しい人だ。それでも、譲れない思いと動じない決意が今の自分にはある。メファーナが口を開きかけたそのとき、

『お取り込み中のようだけど、少しよろしいかしらキャプテン』  
モニターにマルチタスクで展開したもうひとつウインドウ。自室で軽く腕を組んだ智世の姿が視界に飛び込んできた。

「母さん？」

『たつた今、会議の結論が出たわ。調査隊の派遣を許可するとの仰せよ』

これこそ自分の望む展開だつたが、余りに予想外な事態急変を受けてメファーナは一瞬呆気に取られてしまう。代わりに声をはり上げたのはモニター内の時雨である。

『嘘だろ！』

『事実ですね。この決定については、エルムご夫妻の打診に拠るところが大きかつたようね。飽くまで救助隊ではなく調査隊という辺りにいやらしさを感じるけれど』

『つたく何考てんだ、あのヘンタイ夫婦……！』顔に手を当てそう吐き捨てる時雨と、「流石は父上に母上！」嬉しそうに飛び跳ね

るワープリーである。

智世はさうに語を継いだ。

『何しろお一人は“あの機体”的設計者ですか』

それじゃ答えになつてないだろ、と不貞腐れる時雨だが、間もなくハツと何事かを思い出したような表情になつて身を乗り出す。

『何で俺より早くあんたに情報が行くんだ』

『あらお忘れ？ 私は今でもまだ本部の研究員よ』

『あー そうだつたな。最近籠りつきりで何も言つてこなかつたから、ついそれを忘れてしまつところだつたよ』

時雨がちょっと拗ねた。艦長の自分を差し置いて機密情報を入手してしまつ学者に嫉妬しているらしい。一方の智世は、画面内でむくれる時雨を意に介することのない実に涼しい顔である。

『もちろん行つてくれるわねメファ』

敬愛する母からお許しを頂けた。これほど心強いことがあるだろうか。鼓動が脈を打つて高鳴る。

『はいっ。お任せを。ぜひ私に先頭を務めさせて下さい！』

『いい返事です。よろしい、あなたに与えられた任務をしつかりと完遂しなさい』

ますますむくれていく時雨が、最後の抵抗とばかりに口を挟む。

『一人とも俺がキヤプテンだつて忘れてないよな。といふか調査任務なら、機体の特性上 ウイングラッサの方が適任』

『キヤプテン、野暮なこと言うな』

三つ目のウインドウが開いてフランジが姿を現した。その背景には光点の灯る精緻な端末群と、背後にあるNFAハンガーの機械的で無機質な壁面を映したディスプレイが確認できる。通信が繋がっているのは ウイングラッサ のコックピットだ。

『もし罠なら、あれが囮に使われている可能性もある。俺は上空から周囲を警戒しつつ、メファのバックアップにあたる』

『だああつ、分かつたよ、みんな好きにしろよもう！』

一喝して時雨が通信を切る。今度はちょっとではなく完全に拗ね

てしまつた。きっと艦長席に体操座りをし、コンソールの外枠を人差し指でツツーと々々しくなぞつているに違いない。そして向こうのオペレーター席で、いい気味だぞまあみると愛子がほくそ笑んでいるであらう事実はもつと間違いない。

時雨は、もうどうなつても知らないからな、とは決して続けなかつた。クインハルトの作戦行動、その全責任を背負う立場の人間として当然だらう。しかしメファーナには、それがどうしても彼の優しさに思えてしまう。

キャプテン。フランツ。母さん。みなさん、本当にありがとう。

空と地平線を溶かして揺らぐ蜃氣楼が、この世界の混沌を連想させた。幻影を強引に意識から切り離す。すると見えてきたものは、まさに無を象徴する荒野だつた。

逸る気持ちの裏側で、空虚という言葉が思考に歪みを走らせる。自分がこの先に願つて止まぬもの、それがどれほど夢にも等しい光景なのか。心に影を落とす暗く淀んだ負の痛みを、ひと月に渡つて味わってきた。その反動が拭いきれない不安となつて重くのし掛かつているのかもしれない。

それでもメファーナは、グリップを握る手を、コンソールに触れる指を、フットペダルへ掛ける足を、緩めたりはしない。送り出してくれたクルーたちの厚意を無駄にしたくない。そして何より、自分自身が諦めたくないから。

NFAの反応を確認。

心臓が早鐘を打つ。

距離。一二〇〇、九〇〇、六〇〇。

光学映像、最大望遠で展開。

思わず息を呑む。

走査。倍角。拡大。視覚補正。

バイザーデイスプレイに投影された機体。巨躯な胸部と肩部、大腿部。スマートな腕部と腹部。紫と群青を彩る全身にあらゆる銃火

器を武装し、単騎で敵拠点を制圧するという熾烈な使命を『えられた機人。右腕部の一部が破損しているが、見紛うはずがない。メファーナにとつて、それは力の象徴だったもの。

捕捉した生体反応は、三つ。

「三人……？」

バイザーディスプレイが展開した光景。それを視界に入れた瞬間、心臓を射抜くような鋭い衝撃が走った。全身が総毛立ち、血潮が逆流していまいそう。

『人質交渉、には見えないな』

目標のNFAとその周囲を警戒領域に捉えた状態で上空を旋回する ウィングラッサ。通信機を介し、ゆっくりと諭すような口調でフランツは言った。

『お前はこのひと月よく耐えた。何かあつたら、俺が必ず何とかしてやる。だから、あとはもうお前の好きなようにすればいい』

メファーナの衝動を、これから起こそうとしている行為を、フランツは全て悟っている。

『お前の信じるもの、俺も信じるさ』

心を囲んでいた檻が、風を受けた砂の城が如く崩れ去る。もはやメファーナの思考に歪みはなかつた。コックピットの開閉装置に手を伸ばす。

夢じゃない。

これは、夢じゃないんだ。

降り立つた大地の、ザラッとした感触。構わずメファーナは歩き出す。

下ろし立ての靴下も、

身体が、軽い。どんどん歩調が早まる。

愛用していたシャープペンも、

嫌疑や後悔や罪悪。心に課していたあらゆる枷を振り払つて、前へ前へと向かう自分の気持ちに引っ張られて脚を動かしていく。

お気に入りのリップクリームも、

ギリギリと音を立て、この胸を締め付けていた黒い鎖を引き千切りながら、メファーナは進む。

三九ドルと一五三六円の入った財布も、失してしまったはずの大切なものへ、沈んでしまったはずの未来のひとつへ近づいていく。

みんな戻つてこなかつた。

立ち止まる。

なのに、それなのに。

足元から視界の果てまで続していく枯渇の大地が世界の遠近感を曖昧にする。メファーナの心とは打って変わって、ここは驚くほど静かだつた。 ウィングラッサ の推進器が上空で風を切る音だけが耳に届いて 。

目の前に「あの子」がいた。

「……ユイちゃん」

彼女は風に靡く黒檀の長髪を片手で軽く抑えながら、美しい青銀をした大きな瞳でメファーナを見据えている。

「メファア。迎えに来てくれたんだね。ありがとう」

まるで鈴音のように凜と響く澄んだ声。もつ何年も聞いていなかつたと錯覚してしまえるくらいに懐かしい声。

「あの、後ろの一人は？」

「私の命の恩人。私がこうして生きてここに帰つて来られたのは、この二人のおかげなの」

彼女の背後で、遠慮がちにこちらへ視線を向けていた二人。メファーナより少し年上なくらいの男の人と、メファーナより少し年下に見える女の子。二人はお互いに顔を見合させてキョトンとする。その向こう。

片腕の一部を失つてなお、悠然と強固な存在感を放つ力の象徴。

N F A ジールヴェン

彼女の愛機。

「本当に、本物の、ユイちゃん……？」

彼女は微笑して、羽織っていたコートを僅かに開くと、メファーナの視線を自分の穿いているジーンズへ導くよう顎を引いた。それから顔を傾けて、上目遣いにもう一度微笑む。

脚、あるでしょ？ という意味だろう。

ああそうだった。これがコイちゃんだ。いつも自信に満ちていて、頼り甲斐がある、優しくて、凛々しくて、でもやつぱり可愛いところもあって。

視界が滲む。胸を締め付けていた黒い鎖は、もはや存在しない。決壊したダムのように感情が吹き出してきて、気がついたら彼女の胸に飛び込んでいた。

「うああ、コイちゃん、生き、生きて、生きてよかつた、ほんとう、よかつた！」

抱き止められて、彼女の手が頭の上にのせられる。「ほら、泣かないで。メファは私より歳上なんだから、しつかりしないと」

その手で優しく撫でてくれる。

「だつて、だつて、もう会えないんだつて思つて、私、」

嗚咽が止まらなくなつてしまつて上手く喋れない。

「もう大丈夫だから、ね？ ここに来るまでキヤプテンといろいろ揉めたでしょ？」

「うん、うん、いろいろ、」

「ごめんね」

「でも平氣です。やつと、コイちゃんに会えたんだから」

まるで迷子になつた子供が、ようやく母親に辿りついたときのようだ、あるいは自分の存在を見つけ出してもらつたときのような、そんな光景だつた。但し本来ならば彼女が迷子の子供で、メファーナこそが母親のはずだ。これでは立場がまるつきり逆である。

だがある意味ではこれは正しいのだろう。メファーナは彼女を失くしてしまつたと思つことで、望んでいた道標のひとつを見失つていたのだから。

やつと見つけた。

ようやく念えた。

「これでまた、自分は戦うことが出来る。死なない為の戦いではなく、生きる為の戦いを、もう一度。彼女と共に。」

「フランツにもお礼を言わないとね」

そう言って彼女が見上げた空。涙で濡れそぼつた瞳を擦つて視線を追う。推進器の低い唸り声。太陽の逆光を浴びて明けない夜明けを飛翔する漆黒のNFAが、その速度を上げながら垂直に翻つた。

「それから クインハルト のみんなにも」

私たちの元に戻つてくれたんだ。天の曉に掛かる彼女の声は、そんな思いを強くメファーナに抱かせる。

戦場から戻つてきたとき、母が優しく迎えてくれたあの言葉を、今度は自分が言つてあげなくてはならない。

「ユイちゃん」

「ん」

「おかえりなさい」

ただいま、と彼女はもう一度だけ微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7105f/>

---

ジールヴェン【携帯投稿版】

2010年10月8日13時28分発行